

資料編 ドイツの改訂指導要領関連資料

15.12. 現行のドイツの指導要領改訂の教科内容領域編成

§ 1 Balz(1996)の資料で示されたドイツ諸州指導要領にみる領域構成と時数配当 (Balz,1996 より岡出作成)

州	交付年 (施行)	領域	素材	時間・選択	
Baden- Württem- berg	1994 (1994) Real- schule 5-10年	個人種目	器械体操	5/6	43
			体操 / ダンス (7 年生以上 は女子のみ)	7/8	女子 32 男子 24
			陸上競技	9	16
			水泳	10	20
		プレイする こと-ゲー ム	バスケットボール	5/6	20
			サッカー	7/8	女子 28 男子 36
			ハンドボール		
			バレーボール	9	16
		選択領域	すべてのスポーツ種目	5/6	9
				7/8	12
				9	16
10	20				
・7-8年の球技は、女子2、男子3。 ・9-10年生では、個人スポーツ並びにゲーム内から各2 種目、10年生では男子は最低3種目の球技。 ・選択領域では、教師との話し合いに応じて、新たな 種目を加えたり、既習の種目の学習をさらに深めるこ とができる。					
Bayern	1993 (1994) 7-10年 Real- schule	基礎授業	体操 / ダンス 陸上競技 水泳 球技 (バスケットボール、 バレーボール) 器具での体操 ウィンタースポーツ	記載無し	
		選択授業	アルペンスキー バドミントン	・記載無し ・年間 14 時間は教師裁量の時間。	

		バスケットボール 巧技 アイスホッケー フライングアスケット/アイスダンス スピードスケート 健康志向のフィットネス サッカー 器械体操 ハンドボール ホッケー 柔道 カヌー 陸上競技 自転車 新体操 レスリング リュージュ ボート 水泳 ヨット 護身術 ラングラウフ ダンス テニス 卓球 バレーボール	
Berlin	1993 (1993/ 1994) 7-10年 Gesamt- schule Haput- schule Real- schule Sonder- schule	器械体操 体操/ダンス 陸上競技 バスケットボール サッカー ハンドボール バレーボール バドミントン ホッケー 柔道 ボート ラングラウフ アルパインスキー テニス	・70%が基礎スポーツ ・30%が選択領域。その10%がプロジェクト授業。 ・授業時数は記載無し。 ・基礎授業：バスケットボール、サッカー（男子）、器械体操、体操/ダンス（女子）、ハンドボール、陸上競技、バレーボール ・選択授業：バドミントン、サッカー（女子）、体操/ダンス（男子）、ホッケー、柔道、ボート、水泳、スキー、テニス、卓球

			卓球	
Brandenburg	1992(1992)	個人種目	体操 / ダンス 陸上競技 水泳 器械体操	<ul style="list-style-type: none"> ・できれば週 3 日、各 1 時間。 1 年間に個人種を 2 種目、球技を団体種目 2、打球技 1。 ・ 75% が教師が選択した種目、25% が選択種目
		球技	バスケットボール サッカー ハンドボール ホッケー バレーボール バドミントン テニス 卓球	
		選択種目	オリエンテーリング アクロバット 運動劇 スポーツ潜水 水辺スポーツ (カヌー、ボート) ウィンタースポーツ (スケート、スキー) 武道 (柔道、レスリング、フェンシング)	
Bremen	1982(?)		バレーボール サッカー ハンドボール バスケットボール ホッケー 陸上競技 器械体操 ダンス / 体操 水泳 打球技 (インディアカ、ハンドボール テニス、シュート、バドミントン、卓球等) オリエンテーリング トランポリン 柔道 フェンシング ボート	<ul style="list-style-type: none"> ・ 7/8 年 必修の種目には約 16 時間。65% は確定、35% はテーマに応じて設定可能。 ・ 9/10 年 1 種目に固定。 ・ 7/8 年 バレーボール、サッカー、ハンドボール、バスケットボール、陸上競技、器械体操、ダンス / 体操、水泳、打球技は、1 単元必修。テーマ別では左記の種目、あるいは条件が整うとそれ以外の種目を扱える。 ・ 9/10 年 個人種目並びに団体種目を最低 1 つ、各学年で 2 種目以上。
Hamburg	1994(1994) Sekundarstufe	グループ 1	器械体操 体操	<ul style="list-style-type: none"> ・ 5/6/7 年 週 3 時間、 ・ 年間 102 時間

	an Haupt-u. Realschulen, Gesamt- schulen und Gymnasien		陸上競技 ボート 水泳 ダンス	<ul style="list-style-type: none"> ・7/8/9年 週2時間、 ・年間 68時間 <p>34(22)時間はグループ1。そのうち、17時間が陸上競技、17時間が器械体操、体操、ダンス</p>
		グループ2	バスケットボール サッカー ハンドボール ホッケー バレーボール	<ul style="list-style-type: none"> ・34(22)時間が水泳 ・34(22)時間がグループ2 ・34(22)時間は、内容を固定しない。グループ1,2に対する理解を深めることやグループ3の種目を知ること
		グループ3	バドミントン スケート 柔道 カー ヨット スカッシュ テニス 卓球	
Hessen	1990(?) Grundschule Mittelschule (5-9/10)	必修	バスケットボール サッカー ハンドボール バレーボール 器械体操 陸上競技 新体操 打球技：バドミントン、テニス、卓球 水泳 ダンス	<ul style="list-style-type: none"> ・5-8年生は年間、最低 18時間は陸上競技と器械体操を教える。 ・7年生は、体操/ダンス 12時間、ハンドボール 12時間、サッカー 6時間、打球技 12時間、自由裁量 18時間。 ・8年生は、体操/ダンス 12時間、ハンドボール 6時間、サッカー 6時間、バレーボール 12時間、バスケットボール 18時間、自由裁量 18時間。 ・5-8年生では、全体として年間 108時間。
		選択	ホッケー 柔道 オリエンテーリング リュージュ ボート スキー	
Meckenberg- Vorpommern	1991(1991/1992) Hauptschule Realschule Gymnasium 5-9 or 5-10	必修	陸上競技 器械体操	
			球技	<ul style="list-style-type: none"> ・ハンドボール、サッカー、バスケットボール、バレーボールの選択。 ・5年生で1種目、人的、物的条件を考慮し、7年生以降は2種目を教師が選択する。
			体操(女子)	

			筋力トレーニング並びに武道	・7年生以降は男子のみ。特に、柔道やレスリングといった一般的な筋力トレーニング
		選択	水泳 ウィンタースポーツ バドミントン テニス 卓球 ダンス 男子の体操 7年生以降の女子の柔道	・必修種目の学習を深める、あるいは、余暇的価値の高い素材を選択する。
Niedersachsen	1985(?) Realschule	必修	器械体操 陸上競技 オリエーティング 水泳 体操 ダンス	
			球技： バドミントン バスケットボール サッカー ハンドボール ホッケー テニス 卓球 バレーボール	・3ないし4種目。1種目は打球技。
		選択	武道 水辺スポーツ ウィンタースポーツ	・9-10年生は、必修の授業があくらの枠を越えた学習集団（嗜好グループ）で行われる。その際、各自に集団種目と個人種目の双方を履修させる。また、ニュースポーツを知らせる。 各嗜好グループに2種目を提供する。なお、嗜好グループは、半年で組みかえる。 ・全学期で水泳を40時間という規定以外は、時間数に関する記述はない。
NRW	1980/1981 (1981/1982) 全学校段階並びに全学校形態	必修	陸上競技（オリエーティングを含む） 器械体操 体操/ダンス	・8あるいは10年まで必修。15時間、あるいは半分の単元で実施されなければならない。

			水泳	
			ゲーム	予備的ゲーム
		選択必修	打球技	・バドミントン、テニス、卓球、バレーボールのいずれか
			投ゲーム	・バスケボールとハンドボールのいずれか
			ゴールゲーム	・サッカーとホッケーのいずれか。
		補足的選択	武道	・予備的武道 ・フェンシング ・柔道
			水辺スポーツ	・カヌー ・ボート ・全領域、種目ともに年間を通して 15 時間（あるいは半分の 7-8 時間）教えられなければならない。 ・上級学年では必修の拘束がなくなる。例えば、5-10 年生では 22 単元、330 時間が裁量に任される。
Rheinland-Pfalz	1984(?) Hauptschule Realschule Gymnasium 7-9/10 年生		バスケボール サッカー ハンドボール バレーボール 体操/ダンス 陸上競技 水泳 器械体操	・バドミントンのような選択必修種目は、指導要領に記載されていない。 ・8 年生は、年間約 75 時間。 内訳は、球技 52 時間（約 35%）、体操/ダンス 15 時間（約 10%）、陸上競技 38 時間（約 25%）、水泳 15 時間（約 10%）、器械体操 30 時間（約 20%）（計 150 時間）。 ・7-9/10 年生では球技が 4 種目提供される。そのうち、1 種目は既知のものを、2 種目は未習のものとする。また、4 種目は簡単なルールで行う。な、その選択は、教師あるいは生徒に任される。
Saarland	1993(?) Allgemein- bildende Schulen 5-10		器械体操 体操 陸上競技 水泳 バスケボール サッカー ハンドボール ホッケー 卓球 テニス バドミントン バレーボール これら以外にも、ブリッジボール、フットボール、リングテニス、ファストボール等を行える。	・4 週間で 6 単元（24 週間あるいは 72 時間）は、必修で計画される。残りの時間は、構造化されていない領域となる。 ・必修の時間は到達目標レベルに応じて、1 種目に 4 週間（12 時間）あるいは 8 週間（24 時間）が配当される。到達目標レベル 1 は 8 週間で、到達目標レベル 2 は 16 週間で達成されなければならない。到達目標レベル 3 は、24 週間で達成されるべきものである。 ・左記の種目が必修領域で、最低、到達目標レベル 1 に達しなければならない。しかし、一部はより高い到達目標レベルに達してもよい。 ・選択は、到達目標レベル 3 を要求される種目（個人種目 1 とバスケボール、ハンドボール、サッカー、バレーボールの 4 球技）と到達目標レベル 2 の種目（個人種目 1 つと球技 1 つ）、 ・構造化されていない領域は、自由裁量であり、一層

				学習を深めることや不足分を補うこと、あるいはスポーツ促進授業や運動性特質のトレーニングや導入の時間として活用できる。
Sachsen	1992(1992) Mittelschule 5-10年生	中核領域	器械体操 体操 / ダンス 体操 / 対人格技 (5/6年) 筋力スポーツトレーニング / 対人格技 (7/8年) 柔道あるいはレスリング 陸上競技 バスケットボール サッカー ハンドボール バレーボール 水泳	・8年生は90時間。その内60時間が中核領域、30時間が選択領域(ファーストボール、柔道、レスリング) ・8年生90時間の内、1-2種目の球技で22時間、陸上競技に13時間、器械体操で12時間、体操/ダンス(女子)で13時間、筋力スポーツ/対人格技(男子)13時間、選択領域30時間。
		選択領域	バドミントン スケート ファーストボール 余暇スポーツ ホッケー オリエンテーリング 水泳 テニス 卓球 ウィンタースポーツ	
		選択コース	スキー 水泳	
		スポーツ促進授業		
		プロジェクト授業		
Sachsen-Anhalt	1993(1993)	必修	陸上競技 器械体操	
			球技	・第一球技を5年生以降実施。ハンドボール、バスケットボール、サッカー、バレーボールから選択 ・第二球技は、7年生以降実施。ハンドボール、バスケットボール、サッカー、バレーボール、ホッケー、ファーストボール、卓球、バドミントンから選択。
			武道	柔道/レスリング

			体操とダンス	男子は 5-6 年のみ
		必修選択	水泳 ウィンタースポーツ 体操とダンス バドミントン テニス 卓球	・物的、人的条件、伝統並びに生徒の興味を踏まえて、各学年、全授業時数の 1/4 を配当。 ・体操とダンスは、男子で 7-9/10 年まで。
Thüringen	1991(1991/1992) Realschule Gymnasium 5-12(13)	必修	器械体操	・ 5-7 年生 ・ 全授業時数の各 50%を必修の授業と必修選択の授業に配当する。
			体操 / ダンス 陸上競技 水泳 第一球技	
			器械体操 体操 / ダンス 筋力スポーツ / 武道 陸上競技 水泳	8-10 年生 ・ 全授業時数の 各々 1/3 を必修の授業、必修選択の授業、選択の授業に配当する。
		選択必修	選択領域 ウィンタースポーツ	・ 5-7 年生 ・ 全授業時数の各 50%を必修の授業と必修選択の授業に配当する。
			球技 1 種目 体操 / ダンス 筋力スポーツ / 武道 選択領域 水泳	・ 8-10 年生 ・ 全授業時数の 各々 1/3 を必修の授業、必修選択の授業、選択の授業に配当する。
選択授業	基礎授業の内容並びに付加的に選択したスポーツ種目	・ 8-10 年生の全授業時数の 各々 1/3 を必修の授業、必修選択の授業、選択の授業に配当する。		

注) この後、Niedersachsen(1998)、NRW(1999)、Rheinland-Pfalz(1998)、Schleswig-Holstein(1997)の指導要領が公布されている。

§ 2 Balz(1996)以降に公布されたドイツ各州並びに Bayern、Hamburg の指導要領にみる目標記述

州	学校段階	目標
NRW(1999)	ギムナジウム上級段階	運動、プレイ並びにスポーツを通しての発達促進並びに運動文化、プレイ文化並びにスポーツ文化の開示 学校段階を越えた必修教科としてのスポーツ授業は、ギムナジウム上級段階の教育的責務と陶冶責務の達成にとって必要不可欠である。スポーツを行う際に生み出される状況は、三つの課題領域を除き、この陶冶課程の中で固有の経験を保証し、学習を可能にする。直接的な身体的、感覚的経験や運動、プレイ、スポーツを行っている際に要求をかけられること並びにそれと知的に取り組むことにより、ギムナジウム上級段階で求められている、社会的な責務の中で人格を発達させていく

<p>Bayern(1992)</p>	<p>5 - 1 1 年 生</p>	<p>ための援助を与え、科学入門教育へと導いていくという、一般的責務の実現に寄与することになる。</p> <p>スポーツ授業の目標並びに内容は、各学年段階、あるいは選択スポーツ授業のスポーツ種目 / スポーツ領域毎に、1 健康、2 フェアネス、共同、3 環境、4 達成すること、形成すること、プレイすること、の4つの学習領域に即して示される。学習領域4の達成すること、形成すること、プレイすることが、中心的な学習領域である。そこでは、単に、1 健康、2 フェアネス、共同、3 環境という学習領域の目標並びに内容を達成させるのみではなく、特定のスポーツ種目と結びついた、独自の内容と目標が達成される。</p> <p>指導要領の各章では、まずは、目標が記される。この目標では、授業の中で生徒達が到達すべき発達過程が明確に記される。この過程では、生徒の人格形成という観点からみて学校の学習で重要になる、(1)知識、(2)能力と応用、(3)創造的思考と形成、(4)価値志向、という四つの教授学的重点項目が区別される。これらの教授学的重点項目は互いに関連し合っている。しかし、目標として記されると独自性を備えている。</p> <p>その後、内容が記される。内容は、(特に、概念、事実、テーマ領域、データといった)教科の視点と(特に、思考様式、過程、価値観、さらにはそれらと並び素材の正確な提示といった)教授・学習の視点を考慮して記される。</p> <p>スポーツ授業では、単に運動(運動性の局面)のみが重要な役割を担うのみではなく、省察や自覚(認知的局面) 体験と感ること(情緒的局面)並びに従事し、取り組むこと(動機付けの局面)も重要な枠割りを果たす。範例的なものと基礎的なものを踏まえて、学習領域間の関係や多様な関連性を生徒達に明確に示すよう、配慮されなければならない。スポーツ教師の専門的能力と演示は重要である。スポーツ教師は、(例えば、音楽、芸術、生物学、宗教 / 倫理、ドイツ語、物理学といった)他教科の教師たちや(例えば情報交換の夕べといった機会に)父兄たちと、さらに(例えば、健康やスポーツに関連している施設といった)学校外の諸制度と関わらなければならない。プロジェクト授業は、単にスポーツ種目や学習領域を越えるものだけではなく、教科の枠を越えるテーマが扱えるために、このような共同作業を可能にする。それは、例えば、次のものである。</p> <p>5年生 楽器演奏付きの簡単な民族ダンス(Mu5))</p> <p>6年生 持久性トレーニングが健康に与える効果(B10)</p> <p>11年生 応用バイオメカニクス(Ph11)</p> <p>全学年 スポーツと環境(B,Ek)</p> <p>それにより、全体的な授業の実現という目標のもとで、様々な学習領域や教科を関連させたりすることが可能になる。</p>
<p>Hamburg (1994)</p>	<p>中等段階</p>	<p>スポーツ授業の中心的課題は、生徒がスポーツの中で行為できる能力を発達させ、向上させることである。</p> <p>この課題を実現するために、スポーツ授業は、スポーツ種目に拘束されていない多様な運動形態とスポーツ種目の範囲内で技術を用いたり、ルールに即した行為ができる能力を育成する。さらに生徒は、スポーツの中で得た人格的経験を自分自身で、あるいはグループで知覚し、それに省察を加えることを学習すべきである。それは、新しいスポーツを発達させ、スポーツ活動を行うために必要な判断が自分自身でできるようにしていく前提条件である。</p> <p>スポーツ授業は、開かれた課題を通してこの過程を推進させ、運動を自主的、発見的に生み出せる能力を育成すべきである。習得された技能は、確定された形態とルール内で創造的活動を可能にする基礎となる。</p>

		<p>スポーツ授業の担うより広範な課題は、相互援助や配慮、オープンで、暴力的ではなく、フェアな抗争を可能にする、社会的な学習目標の達成に寄与することである。そのような社会的行動は、自主的な練習により獲得されると共に、豊かなものになっていく。</p> <p>スポーツ授業はさらに、プレイ、運動と運動創り、フェアな競争を促し、維持することを通して、人格の発達に寄与する。スポーツ授業は、個人的な能力にふさわしい達成をあげたり、それを越えていく、生徒の強い意志を培う。</p> <p>スポーツ授業の緊急の課題は、生徒の健康を促進することであり、健全な生活を営むために必要な基礎を培うことである。適切な運動刺激や機能的刺激を通してポジティブな身体の発達が促される。多様な生徒の要求や負荷とリラックス、緊張と脱力の交代は、成長、成熟過程を促すと同時に、教室での授業や専門的な授業に見られる座業への保障機能を備えている。</p> <p>スポーツ授業は、努力することと満足感を意識させることにより、安寧を保障し得る。そこには、自分自身の身体的達成能力の限界に対する洞察や機能的（健康的）なスポーツ運動と日常運動と非機能的（非健康的）なその違いに関する知識も含まれている。</p> <p>授業外では、付加的なスポーツの提供や競技会を実施すること、さらにはクラブとの共同関係を通して、学校生活を豊かにすべきである。スポーツ授業は、余暇生活や学校卒業後に自ら目標を設定してスポーツを行うように生徒を促すことを通して、その実現を促すものである。その前提条件は、積極的にスポーツ授業や学校スポーツづくりに関与することを学習することである。</p>
<p>Schleswig-Holstein (1997)</p>	<p>中等段階</p>	<p>基礎学校のスポーツ授業の指導要領から話を進めれば、生徒達は以下のテーマ領域で多様な運動経験を得ることになる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運動を通して表現する。 ・プレイする。 ・器具で、あるいは器具を用いて運動する。 ・走る、跳ぶ、投げる。 ・水中並びに水辺で動く。 <p>これらテーマ領域の基本形態が工夫される。基礎学校の備えている可能性を踏まえれば、水泳の中での経験を保証できる。スポーツの中での健全な運動行動とは何かに対する初歩的な理解も可能である。多様なダンス遊びや運動遊びは、スポーツ授業の中でも提供できる。しかし、それらは、基礎学校の他の授業でも提供可能である。中等段階の指導要領では、基礎学校で示されたこれらテーマ領域が、より洗練された形で提供される。そこでは、スポーツ的な次元が一層強調されることになる。</p> <p>学校スポーツは教育的である。それは、若者の全体性を志向した陶冶と教育の中核を構成している一要素である。学校スポーツは、適切な配慮が加えられることにより、中核的問題領域への取り組みによって保証される目標の実現に寄与する。教科の特殊性故に、学校スポーツは、他教科と関連しながら、その実現に向けて、他に代替しえない、固有で不可欠な貢献を為しえる。</p> <p>スポーツ授業の中核に据えられるのが、運動である。それは、プレイとスポーツの中で形を整える。運動は、生徒達がルールに則してスポーツ種目ができる能力を保証する。スポーツ授業は、さらにそれを越えて、生徒達が運動欲求を充足する機会を保証する。スポーツ授業が午前中に有意義に実施されれば、他教科の引き起こす運動不足を解消することに貢献する。学校スポーツは、生徒の運動能力や感覚を刺激し、それを向上させる。</p> <p>（体験、冒険、アドベンチャーとしてのスポーツ、競争と達成としてのスポーツ、身体的なフィ</p>

フィットネス維持のためのスポーツ、楽しみや喜びとしてのスポーツといった) 様々なスポーツの意味は、学校スポーツの中で経験されるべきである。教育的学校スポーツは、一人一人の生徒が自己像を発達させることに貢献すべきである。その限りでは、学校スポーツは、様々な意味を保証すべきであるし、それにより余暇生活の形成に不可欠の貢献をなすことになる。

子どもや青少年の人格形成、特に自己感情と肯定的な自己像の発達には、精神的なものと同様に、プレイとスポーツを通して尊重される身体的な次元が効果的である。その際、主観的に体験された個人の達成能力や個人の学習の伸び、達成能力の違いの知覚は、現実的な自己評価の発達にとって重要な役割を担っている。スポーツ授業は、様々な競争場面を提供することにより、達成を比較する機会を提供する。学校スポーツは、教育学的に配慮された競争場面を設定することを通して、成功体験や失敗体験を克服することを学習する機会を提供しえる。特に、グループ内でプレイやスポーツの中での勝敗を建設的なものにしていくことが重要である。

スポーツという経験空間は、中核問題という意味での社会生活の反映といえる。その限りでは、社会的行動への自動的な転移を期待できないとはいえ、スポーツ場面の中では共同や共同責任が自覚され得ることになる。

環境保護と健康は、スポーツ授業のテーマである。健康教育では、健康をもたらす運動習慣を身につけさせるだけではなく、あらゆるレベルで、健康な生活を営む態度と健康を促進するトレーニングに関する知識を保証していくことが重要になる。

共に生きている人々の健康を守ることもまた、健康教育の一部である。ともにスポーツを行っているパートナーに対する配慮や相互援助は、スポーツ的行動の現れである。

自然の中で行われるスポーツは、明らかに、人間の手による環境への脅威である。学校スポーツは、スポーツを行う際に自然と優しく関わる方法を教えるべきである。それは、スポーツ授業の中で生徒達に自然を経験、体験させることにより可能になる。

スポーツ授業は、社会学習にとって実りある場を提供する。特に、プレイの中では、争いが肌身に迫って経験できる。そのため、争いの解決方法がテーマ化され、平和的でフェアな行動が学習される。ここでは、問題や体験志向の学校スポーツにみられる危険を共同して解決していくことと同様に、趣旨が通るように説明できる能力が重要になる。

その際、この処理の仕方が、例えば、平等や異文化理解、障害を踏まえた個々人の関わり方のモデルとして重要になる。スポーツ授業では、異文化の青少年や成人を排除することはできない。

異文化のスポーツとの出会いは、異なる形態に対する理解を促す。したがって、学校スポーツは、文化的な生活の構築に寄与することになる。

スポーツ授業は男女共習で実施され、男女平等の実現に貢献する。しかし、所与の条件を考慮して、男女のスポーツ能力の向上に支障をきたすようであれば、男女別習の措置が取られなければならない。

スポーツ授業に典型的にみられる行為志向は、後々まで認識学習に効果を発揮する。(トレーニング、健康、学習過程、バイオメカニクス、相互作用、意味付与、身体の実験としてのスポーツ、相互作用とコミュニケーションを営む場としてのスポーツといった) 多様な現象を説明するには教科の枠を越えた授業が必要になったり、様々な教科の共同が勧められる。

学校スポーツは、学校祭やスポーツ祭、スポーツをテーマとした遠足、作業グループ、生徒のクラブ、プロジェクト等を通して学校生活を豊かなものとするとともに、全構成員の学校に対する強力なアイデンティティ形成に貢献する。

<p>Niedersachsen (1998)</p>	<p>学校段階 を越えた 基本原則</p>	<p>学校スポーツでは、教科の担う課題は、ニーダーザクセン州の学校法に規定されている陶冶課題から生み出される広範な教育的観点と関連づけられる。そのため、学校スポーツでは、成長期の人々の人格形成が重要な課題となる。そこには、特に、社会的に重要な価値へと方向付けていくことが重要になる。学校スポーツは、特に、強烈な情動的体験や豊かな意味ある経験を伴う学習の機会を提供することになる。</p> <p>学校スポーツの中核的課題は、子どもと青少年の運動能力を発達させることである。学校スポーツの課題は、自分自身の運動能力を向上させ、安全に運動できる能力をできる限り高める機会を提供することにある。運動能力を向上させることを通して学校スポーツは、成長期の子どもたちの身体的、精神的、情緒的発達に寄与する。運動することは、また、自分自身の身体を体験したり、経験することや意図的に自分自身の身体に関わることを可能にする。したがって、学校スポーツではそのような体験や経験を取り上げ、成長期の子どもたちの発達段階に即して、できる限り広範な健康観を育むことが課題になる。</p> <p>それ以外にも、学校スポーツは、伝統的なものと今日的なものを合わせた運動文化をその関連領域としている。運動文化は、確かに、制度化されたスポーツ種目によって方向付けられている。しかし、決してそれに尽きるものではない。運動文化は、意味、スポーツ種目、行為形態並びに構想の多様性にその特徴がある。そこには、多くの人々の抱いている運動に対する欲求や関心が反映されている。</p> <p>学校スポーツは、スポーツを行う際に経験可能な多様な意味を生徒たちに経験させるべきである。例えば、共同生活、危険、冒険、形成、あるいは記録の向上や結果の比較といった観点のもとでスポーツを経験する機会を提供すべきである。その際、既存の運動、プレイ並びにスポーツの形態が用いられるとともに、それらを変化させ、新しい形態を生み出す機会を提供すべきである。学校スポーツは、将来ある生徒たちに常に変化する運動文化の形成過程とともに関与できる能力を育むべきである。そのためには、既存の諸形態の違いや多様性を判断できる能力を育むことが必要になる。</p> <p>したがって学校スポーツは、運動教育に関する課題やスポーツに関連した課題を担うに留まるものではなく、健康教育、社会教育、環境教育並びに余暇教育に不可欠な要素であるとともに、青少年に適した学校生活を保障していくために不可欠な要素である。なお、学校スポーツの運営に際しては、発達段階をふまえて、一般的で広範な倫理的諸原則との関連や個人的行為を方向付ける諸原則を確立していくことができる。</p>
<p>Rheinland-Pfalz(1998)</p>	<p>中等段階</p>	<p>多くの生活領域にみられる急速な社会変化を前に、陶冶概念を新たに、幅広く捉えることが必要不可欠になっている。新しい陶冶概念のもとでは、学校教育の課題は、自己決定と社会的責任の緊張関係を保ちながら、生活に立ち向かっていく能力を保証していくことである。それに必要な能力は、事象と関わる能力、方法論的能力並びに人と関わる能力である。</p> <p>これら諸能力は、運動、認識、社会領域での人格の発達を促す、全体的な能力といえる。それは、教科の枠を越えて活用可能であるべきであるし、学校外の領域でも活用可能なものであるべきである。</p> <p>このような陶冶概念の拡大に伴い、中等段階の教科スポーツには、生徒たちに対してスポーツの行為能力を発達させるという課題が設定される。</p> <p>教科スポーツ独自にみられる運動や行為への志向性は、生徒たちに直接経験を可能にする。したがって、教科スポーツは、陶冶の実現に向けて、他では代替不可能な貢献をする。</p> <p>「スポーツ」は、今日の社会ではきわめて幅広い概念として捉えられている。それは、大衆スポ</p>

ーツと競技スポーツの両極の間を運動、プレイ並びにスポーツというコンテキストの中で常に修正され、差異化されている。学校スポーツが授業でスポーツを取り上げるというのであれば、このような変化の妥当性を教育学的基準に即して検討しなければならない。

スポーツ概念の変化を考慮するには、伝統的なスポーツ種目への固執を放棄し、幅広いスポーツ種目や今日的な運動形態を取り込むことが好ましい。さらに、スポーツ授業をスポーツという現象に多視点的に関わるものにしていくべきだといえる。

学校スポーツの内容は、以下のスポーツ教育学の視点を志向すべきである。

- ・達成（競技。成果）
- ・緊張／プレイ（危険。冒険）
- ・印象（身体の経験）
- ・健康（フィットネス。安寧）
- ・表現（再現。形成）
- ・共同（社会的学習。環境）

その際、教育的な視点は、スポーツ種目固有に強調されることもできるし、互いにそれらを結びつけることもできる。

多様な意味は、単に一授業や一内容で実現可能なものだと考えるべきではない。それは、むしろ、長期的に実現すべき課題と捉えるべきである。それは、生徒たちが学校在籍中に（例えば、走ることを達成や健康、印象といった視点のもとで行えるというように）様々な内容が多様な視点のもとで実施可能であることを経験すべきことを意味している。

§ 3 現行のドイツの指導要領（5-10年生）にみる健康教育並びに知覚教育の位置づけの有無
 (Balz、1996より岡出作成)

州	公布年	健康教育	知覚教育	知覚教育の内容、位置づけ
Baden-Württemberg	1994			感覚の経験、身体の経験、モノの経験
Bayern	1993			運動体験。身体感覚。身体に対する意識。脱力能力。
Berlin	1993			運動経験
Brandenburg	1992			運動学習領域に組み込まれている
Bremen	1982			運動教育の自己の経験内に位置づけられている。しかし、知覚教育は、位置づけられていない。
Hamburg	1994			探索する(Erkunden)という課題形態に位置づけられている。
Hessen	1990		×	記載無し

Meckenburg-Vorpommern	1991			一般的部分、必修の全スポーツ種並びに水泳とダンスで目多様な身体の経験と運動経験があげられている。
Niedersachsen	1985			運動教育、身体の教育(Körpererziehung)並びに環境教育には、陸上運動、オリエンテーリング、体操並びにダンスが貢献すべき。
NRW	1980/ 1981			運動を通してのモノと身体の経験に位置づけられている。自己の経験のみが欠落している。
Rheinland-Pfalz	1984		×	位置づけられていない。
Saarland	1993			自己観察と他者観察。特に、運動の失敗や運動の違いを知り、記述し、説明できる。
Sachsen	1992			健康教育内に位置づけられている。
Sachsen-Anhalt	1993			陸上運動/オリエンテーリング領域のみに記述がみられる。そこでは、持久走を通して身体を経験したり、環境に対する感受性を高めることが求められている。
Thüringen	1991/ 1992			生徒たちは、陸上運動で身体の経験や運動経験を積む。

- 1) 健康教育とは、次の定義に基づく。すなわち、学校スポーツは、健康を意識したスポーツ活動の実施並びに健康的な生活に寄与する。
- 2) 知覚教育とは、次の定義に基づく。すなわち、学校スポーツは、スポーツを行っている際の環境並びに自分自身の身体を敏感に近くすること並びに自己の経験に寄与する。

15.13. NRW州

15.13.11981年スポーツ科指導要領の特徴

主導理念としてのスポーツの中の行為能力

具体的な目標群

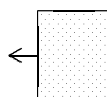
小学校から高校までのカリキュラムの一貫性と選択可能性

スポーツ種目ベースのカリキュラム

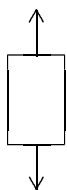
§ 4 現行 NRW 指導要領の領域構成 (Der Kulturredminister, 1981, 23)

学年段階 スポーツ領域/スポーツ種目	初等段階				中等段階						中等段階		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1 陸上運動	■	■	■	■	▲	▲	▲	▲	▲	▲	◐	◐	◐
オリエンテーリング					◐	◐	◐	◐	◐	◐	◐	◐	◐

┌──┐ =学年を指定した、半強制的必修



← ┌──┐ ──> =学年幅を認めた選択単位



=科目-ツ種目の枠を越えて準備できる単位

*週 3 時間、年間 35 週間で計算すると、初等段階全体で 420 時間の教科科目-ツの授業時数が確保できる。1 単位 15 時間の必修単位を 20 単位設定すれば、300 時間分の内容が確定することになる。したがって、残り 120 時間が各 15 時間の 8 つの単位によって選択に供されることになる。中等段階 で選択に供される 22 単位も、同様の計算によって算出される。

15.13.2 「スポーツを通しての健康教育」(初版1987年)手引き書にみる健康教育の内容と方法

1)健康概念そのものの問い直し

・健康を単なる身体の生理的機能に限定しない。環境や心理的状态との関係概念として把握する。

2)健康概念の問い直しによって提示されているテーマと内容

(1)生徒たちは、運動時における自分自身の身体の反応や心理状態を知覚、経験、把握しなければならない。ここでは、特に以下の諸点が重要になる。

- ・脱力-緊張(Lockerheit-Anspannung-Verspannung-Entspannung)
- ・元気-披露-疲労困憊状態-休養(Frisch-Müdigkeit-Erschöpfung-Erholung)
- ・強さ-弱さ(Kraft-Schwäche)
- ・安静時の脈拍-始時の脈拍数-負荷時の心拍数-回復時の脈拍数
- ・静かな呼吸-深い呼吸-せわしい呼吸(hastiges Atmen) - (Preßatmung)
- ・身体が暖まること-汗をかくこと-身体が冷えること-凍えること
- ・支障のないコーディネーション(stimmige Koordination)-コーディネーションの難しいこと(eschwerte Koordination)-うまくコーディネートできないこと(unsimmige Koordination)-コーディネイトできないこと(gestörte Koordination)
- ・痛み(特に脇腹の痛み、けいれん、筋肉痛、過度の刺激、傷害)
- ・喜び-悲しみ-怒り-激怒
- ・脱力状態(Gelöstheit)- バランスの取れていること(Ausgeichenheit) - (Eustreß)-ストレスのないこと(Distreß)
- ・楽しみのないこと(Lusutlosigkeit) - 生き生きしていること(Vitalität) - 元気すぎること(Überaktivität)
- ・満足-不満足-失望-あきらめ
- ・はしゃぎすぎ(Übermut) - 自信(Zuversicht) - 臆病(Zaghaftigkeit) - 不安(Angst) (Der Kultusminister des Landes NRW,1989,p.4)

(2)生徒たちは、全参加者の安寧に対して達成可能な意義の中でも運動行為が生み出す社会的関連について知覚、経験、把握すべきである。ここでは、特に以下の諸点が重要になる。

- ・社会的な組み入れ - 社会的排除
- ・承認－無関心－拒絶
- ・共同(Miteinander)－一緒にいること(Nebeneinander)－敵対(Gegeneinander)
- ・個人的な善悪の判断基準(individuellen Gütermaßstäben)－社会的な善悪の判断基準(sozialen Gütermaßstäben)
- ・寛容－非寛容
- ・フェアネス－アンフェアネス
- ・心遣い(Fürsorge)－親切心(Hilfsbereitschaft)－配慮(Rücksichtnahme)－軽率(Unachtsamkeit)－危険にさらすこと(Gefährdung)

(3)生徒たちは、自らが生活している環境を運動や運動遊び、スポーツを健康的に営むために重要な意義をもつ条件として知覚し、経験し、把握する。ここでは、特に、次のような運動を可能にする条件とそれを制約する条件が重要になる。

- ・様々な運動空間
- ・様々な気候的条件
- ・様々な環境条件
- ・環境に優しく接する責務を負うという条件
- ・事前に自ら安全性を確保すること(Der Kultusminister des Landes NRW,1989,p.5)

3)初等段階で設定されている重点的課題

(1)運動、運動遊び並びにスポーツ時における心理的、生理的安寧

・「学校で教えるスポーツ種目にとって重要な基本的な運動の基本形態と並んで、規範化されたスポーツ種目の運動形態とは無関係に試行錯誤や経験を可能にする状況を提供しなさい」(Der Kultusminister des Landes NRW、1989、p。12)

・「子ども達が自分自身の身体の反応を知覚し、理解できるように援助しなさい。また、自らの身体の反応に対して健康的に対応できる可能性を保証しなさい。」(Der Kultusminister des Landes NRW,1989,p.13)

(2)他人とともに運動、運動遊び並びにスポーツを行う際の安寧

・「すべての生徒達に学校スポーツ内で社会的つながりの経験や相互信頼関係の経験、さらには社会的に安心できる経験を保証しなさい。他人の心理的、社会的安寧に対して責任をもてる素地を彼らに培いなさい。」(Der Kultusminister des Landes NRW,1989,p.14)

(3)運動、運動遊び並びにスポーツをする際の自由の中での安寧

「屋外で運動、運動遊び並びにスポーツを行い、運動環境に対する責任感を培うあらゆる可能性を活用しなさい。」(Der Kultusminister des Landes NRW,1989,p.14)

他人とともに 運動、運動遊び並 びにスポーツを行 う際の安寧 ・共同－一緒にいること－敵対	運動、運動遊び並びに スポーツを行う際の生 理的、心理的安寧 ・支障のないコーディネーション	屋外で行う 運動、運動遊び 並びにスポーツ を行う際の安寧 ・様々な運動空間
---	---	--

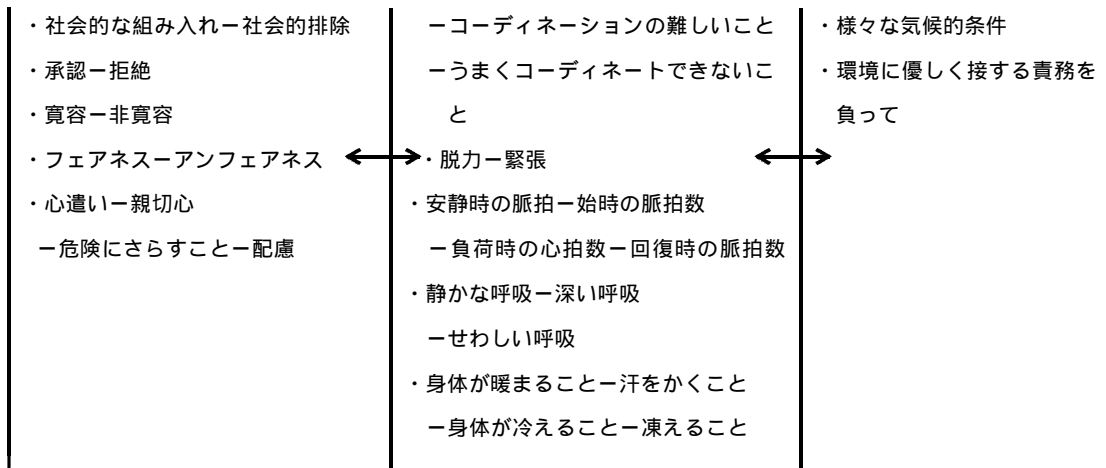


図 初等段階の学校スポーツで行う健康教育の重点的課題
(Der Kultusminister des Landes NRW,1989,p.14)

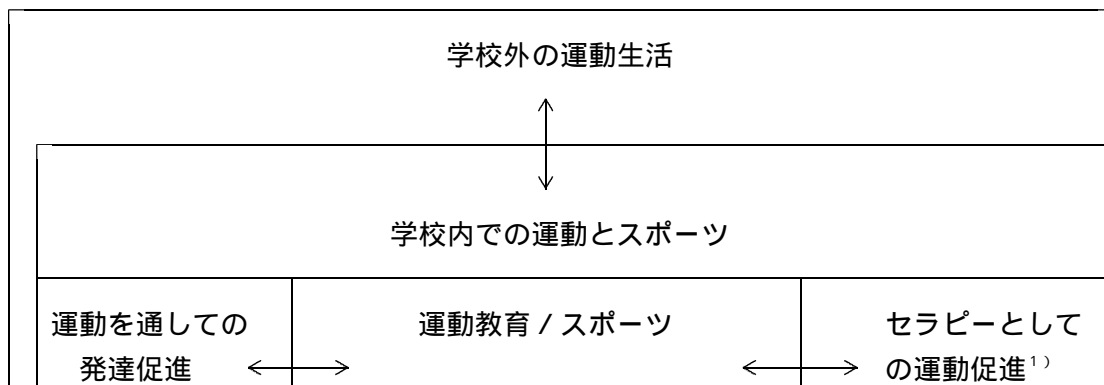
4)指導方法論レベルでの示唆

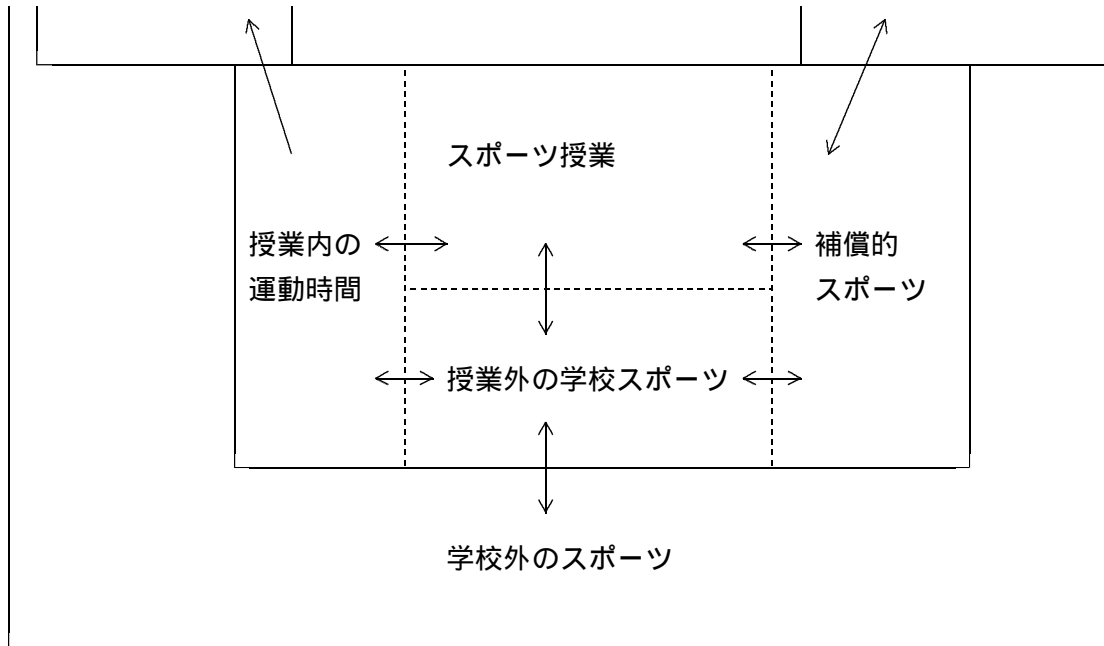
- ・個人的経験の収集の保証
- ・個人差への対処
- ・前提となっている喜んで運動し、共同するとともに、スポーツ場面以外でも健康な生活を営むというという学習者像
- ・認識重視。自らの経験の言語化を求める。しかも、知識の提供は、楽しさを保証するものとされている
- ・学校段階を意識する。例えば、初等教育段階では、スポーツ種目志向を離れ、楽しさ体験とそれを前提とした自信の発達を促すことになる。

5)授業で実施可能なことと授業外で行うべきことの識別（条件の違いの認識）

- ・健康教育に関連する諸視点を継続的に取り扱うことは、計画的なスポーツ授業では難しい。したがって、それは、休憩時間のスポーツやスポーツクラブ、あるいは学校外の施設での滞在生活によって対応すべき。
- ・他教科との関係を検討する(Der Kultusminister des Landes NRW,1989,7-9)。

15.13.3 NRW州学校スポーツシンポジウムで示された学校内でのスポーツ、運動の位置づけ





* 1)主に特殊学校で .

図 NRW 州学校スポーツシンポジウムで示された学校内でのスポーツ、運動の位置づけ (Aschebrock,1995,p.199)

15.13.4カリキュラム改革試案

§ 5 NRW 州カリキュラム改革案 (Aschebrock,1997,45-58)

運動領域、スポーツ領域名	教育学的視点	内容
1.身体を知覚し、基礎的運動能力を培う。	A:知覚能力を向上させ、運動経験を豊かにする。 F:フィットネスを向上させ、健康に対する自覚を高める。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 知覚能力を培う課題。 ・ モノの経験を保証する課題。 ・ 運動経験と自己の経験を保証する課題。 ・ コンディショニングを整えるために必要な状況設定。 ・ 脱力法。 ・ フィットネストレーニング。 ・ 機能的体操。 ・ 日常生活にみられる機能的運動。
2.ゲームができ、ゲームを創り出す。	A:知覚能力を向上させ、運動経験を豊かにする。 B:自らの身体で表現すること、運動を創り出すこと。 E:共同して行為すること、競争すること並びに互いに理解し合うこと。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 互いに知り合うため、共同し、統合するため並びに信頼を築くためのゲーム。 ・ 巧みを培うゲーム、意味遊び、模倣遊び、役割遊び、脱力遊び。 ・ 伝統的遊び、子どもの遊び、仲間づくりの遊び (Gesellschaftsspiele)、ダンス遊び。 ・ 異文化の遊び、古典的遊び並びに新しい遊び。

<p>3.走、跳、投—陸上運動</p>	<p>A:知覚能力を向上させ、運動経験を豊かにする。 C:何か冒険し、責任をもつ。 D.達成を経験し、省察する。 F.フィットネスを向上させ、健康に対する自覚を高める。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・歩く / 走る <ul style="list-style-type: none"> —走る ABC、ジョギング。 —長時間歩く（ウォーキング）ことと走ること、オリエンテーリング。 —スピードをつけて走る / リレー。 —巧みに走る / 障害走 ・跳躍 <ul style="list-style-type: none"> —幅跳び、高跳び、幅高跳び。 —跳び上がる、遠くへ跳ぶ、跳び越える、跳ぶ / 着地する。 —棒を使って（高く / 遠くへ）跳ぶ。 ・組み合わせ <ul style="list-style-type: none"> —競争、鬼ごっこ、なげっこ。 —巧みな走、跳、投に対応した課題
<p>4.水中での運動—水泳</p>	<p>A:知覚能力を向上させ、運動経験を豊かにする。 D.達成を経験し、省察する。 F.フィットネスを向上させ、健康に対する自覚を高める。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・水慣れ、泳法の学習。 ・水中で遊ぶこと。 ・スポーツ水泳。 ・水中での体操、アクアジョギング。 ・潜水 ・水中での巧技、シンクロナイズドスイミング。 ・飛び込み（伝承的飛び込み、競技としての飛び込み） ・救命水泳。
<p>5.振ること、回転すること、よじ登ること、バランスをとること—器械体操 / アクロバット</p>	<p>A:知覚能力を向上させ、運動経験を豊かにする。 B:自らの身体で表現すること、運動を創り出すこと。 C:何か冒険し、責任をもつ。 D.達成を経験し、省察する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ぶら下がる / つり網を登る。 ・揺する / 振る。 ・よじ登る。 ・バランスをとる。 ・支持する、手で立つ。 ・跳ぶ（上に跳ぶ、下に跳ぶ、幅を跳ぶ）、飛ぶ、着地する。 ・回す、回転する、展開する。 ・アクロバット（パートナーとのアクロバットとグループでのアクロバット）。
<p>6.動きを創り出すこと、踊ること、再現すること—体操 / ダンスと巧技</p>	<p>A:知覚能力を向上させ、運動経験を豊かにする。 B:自らの身体で表現すること、運動を創り出すこと。 E:共同して行為すること、競争すること並びに互いに理解し合うこと。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・個々には記述しえない運動行為は、次のように整理できる。 <ul style="list-style-type: none"> —一定の内容と形態をもった遊びから信頼しあいながら新しいものを発見していくことへ。 —運動形態や運動の結びつきを発見する

		<p>ことから即興へ。</p> <ul style="list-style-type: none"> -音楽に合わせて動くことから体操やダンスへ。 -模倣から創作ダンスへ。 -遊び的模倣から運動劇へ。 -我慢強く巧技に取り組むことから曲芸へ <ul style="list-style-type: none"> ・リズムカルなスポーツ体操、社交ダンス、フォークダンス、モダンダンス、ジャズダンス、ロックンロールといった形の決まっている体操的な動きやダンス的な動き。 ・伝統的にこの領域に位置づけられている機能的体操を運動領域1と結びつけて取り上げることができる。
<p>7.ルールの中並びにルールを用いてプレイすることー球技</p>	<p>C:何か冒険し、責任をもつ。 D:達成を経験し、省察する。 E:共同して行為すること、競争すること並びに互いに理解し合うこと。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴール・境界ゲーム <ul style="list-style-type: none"> -投ゲーム（例えば、バスケットボール/ストリートボール、ハンドボール、コルブボール、ゴルフボール、チックボール、水球） -ゴールシュートゲーム（例えばサッカー、ホッケー） -境界ゲーム（例えば、アメリカンフットボール、ラグビー） ・返球ゲーム <ul style="list-style-type: none"> -シングル、ダブルスゲーム（例えば、フェダーボール/バドミントン、ビーチバレー、リングテニス、スカッシュ、テニス、卓球） -チームゲーム（例えば、ファウストボール、ファダーサッカー、インディアカ、プレルボール、バレーボール） ・野球型ゲーム（例えば、野球、ブレンボール、ラウンダース、ソフトボール）
<p>8.滑る、乗り物で走る、転がるーローラースポーツ/ブーツスポーツ/ウィンタースポーツ</p>	<p>A:知覚能力を向上させ、運動経験を豊かにする。 B:自らの身体で表現すること、運動を創り出すこと。 C:何か冒険し、責任をもつ。 D:達成を経験し、省察する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ローラーズケート、ローラーブレード、ペダル(Pedalofahren)、スケート。 ・自転車、芸術走（例えば一輪車）、ローラー。 ・滑ること（つるつるした床面、斜面、絨毯並びに柔らかい床） ・そり、アイススケート、スキー、スノー

		ボード。 ・カヌー、ボート、サーフィン (Segelsurfen)、水上スキー。
9.レスリングと闘争—対人格闘スポーツ	A:知覚能力を向上させ、運動経験を豊かにする。 C:何か冒険し、責任をもつ。 D:達成を経験し、省察する。 E:共同して行為すること、競争すること並びに互いに理解し合うこと。	・直接的な身体接触のないレスリングと闘争遊び (例えば、1対1の綱引き等、メディシンボール寄せ、メディシンボール引き) ・床で行うレスリングや格技 (例えば、床で行う鬪議、床で行うラグビー、仰向け合戦 (Schildkrötenwenden)、座位でのレスリング) ・立位でのレスリングや格技 (例えば、押し引きゲーム、馬上競技、バランス崩し、闘鶏、相撲、乱取り) ・パートナーと規定の方を行う競技 (例えば、合気道、柔道、フェンシング)

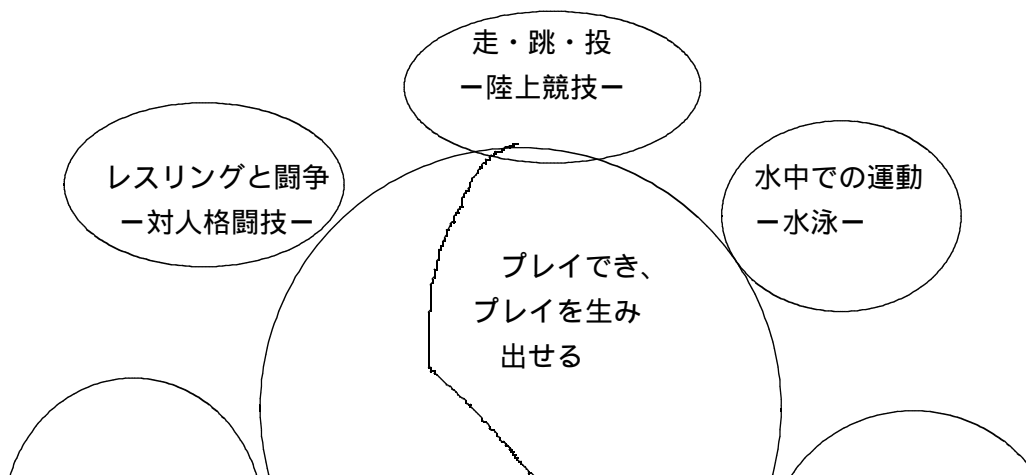
注 1) 運動領域 (Bewegungsfelder) とスポーツ領域 (Sportfelder) は、求められる運動のタイプ、行為の構造、体験する内容、社会的関連あるいはそれを行う環境条件といった観点から区別される一方で、互いに関連し合っている (Aschebrock, 1997, 46)。

注 2) 領域 1 と 2 は、中心的な領域として位置づけられている。それらは、運動を通しての発達促進にとって重要な意義をもつこと並びにスポーツ的な運動文化への参加にとって好ましい前提条件となることがその理由である (Aschebrock, 1997, 46)。

注 3) 領域 1 と 2 は、全ての学校形態、学校段階に必修の内容とされる (Aschebrock, 1997, 47)。

注 4) 教育学視点は、1997 年 10 月 22 日に指導要領改訂に向けて NRW 州都市計画、文化、スポーツ大臣 (das Ministerium für Stadtentwicklung, Kultur und Sport des Landes Nordrhein-Westfalen) による改訂作業に向けての公的会議でクルツの示した、学校内のスポーツの担う 6 つの教育学的視点に対応している (Aschebrock, 1997, 21-35)。

注 5) スポーツ種目名に代わり、テーマを明示した領域名が用いられるようになってきている。また、その際、運動領域に複数の教育学的視点 (意味) を設定している。そのため、運動領域名が異なっても設定されている教育学的視点が同じという領域が出てくる。例えば、5 の振ることと 8 のローラスポーツである。あるいは、ローラスケートやスケートボードが 8 の領域で例示されている。この領域は、クルツ自身の言葉で言えば、従来見られなかった、新しい運動経験を保証していく領域であるという (1998 年 7 月、Bielefeld でのインタビュー)。それはまた、ニュースポーツを位置づけようとした試みともいえる。その意味では、まさにこのような領域設定そのものが、今回の改訂作業で脱近代スポーツ種目型の内容領域設定が志向されていることを示している。



滑る。乗り物で 身体を知覚し、
移動する。回る。 基礎的運動能力
ーローラースケート を獲得する
ボートスポーツ
ウィンター・ス^ポーツ

振る。回る。
よじ登る。
バランスを取る。
器械体操
アクロバット

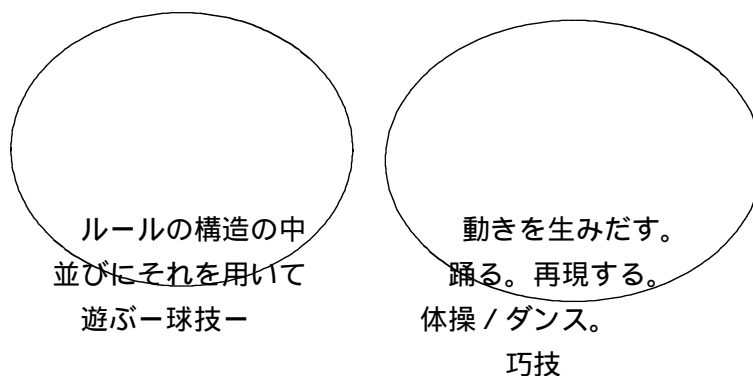


図 改訂 NRW 指導要領の運動領域
並びにスポーツ領域(Kurz,1998,p.147)

15.13.5 中等段階 新学習指導要領 (1999)

1) 前指導要領に対する評価と改訂の方針

ー長期的展望にたつ学習、教科枠を越える学習、学校、教師の裁量発揮の余地保証ー

1981 年に交付されたギムナジウム上級段階用の前指導要領は、新教科に対して初めて示された専門的な基準であり、アビツウ^アの結果を比較するための基礎となった。そして、今回の改訂では、ギムナジウム上級段階に対して設定され、実現されてきたそのような基本方針をより堅固なものにするともに、1994 年以降文部大臣会議で展開されてきた大学学長会議(Hochschulrektorenkonferenz)との対話の中で生み出された論議やに学校や教育に対して関心を抱いている人々の間で交わってきた論議に対する回答を示すものである。そこでは、次の 4 点が重視される。

- (1) 深い一般的教養、科学入門に向けての基礎教育、ギムナジウム上級段階で獲得されるべき社会的能力、一般的な高校卒業証明書を交付されるための前提条件となる。それらは、大学での研究や職業獲得に必要な能力を特定の形で保証するものである。
- (2) そこでは、研究や職業に不可欠な前提条件である、基礎的能力が重視される。言語能力、表現能力、外国語でのコミュニケーション能力、数学的体系、方法並びにモデルと対応する能力といった、これら諸能力は、単に、ドイツ語、数学、外国語といった教科で獲得されるものではない。
- (3) 短期的な学習成果のみを目指した学習過程ではなく、後々まで持続する学習能力を培い、それを強化しなければならない。自主的な学習や集団での学習が保証され、学習者の自己制御能力が高められる教授、学習環境が意図的に設定されなければならない。
- (4) ギムナジウム上級段階の学習の中核に据えられるのは、教科の枠を越えた関連や複雑な構造の中で展開される思考や作業である。その実現には、教科の授業と並び、教科の枠を越えたり、教科を組

み合わせた授業が、必要不可欠である。

このような意味での学習には、要求事項を明確に示すことが必要になる一方で、同時に学校の裁量権を認めることが必要になる。指導要領は、ギムナジウム上級段階での作業を方向付け、発展させるものである。それは、義務を提示することにより、共同の学習経験を保証するとともに学校、教師並びに学習集団に対して自由な余地を保証するものである (NSWWF,1999,Vorwort)。

2) 学校スポーツの目標

－運動の中並びに運動を通しての教育、文化の多様性と意味の開示、生涯スポーツ、身体と運動、プレイとスポーツに対する責任－

「学校という制度は、学校スポーツにより身体と運動、プレイとスポーツに対する自らの責任を全うしている。プレイとスポーツの中ではまず、運動の中並びに運動を通して教育学的にみて重要なものが生み出される。また、それにより生徒の身体性に対して特別な配慮が加えられることになる。この領域が学校内で与えられる特別な地位並びにその不可欠性の根拠は、この点にある。」 (NSWWF,1999,)

「学校スポーツ並びに個々の学校形態、学校段階のスポーツの指導要領を方向付ける外的諸条件は、ここで基本に据えられた教授学的立場を発展させるものである。その立場とは、運動、プレイ並びにスポーツを個人の発達促進の手段として用いるとともに、学校スポーツを通して、運動文化、プレイ文化並びにスポーツ文化の世界を開くとの立場である。したがって、学校スポーツの掲げる教育学的理念は、次のように二重の観点から定義される。

運動、プレイ並びにスポーツを通して発達を促すこと並びに運動文化、プレイ文化並びにスポーツ文化を開くこと。」 (NSWWF,1999,)

「教科固有の事象の世界を開くという課題は、スポーツ活動やスポーツ行為の型に目を向けさせる。その多様性を経験させ、自分で責任をもって営む生活の一部として有意義なスポーツ活動への道を開くことがそれである。したがって、学校スポーツは、スポーツの社会現実との関わりをもつことになる。その責務は、このような意味でのスポーツと関連する生徒の行為能力を範例的に選択した例に即して向上させることにある。それは、今日行われている制度科されたスポーツの形態をその意味という観点から検討させ、場合によっては自らの実践を修正させることになる。このような要求が生み出す理想的目標とは、スポーツが積極的で意味を意識した生活づくりにおいて定期的に行われる要因となることであり、そのようなものでいることである。」 (NSWWF,1999,)

3) 学校スポーツを方向付ける教育学的視点と内容構成

－両義的なスポーツ活動の教育的価値判断並びに授業を方向付ける視点としての教育学的視点－

学校スポーツが二重の責務を担うことが、運動、プレイ、スポーツという複雑な行為領域が視座に据えられるための教育学的な立場である。そして、この立場からは、6つの教育学的視点 (pädagogische Perspektiven) が導き出されることになる。それは、スポーツ活動がどの程度教育学的にみて価値をもつのかを示すものであり、同時に、学校スポーツ内で成長期の子どもたちの発達を他に代替できない方法で促すためにはどうすればいいのか、という問いに対する回答を示すものである (NSWWF,1999,)。

なお、学校スポーツでは、必ずしも、子どもたちがすでに見いだしているスポーツの意味を前提に行われる必要はない。場合によっては、教師が、子どもたちが見いだしているそれとは異なる意味を設定

して授業を進めることもあり得る。また、これら 6 つの視点は互いに対等なものであり、上下関係には置かれない。また、それらのいずれか 1 つでも軽視されるようであれば、学校スポーツの責務は完全には満たされない(NSWWF,1999,)。

「ここで個々の視点から示された、教育学的にみて重要なものは、任意にスポーツ活動を行うことによって自然に得られるものではない。むしろ、それは、適切な内容の選択と適切な授業づくりを通して生み出され、保証されるものである。運動文化、プレイ文化、スポーツ文化の幅広い領域から選択される内容は、様々な方法でテーマ化できる。諸視点は、教育学的見地から学校でスポーツ取り上げる際に際に不可欠なテーマの多様性を示している。

スポーツは、どの教育学的視点からみても両義的なものである。すなわち、スポーツの中にみられる発達促進の可能性は損なわれてはならない。しかし、そこには逆の危険も存在している。ここから、教育学的な責任をふまえた、学校内でのスポーツの行い方に関する示唆が引き出される。学校スポーツは、人間的なスポーツのモデルでなければならない。」(NSWWF,1999,)

「教育学的な諸視点は、スポーツという学校の担う課題領域の独自性を踏まえて定義したものである。しかし、学校の担う一般的な教育課題と陶冶課題には、個々の教科に帰することのできない諸課題も含まれている。そこでは、教科固有の教育学的視点と教科を越えた貢献が、部分的に互いに交錯している。特に、次に示す、今日重要になってきている教科の枠を越えた教育課題に対し、学校スポーツは特別な貢献がなしえる。すなわち、健康向上、安全教育、交通教育、省察的男女共習、共同的授業、異文化教育、環境教育、政治教育、美的教育並びにメディア教育である。」(NSWWF,1999,)

§ 6 NRW 州新指導要領(1999)で示された教育学的視点(NSWWF,1999, -)

教育学的視点名	教育学的視点の内容
知覚能力を向上させ、 運動経験を広げる(A)	<p>今日では、知覚は、特定の見ることや聞くことに集中している。したがって、それに対抗していくことが学校に求められている。多様で、発達段階に即した形であらゆる感覚を用いさせることにより、学習や一般的な学習能力が向上させられる。</p> <p>子ども時代並びに青少年期の発達並びに学習にとって知覚能力の育成は、基本的な運動課題である。バランスや緊張をコントロールすること、目と手の協応、空間の見え方は、このような観点からすれば重要で、高められるべきものである。</p> <p>運動は、自己や世界を経験するための基本的通路である。モノと探求的、遊び的に関わることや運動を通しての身体を経験は、すべての学校段階のスポーツ授業に担う課題である。</p> <p>スポーツの中で行う運動により感覚を感じられることは、さらなる身体活動への刺激を与え、楽しく運動することに寄与することになる。</p>
身体で何かを表現し、運動を 創り出す(B)	<p>人間の身体、特に運動している際の身体は、人格を表現するものである。特に、青少年は、自分自身の身体を通して自分自身を規定している。彼らの身体像は、彼らの自己像の中核を占める。自分自身の身体と調和して生きていくことは、青少年期の子どもたちにとって重要な発達課題である。それは、青少年がどのように振る舞うべきであるのかを判断できる能力を保証することになる。</p> <p>学校内でのスポーツは、他教科以上に、身体の表現能力を試行し、それを省察する機会を数多く与えてくれる。自分自身の身体と一致していることは、自分自身との一体感を生み出すとともに、運動で何かを表現することは、自分自身と関わることでもある。したがって、スポーツ授業の課題</p>

	<p>は、若者がこのような作業に携わることを援助することである。それは、彼らに、自分が自分の身体以上であることを学習させることになる。</p> <p>したがって、スポーツ授業では、道具的な合目的性を越えたレベルで、多様な個人の運動のレパートリーを豊かにすることが重要になる。例えば、運動を用いて遊ぶことや運動を通して表現すること、運動の理念を形にすることである。</p> <p>このような観点からすれば、学校スポーツは、共同や社会学習、共同体の経験に対して特別な機会を提供する。したがって、仲間と共に、あるいはグループで運動を創り上げることが重視されるべきである。</p>
<p>何かを冒険し、責任をもつこと(C)</p>	<p>何らかの冒険をする人は、自分自身の判断で結果の不透明な状況を求め、自分自身の能力でそれを解決しようとする。その意味では、冒険とは、克服する状況である。そのため、若者は冒険を求め、そこで自分の限界を感じることになる。冒険には、自己評価が伴うし、自分自身の能力を一層向上させる魅力がある。子どもや青少年の多くは、そのような状況で励まされ、促される必要がある。</p> <p>冒険は、多くのスポーツ領域にみられる。なお、何が冒険になるのかは、個人の能力に左右される。</p> <p>冒険は、不安に対処する経験と結びついている。スポーツの中では、このような観点から、一方では不安うち勝つことが学習される。他方で、不安に対峙することも学習される。冒険は、課題の難度と自分自身の能力を現実的に評価し、そのけれが自分や他人に対してもたらず帰結を責任をもって計算しなければならぬ、限界状況である。学校スポーツは、経験ある指導者のもとでこのような評価を試行錯誤できる、典型的な機会を提供する。また、正しい意味での安全教育との関わりも生み出される。これは、危険な要因をできる限りなくすことを意味しない。そうではなく、生徒達が危険を認識。評価し、危険な状況で適切に行為できるようにすべきことを意味している。</p> <p>多くのスポーツ場面では、他人を信頼できる、共同でき。補助したり安全を確保できる人のみが冒険を犯すことが許される。他方で、何が互いの信頼を生み出すのかを知るべきである。学校スポーツは、共に冒険を犯している状況内で単に教師と学習者の間のみではなく、学習集団内でも互いの信頼を促すことのできる唯一の機会を提供する。</p>
<p>達成を経験し、理解し、評価する(D)</p>	<p>学習並びに達成に必要なレディネスを向上させることは、全教科の負うべき基本的な教育学的課題である。それは、練習と密接に関連している。子どもたちは、練習し、集中的に課題に取り組むことを学習すべきである。スポーツでも、すべての教育学的視点のもとでこの点が求められる。</p> <p>しかし、学校内で行われるスポーツは、さらに、達成教育としての顔をもつ。スポーツの中の行為は達成として評価され、自分にとって重要なものとして示される。それがなされる基準やルールは、比較的理解しやすい。スポーツの中では結果が直接知らされるが、それは、自分自身の達成能力がどの程度向上したのかをしらせる。他方で、社会的評価をも目に見えるものにする。</p> <p>スポーツの中で何かを達成することを通して、若者達は、社会的承認や自意識を得ていく。しかし、いつも他人の後塵を拝むという経験は、自己感情を厳しく損なうことになる。したがって、スポーツの中で達成を要求する状況を設定する際には、教育学的な配慮が求められる。</p> <p>そこではまず、すべての生徒が多様で、個人に即した要求を受け、それを上手に達成でき、向上させていくことが重要である。その際、他人との比較よりも個人の進歩が重視されるべきである。すなわち、自分自身の能力に対する自信を高め、努力や練習、トレーニング、適切な学習方法によって何かを獲得できる経験を保証することが重要である。</p>

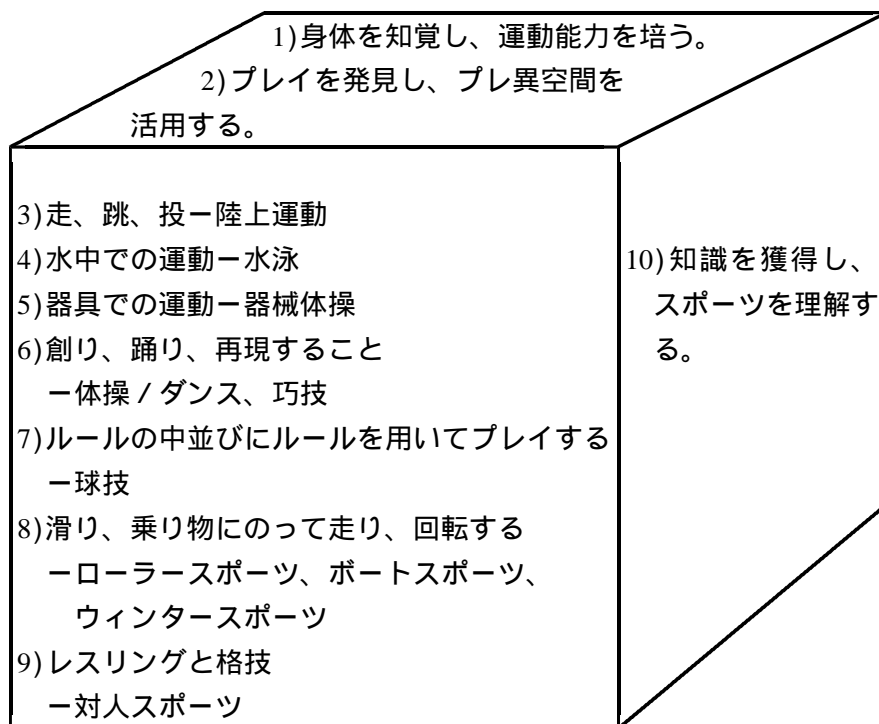
	<p>達成教育は、また、社会教育の担う課題の一つである。達成教育は、他人を感じながら対応することを学習させる。それは、特に、男女共習や障害者と健常者が共に行う授業で当てはまる。学校スポーツでは、特に、共同して何かを成し遂げるといった経験が促進されるべきである。</p> <p>さらに、スポーツの中では達成が何ら客観的なものでも、絶対的なものでなく、社会的な合意や比較によってもたらされていることも認識させられる。ゲームや競技のルールを試行錯誤してやることにより、発達段階に即した形でこのような認識が高められる。</p>
<p>共同すること、競技すること、気持ちを通じ合わせること(E)</p>	<p>特に若者の間で社会的価値の拘束力はなくなったとの認識が広まっていると共に、暴力に至るまでのあらゆる奇異な行動が増えてきている。このような状況を背景に、学校には、社会的学習の契機を与え、社会的責任を向上させる教育を重視すべきとの期待がかけられている。</p> <p>このような観点からすれば、スポーツは、全教科の中それに比べられる可能性を秘めた唯一の教科である。現代の、細分化した社会の反映としてのスポーツの中では、社会的な共同の基本形態やそれが抱える基本的問題が、典型的に経験させられる。そこでスポーツは、他教科とは異なり、実践と省察と結びつけながら社会的行為能力を一層向上させる機会を提供する。</p> <p>スポーツの中で行為は、直接、社会的関係の中に置かれる。スポーツの中では人々は互いに知り合い、共同体がより強烈に体験、経験されていく。そこにスポーツの魅力があるし、若者にとっての魅力がある。学校スポーツのもつ特別な可能性は、学習集団を共同体として体験できることである。他方で、スポーツ授業にみられる多人数の異質の集団は、相互理解を強く求めることになる。それは、特に、男女共習のスポーツ授業における異なる性との共同や特殊教育の要請に生徒を対応させた場合に顕著である。</p> <p>この視点のもとでかけられる具体的な要求は、ボール遊びや競技のバリエーションからスポーツ連盟の設定したルールに基づく球技や競技に至るまでの多様な形態の中でルールに基づき、パートナーとともにプレイすることである。競争へと方向付けられた状況内では、社会的な共同にとって貴重な形態として経験されることになるドラマチックな行為が全参加者の行為にみられることもありえる。学校スポーツで培うべきプレイ能力は、適切なルール意識やフェアネスの理念に対する志向性をもたらす。</p> <p>授業を適切に行うことにより生徒達は、スポーツを行っている典型的な場面では社会的共同は益々自明になってきているし、一層それに責任をもたなければならぬことを学習すべきである。その契機は、共同で行為しなければならぬ、特に分業で共同させられるスポーツ的課題によって提供されることになる。それはまた、スポーツをスポーツたらしめたり、その経過を修正する措置にもみられる。すなわち、プレイする場所や道具を準備する、役割を分かち合う、グループを作る、ルールを決める、安全を確保する等である。学習や練習並びにトレーニングの場面で互いに注意し合ったり、補助し合うこともそれに該当する。</p>
<p>健康を向上させ、健康意識を高める(F)</p>	<p>健康は、個人にとっても社会にとっても重要な価値をもつ。健康を保証し、向上させることは、学校教育の重要な関心事でなければならない。健康教育が実際の行動に影響を及ぼすべきだとすれば、それは単なる啓蒙に終わるのではなく、実践的行為や生活世界の経験と結びついたものでなければならない。学校スポーツは、それを特別な形で実現し得る。</p> <p>運動、プレイ並びにスポーツは、それが健康的かつ責任をもって行われるのであれば、健康を保証していく重要な源泉を提供する。スポーツは、身体的な達成能力と心理的、身体的な耐性を向上させる。さらに、スポーツ的行為の中では身体的な努力や再生が経験され、健康の持つ意義が整理される。身体の反応が知覚、解釈され、情緒的な安定がもたらされ、社会的な統合が体験される。</p>

スポーツ授業では、これが基礎学校からテーマとされれ留べきである。

確かに、健康に対する配慮は、子どもや青少年にとっては、決してスポーツ活動にと効果的に向かわせる動機とはならない。したがって、学校スポーツで行われる健康教育上の取り組みは、成長期の子どもの経験と結びつけ、生徒の関心や彼らが困っている問題との関連をもたした場合にのみその効果が期待できる。

健康が問題にならない青年の場合、その意義はフィットネス向上や、身体との取り組み、それをトレーニングを通して変容させていくことに求められている。したがって、スポーツ活動を健康という観点から評価し、修正することで彼らの関心を引くことができる。健康上の危機に直面したり、定期的な運動を通して彼らの予想を上回る成果が得られてようやく、生徒にとって健康教育に関する目標が重要になる。

§ 7 NRW 州新指導要領(1999)で示された学校スポーツの内容領域(NSWWF,1999,)



注 1) 内容領域 1 と 2 は、スポーツ領域を越えた運動領域として、運動を通しての発達促進に対して重要な意義をもつとともに内容領域 3 から 9 での学習の前提条件を生み出す。この 2 領域のテーマが、独自に授業を方向付ける。しかし、それらは、3 から 9 の内容領域の学習過程にも組み込める(NSWWF,1999,)。

注 2) 内容領域 3 から 9 は、二つの部分から構成される。第一は、例えば走、跳、投を例に取れば、そこで典型的に要求される運動課題、行為の構造、体験内容、社会的関連並びに環境条件が記され、他のそれとは区別されている。ダッシュの後にはこの運動領域に位置づけられるスポーツ領域とスポーツ種目があげられている。このような示し方は、一方で学校スポーツの中では学校外で普及しているスポーツ種目との関連を求め、他方では常にその限界を超えていくという、教授学的な必要性を強調するためのものである。内容領域を体系化する際には重なりを避けられない。しかし、それが教授学的計画の範囲内で生産的に活用されれば、害よりも効果の方が大きい(NSWWF,1999,)。

注3)内容領域10では、学校スポーツで獲得すべき重要な知識や洞察が記される。それは、内容領域3から9と密接に結びついており、生徒達が上手にスポーツを行うことを保証してくれる。それは、また、すべての教育的視点並びに教科の枠を越えた学校の課題のもとに置かれる、スポーツの基本的課題にかかわるものであり、したがって、根拠のある態度や価値観の形成に寄与するものである(NSWWF,1999,)。

§ 8 NRW 新学習指導要領の内容領域構成とその特徴(NSWWF,1999, - L)

領域名	特徴
1)身体を知覚し、運動能力を培う。	<p>この内容領域では、自分自身の身体に対する知覚能力の向上、自分自身の身体の可能性と限界並びに変容可能性がテーマとされる。これらは、コンディショニングや調整力を向上させる際や緊張と脱力を繰り返す際に特に重要である。この内容領域の運動を生み出す契機は、特に、個人の運動に意識を集中させることである。運動をより確実に行えるようにするために調整力や可動性を高めていく際には重要である。さらにこの内容領域には、どの程度に負荷に耐えられるのかを試したり、一般的な調整力を自主的に向上させていくことも含まれる。ここにはまた、自主的なフィットネストレーニングも含まれるとともに理想的な身体やフィットネスに対して批判的に対峙していくことも含まれる。機能的体操や日常生活で行っている機能的な運動もまた、この内容領域に含まれる。</p> <p>したがってこの内容領域は、自分自身の身体に向き合い、それを形作っていくことに対して多様な可能性を提供してくれることになる。生徒達は、自分たちの身体の固有性と変容可能性を知ると共に、自分自身の自我の一部である自らの身体と責任をもって関わることを学ぶ。そのような経験や経験やそれができる能力は、学校段階や学校形態の違いを越えて重要であるし、他のすべての内容領域の基礎となる。これらの経験や能力は、一方でスポーツ授業の独自の内容領域とされなければならない。しかし、他方では、幅広い内容領域で繰り返し取り上げられ、その可能性が広げられなければならない()。</p>
2)プレイを発見し、プレ異空間を活用する。	

注 1)学校スポーツはあ、これら 10 領域のすべてを保証しなければならない。内容領域 1 並びに 2 は、学校形態の別なく、教科としてのスポーツ科にとって必修である。

4) ギムナジウム上級段階のスポーツ科の目標と内容構成

§ 9 NRW 州新指導要領(1999)で示されたギムナジウム上級段階の目標、並びにそこで重視される教育学的視点と内容領域編成(NSWWF,1999,5-23)

教科の課題と目標	
・運動、プレイ並びにスポーツを通しての発達促進並びに運動文化、プレイ文化並びにスポーツ文化の開示 ・学校段階を越えた必修教科としてのスポーツ授業は、ギムナジウム上級段階の教育的責務と陶冶責務の達成にとって必要不可欠である。スポーツを行う際に生み出される状況は、三つの課題領域を除き、この陶冶課程の中で固有の経験を保証し、学習を可能にする。直接的な身体的、感覚的経験や運動、プレイ、スポーツを行っている際に要求をかけられること並びにそれと知的に取り組むことにより、ギムナジウム上級段階で求められている、社会的な責務の中で人格を発達させていくための援助を与え、科学入門教育へと導いていくという、一般的責務の実現に寄与することになる。	
強調される教育学敵視点	
知覚能力を向上させ、運動経験を豊かにする(A)	ギムナジウム上級段階では、この視点のもとで生徒達はモノの経験と身体の経験を広げる。彼らは、身体の状態をより繊細に知覚することを学習するとともに、自分の身体並びに他人の身体性と敏感に、性人をもって、上手に対応することを学習する。その際、所与の運動のパターンや運動空間が変容する経験と同様に、自分の身体の状態が積極的な影響を与えることをはっきりとさせるべきである。スポーツ活動と身体感受性並びに身体の姿勢と身体言語の関係に対する洞察が培われる。さらに、この年齢段階では、特に、知覚能力が繊細になっていけば創造的に運動を創り出せるようになっていくと関係を利用することもできる。
身体で表現し、運動を創り出す(B)	ギムナジウム上級段階の生徒達は、スポーツ活動を一人、あるいはグループで、取り決められた基準に従ってより一層主体的に創り上げられるようになるべきである。彼らは、言語や音楽、リズムといった表現形態とともに即興で動き、自分の感じていることや与えられたテーマを想像力豊かに運動を通して創り上げ、表現する能力を向上させるべきである。特に、この年代では身体は人格を表現するものとして、自己のアイデンティティの発達やその表現にとって特に重要になっている。発達した生徒の省察能力は、単に、現代の身体言語の現象形態に対する批判的検討を可能にするのみではなく、身体の意義や用いられ方の文化的な違いをテーマに取り上げることも可能にする。

<p>責任をもって、何か冒険をする(C)</p>	<p>スポーツの中には、その成果や成功裡な解決が一人ではかなえられないことから得られる魅力を備えた課題や状況がある。そのような課題に取り組むと、一人でもできることもあれば、失敗することもある。わくわくするような緊張感や成功を喜ぶ経験と並び、そのような状況は、絶えず新たに、自分自身の可能性と限界を経験させてくれる。そのような経験を保証する高い体験的価値を備えた冒険は、若者文化の一部分である。冒険を行っている状況の中でますます意識的かつ慎重に、やめるといふ勇気をもたなければならぬ危険の度合いを検討していくことを通して、ギムナジウム上級段階の生徒達は、自分自身の能力と限界を現実的に評価する能力を一層高めていく。それはまた、自己の尊厳を認める感情と自己のアイデンティティを高めるとともに、さらに、冒険的、体験的状况の中で自分自身や他人の健康に対処することに特別な意義を与えることになる。</p>
<p>達成を経験し、理解し、評価する(D)</p>	<p>ギムナジウム上級段階の生徒達は、選択された運動領域やスポーツ領域でスポーツ的な成果を生み出さなければならない。彼らは、長期的、継続的に達成能力を向上させる機会を提供される。練習やトレーニングの過程は、生徒自身の手によって自主的に計画、組織、実施され、省察されなければならない。彼らは、達成概念を批判的に検討するための基礎を習得すると共に、自身の個人的欲求や条件、可能性に応じて修正する能力を身につけていく。その際、彼らは、スポーツの中での達成がどのようにして規範へと方向付けられていくのか、様々な要求レベルをかけられるのか、さらには、性別であることも含め、様々な基準に応じて評価されるのかを学習していく。</p>
<p>共同し、競技し、気持ちを通じ合わせる(E)。</p>	<p>ギムナジウム上級段階の生徒の省察能力は、ルールに対する自覚を高め、スポーツの典型的な状況にみられる多様なルール観に対する自覚を高めることを可能にする。共同の状況と同様、競争的状况においてもスポーツを社会的に上手に行っていくために必要な確かな知識や経験を基礎として、運動やプレイ、スポーツを自主的かつ責任をもって他人といっしょに創り上げていく能力が育っていく。このような能力は、現在ではもはや行われていない運動文化や未知の運動文化とオープンに関わっていく能力と同様、スポーツの中で様々な機能を引き受けたり、それを責任をもってこなしていく能力を育てていく。</p>
<p>健康を促進し、健康意識を向上させる(F)</p>	<p>それ以前の学校生活で培った多様な学校スポーツの経験をもとに、ギムナジウム上級段階のスポーツ授業は、運動やプレイ、スポーツを健全な生活の実現に寄与するものとして生徒が深く知っていく機会を提供する。健康促進は単に身体的側面のみに向けられるものではなく、心理的、社会的、エコロジー的要因も含められなければならない。さらに、生徒達は、スポーツを行うことが健康を損なう危険性を備えていることも知るべきである。実践的経験とそこでの省察の経験と直接結びついて、健康にとって重要な知識や洞察が獲得され、それに関わる習熟や能力が獲得されていく。健康に対する自覚を向上させていくねらいは、責任をもって健康的なスポーツを行っていきける能力を長期的に培っていくことにある。したがって、生徒達は、自分たちの生活の質や安寧を向上させるために、「マイスポーツを見つけること」をも学習しなければならない。</p>

内容領域編成

領域名	下位領域名	内容を扱う上での教育学的視点	対象
<p>運動領域とスポーツ領域 (領域)</p>	<p>走・跳・投－陸上運動</p>	<p>陸上運動の諸種目の授業の内容上の重点は、達成経験と達成評価に置かれる。それを行うことによりかかる負荷は、身体の達成能力を強烈に知覚させる。それは、個々の種目毎に固有にかけられるとともに多種目競技では多様にかけられる。成果が客観</p>	<p>・陸上競技の諸種目。 ・持久走、パワーウォーキング、スピード遊びの持久走。 ・短距離走、中／長距離走、跳躍、投擲を含めた</p>

	<p>的に測定できるため、個々人の達成の向上が特にはっきり認識される(D)。</p> <p>走、跳、投を集中的かつ省察的に経験する中で、傷害を回避するという観点を補足しながら、健康意識を向上させ、フィットネスを向上させることが重要になる。生涯にわたる身体的な達成能力の維持という観点からすれば、出きる限り屋外で行う持久走が特に重要になる(F)。</p> <p>この運動領域には、走、跳、投をゲーム的、競技会的な達成比較の機会として多様な形で組織することも含まれる(E)。また、個人が制御可能な負荷の範囲内においても、運動する環境の変化に伴う身体の知覚もそこに含まれる(A)。</p>	<p>多種目競技。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(目標投げと走といった)パイアスロンやオリエンテーリングといった、陸上競技を踏まえた複合競技。 ・自分自身が設定した意味を踏まえた走、跳、投並びに目標設定や課題設定。そこには、ゲーム形式やチーム対抗競技形式を含める。
<p>水中での運動－水泳</p>	<p>水泳、特に競泳では、生徒達は自分自身の達成能力とその限界を直接フィードバックされる。それは、技術のレパトリーを豊かにすると共に確実なものにする。また、調整力を向上させる。個人のトレーニングの過程は、時間を客観的に測定することにより管理できる(D)。</p> <p>飛び込みは、要求の高め方と能力に応じて新たに、冒険として経験可能であるし、危機的状況で慎重に自己評価を行うために適切な場を提供する(C)。</p> <p>飛び込みと潜水では、身体が強烈に知覚され、強烈な運動体験が得られる(A)。</p> <p>水泳は、一般的な身体の達成能力を維持、向上させ、生涯スポーツという関連からみた健康的な生活を促進することに特に貢献する(F)。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・競泳。多様な種目、距離泳、スタート、ターン並びに競技における戦術。 ・救難水泳。 ・基本的な潜水用具を用いたの潜水。 ・規定演技並びに自由演技での飛び込み。 ・水球並びに水中で行うそれ以外のボール遊び。 ・水中での巧技並びに演技づくり。
<p>器具での運動－器械体操</p>	<p>器械運動やアクロバティックな能力を一層向上させることを意図した器械運動は、我慢強い練習を求め、達成基準を批判的に検討していく多様な機会を提供する(D)。</p> <p>多様な運動を知り、発見し、練習することにより、想像力豊かに身体で表現したり運動をより繊細に構成する基礎的能力が培</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・例えば、床、角材、箱、鞍馬、吊り輪、平行棒、鉄棒、トランポリン、器具を組み合わせたコースといった、諸々の器具で規範化された器械運動の動きを行う。 ・例えば、小さな箱、ベ

	<p>われる(B)。</p> <p>身体を緊張させたり、慣れない動きや姿勢をしたり、バランス取り遊びをすることを通して、生徒達は身体と運動を直接体験的に知覚する。この知覚は、驚きの感情や快感、不安と多様な形で結びつく(A)とともに、冒険や責任という視点のもとでテーマ化しえる(C)。</p>	<p>ンチ、棒、ロープ、登攀コース、といった、器械運動の動きを一層発展させるような設定を施して、上記であげた器具で規範化された器械運動の動きを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・二人組やグループで器械運動やアクロバティックな動きを行う。
<p>創り、踊り、再現すること —体操/ダンス、巧技</p>	<p>体操的、ダンス的な行動や美的、芸術的な行動は、すべて、知覚能力の向上と運動経験と身体経験の拡大を直接の目標としている(A)。また、運動を構成したり、提示する能力の向上もその直接の目標としている(B)。</p> <p>体操的、ダンスのパフォーマンスを演技構成やパートナーとの共同作業として課したり、あるいは高いレベルで技をこなすことを要求すると、我慢強い練習が必要になる。また、それにより達成基準を批判的に検討する能力を培う機会が多様に提供される(D)。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・例えば、手具を用いたり、用いない体操。対象物を用いた体操、リズム体操、エアロビクスやあステップエアロビクスといった、時間やモードに制約を加えたフィットネス体操のように、体操の様々な領域の動きを行う。 ・例えば、ジャズダンス、フォークダンス、モダンダンス、社交ダンス、流行のダンスといった、様々なダンスの動きを行う。 ・例えば、パントマイム、運動劇、曲芸といった美的、芸術邸運動領域や身体を強調する領域の動きを行う。
<p>ルールの中並びにルールを用いてプレイする —球技</p>	<p>チームゲームでは、ゲームの理念を踏まえて共同で行為することが特に要求される。ジムナジウム上級段階のスポーツ授業は、戦術的に行為できる能力を向上させる機会を提供することにより、共同的行為に配慮する。そのため、戦術的課題を踏まえて、生徒達が一層自主的、共同できるように配慮される。相互理解と社会的能力は、例えば、既存のルールを異なる条件に合わせたり、新しいゲームやゲームの形態を合意した理念のもとで生み出したするため</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・バスケットボール、サッカー、ハンドボール、ホッケー、バレーボールというチームスポーツ。 ・バドミントン、テニス、卓球というペアで行うゲーム。 ・ストリートバリエーション、ビーチバレー、フライングフットといった、既存の球技あるいは自分

	<p>に、学習集団は自分たちの達成能力や要求を自覚していくことを通して向上していく(E)。</p> <p>多様な運動能力が求められ、複雑な行為状況が生み出される球技では、達成し、それに省察を加え、練習やトレーニングを通して達成を向上させていく多様な機会が提供される(D)。</p> <p>球技は、そのやり方に応じて実に多様な調整力が求められる。特定のプレイで傷害を負う危険が高いことは、危険を生み出す具体的な要因に対処することを求めるとともに、自分や他人の健康に責任をもつように促す。好みや人格により球技では、特に、生涯にわたり健康にスポーツを行うという観点から、生徒達に多様な要求を示されることになる(F)。</p>	<p>たちで創り出した球技のバリエーションを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・例えば、アメリカンフットボール、野球、ファウストボール、フリスビー、インディアカ、コルフボール、プレルボール、ラグビー、シュラークボールといった、私たちの文化の中ではまだ、あるいは、未だ制度化されていないゲームを行う。
<p>滑り、乗り物にのって走り、回転する ローラースポーツ、ボートスポーツ、ウィンタースポーツ</p>	<p>ダイナミックなバランスどり、運動のテンポ並びに運動環境への対応が求められることにより、感覚の知覚や運動経験が得られる具体的な状況が生み出される(A)。</p> <p>この運動領域から設定される授業の対象は、目標へと方向付けられた練習によりできると体験されたり、演示される表出や運動創りと特に結びついている。この運動領域で何がができることは、常に危険と隣り合わせとなっている。この関連でいえば、この運動領域で設定された授業の対象は、冒険や責任について教育的に学習し、練習する多様な機会を提供する(C)。</p> <p>この運動領域は、自然に近い運動空間や体験空間で継続的にスポーツを行ったり、個に応じた負荷をかける多様な機会を提供する。生徒達は、ここで、自然や環境と調和しながら健康を促進するものとしてスポーツ的行為を経験し、それを健康に考慮した生活という構想に活用可能なものとしていく機会を特別な形で保障される。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・例えば自転車、ローラースケート、インラインスケート、スケートボードといった、ローラーに乗っての前進運動。 ・例えば、ボート、ヨット、カヌー、ウィンドサーフィン、水上スキーのように、水上を滑る。 ・例えば、スキー、スノーボード、スケートといった、冰雪上で滑ること。
<p>レスリングと格技 対人スポーツ</p>	<p>相手/パートナーと直接対決することにより、相手を傷つけることを目的とする行</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・例えば、レスリングや柔道のような、直接身体

		<p>動と意識的に区別され、相手を尊重し、互いに信頼し合う行動ができる能力が培われる(E)。</p> <p>力を込めて、巧みに、目標をもって身体と格闘に必要な技術を用い、攻守を入れ替えながら直接対決している状況では、勝敗により自分自身の能力が直接経験される。しかもそれは、相対的な位置をはっきりさせる(D)。</p> <p>自ら二人で対決する場に立つことは、責任をもって冒険する姿勢の現れである(C)。そこでは、他人の健康、特に対戦者のそれを思いやることが不可欠であるような互いの関わり合いが特に重要になる(F)。</p>	<p>接触の起こる 2 人の対戦形式。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・例えば、テッコンドウや空手のよう、直接的な身体接触を伴わない 2 人の対戦形式。 ・フェンシングや剣道のように、道具を用いて行う 2 人組の対戦形式。 ・規範と結びついた格闘形態。
	<p>身体を知覚し運動能力を培う</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・脱力法。 ・機能的体操。 ・意図的なフィットネストレーニング。 ・日常生活で行う機能的な運動。
	<p>プレイを発見し、プレ異空間を活用する</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・競争的、共同的に行うゲームとそのバリエーション。 ・民衆の運動遊びや古い遊戯材。 ・オルターナティブな運動遊びと流行。 ・学校におけるプレイとスポーツの提供。
<p>専門的知識（領域）</p>	<p>自分自身がスポーツを行えるために必要な知識</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・運動経過を規定している機能連関 ・運動学習 ・トレーニングを通しての身体的達成能力の維持と向上 ・運動経過並びにスポーツ的行為を営む状況づくり ・障害の回避と事故の予

			防 ・健康な生活の基礎
	社会的コンテキスト内におかれたスポーツ行為		・他人とともにいたり、他人のために行うスポーツの練習や競技のための組織 ・環境を意識したスポーツの促進 ・フェアネス、スポーツを支配している行動や攻撃といったスポーツにみられる社会的行動の諸形態 ・性や達成能力の違いに一層目を向けて対処していくこと ・生徒に提供されているスポーツ
	社会的現実の一部分としてのスポーツ		・多様なスポーツの動機と意味 ・スポーツの現象形態－歴史的発展、今日的な変化並びにマスメディアによるその報道を含む ・スポーツに対する政治や経済の影響
自主的学習を促す方法と形態（領域）	方法論的、戦略的学習		・正確な観察や記述に基づいた運動経過やゲーム行動の分析方法 ・試行錯誤や実験を通して運動に関する課題を解決する
	社会的、コミュニケーション的学習		・スポーツ授業にみられる多様に変化する組織と比較的安定した集団構造は、作業の技術や対話の技術並びに共同する技術を向上させることを通して、集団での作業を促す機会を提供する。

		<ul style="list-style-type: none"> ・補助や道具の設定、グループづくりの際にみられる具体的要求は、参加者間で取り決めを決めたり気持ちを通じ合わせる能力を培うとともに、責任をもって課題を引き受ける能力を培う。 ・生徒達と共同して授業を一層創り出していくことにより、学習過程や練習過程で志的役割を果たすよう課題が引き受けられるようになっていく。
--	--	---

注 1) 「身体を知覚し運動能力を培う」領域と「プレイを発見し、プレ異空間を活用する」領域は、 gymnasium 上級段階のスポーツコースでは独立した領域としてされないこともありえる。しかし、この段階の授業にとって重要であり、したがって、上級段階のいずれにおいても必ず考慮されなければならない。上級段階のコースでも自分自身の身体性の集中できる、あるいはそれを意図した運動の動機がテーマ化されるのであれば、発達を促進するという課題が全体的に知覚される。

§ 1 0 NRW 手引き書にみるスポーツ科と関わる教科の枠を越える授業のテーマ例一覧 (Landesinstiut,1998,12-13)

学習の次元	テーマの例
アイデンティティと人間関係	<ul style="list-style-type: none"> ・争うー仲良くするー暴力 ・自信ー自己主張ー自己防衛 ・境界をつくるー除外する ・男子と女子 ・限界を知る ・ルールを守るールールを変えるールールを犯す ・受容と寛容 ・自己決定ー他者による決定ー共同決定
エコロジー / 世界との関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・空間を守るー空間を侵略する ・自然ープレイー空間 ・運動空間としての学校 ・冒険 環境世界 ・人間ー運動ー都市 / 空間 / 自然
再現 / 変化 / 構成すること	<ul style="list-style-type: none"> ・身体言語 ・運動と表現 ・自分を表現するー自分を隠す ・身体知覚

	<ul style="list-style-type: none"> ・光と陰 ・対比と異化 ・感覚を意識する ・美 ・現実を変え、共同して生み出す ・消費する－イニシアチブを取る
健康と安寧	<ul style="list-style-type: none"> ・緊張－脱力 ・フィットネスと若さ ・不安 ・健康－障害－疾病－死 ・余暇と流行 ・健康なこと－健康を維持すること ・限界と危険

15.14. Bayern州

15.14.1カリキュラム論に基づいていた時期の指導要領の全体像

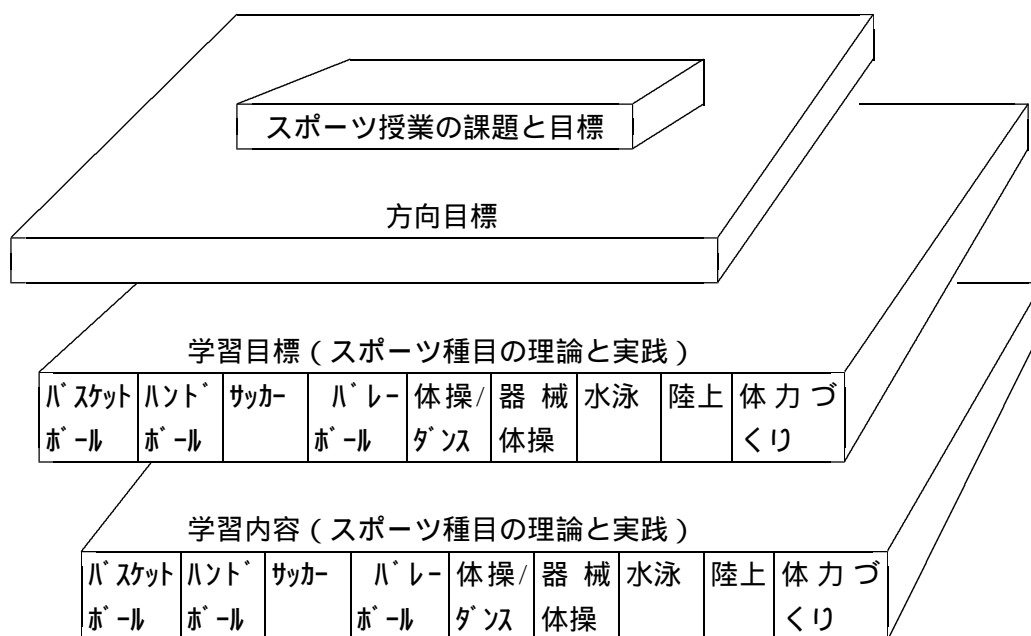


図 カリキュラム論に基づくスポーツ科指導要領の構造 (Vorleuter,1998,201)

15.14.2カリキュラム論的指導要領に示された批判

1)科学に対する批判

2)教育概念に対する批判 (Vorleuter,1998,202-203)

15.14.3カリキュラム論的指導要領改訂に向けて設定された方針

- 1)カリキュラム論に基づくスポーツ科指導要領の目標を、あまり形式的なものとせず、適切な形で維持する。
- 2)今まで以上に目標と内容を密接に関連づける。
- 3)教科の枠を越えた関連の中で全体的な陶冶実現に向けて努力する。具体的には、新しい指導要領では、数多くの出典を示すことにより、この溝を埋めていく。
- 4)スポーツやスポーツ種目を越える教育的目標を強調することと並びスポーツ授業で伝えられるスポーツのイメージを多視点的なものにしていく (Vorleuter,1998,204)。

15.14.4新指導要領 (1992/1993) で示された教科の目標

「スポーツ授業の目標並びに内容は、各学年段階、あるいは選択スポーツ授業のスポーツ種目/スポーツ領域毎に、1 健康、2 フェアネス、共同、3 環境、4 達成すること、形成すること、プレイすること、の4つの学習領域に即して示される。学習領域4の達成すること、形成すること、プレイすることが、中心的な学習領域である。そこでは、単に、1 健康、2 フェアネス、共同、3 環境という学習領域の目標並びに内容を達成させるのみではなく、特定のスポーツ種目と結びついた、独自の内容と目標が達成される。

指導要領の各章では、まずは、目標が記される。この目標では、授業の中で生徒達が到達すべき発達過程が明確に記される。この過程では、生徒の人格形成という観点からみて学校の学習で重要になる、(1)知識、(2)能力と応用、(3)創造的思考と形成、(4)価値志向、という四つの教授学的重点項目が区別される。これらの教授学的重点項目は互いに関連し合っている。しかし、目標として記されると独自性を備えている。

その後、内容が記される。内容は、(特に、概念、事実、テーマ領域、データといった)教科の視点と(特に、思考様式、過程、価値観、さらにはそれらと並び素材の正確な提示といった)教授・学習の視点を考慮して記される。

スポーツ授業では、単に運動(運動性の局面)のみが重要な役割を担うのみではなく、省察や自覚(認知的局面)、体験と感ずること(情緒的局面)並びに従事し、取り組むこと(動機付けの局面)も重要な枠割りを果たす。範例的なものと基礎的なものを踏まえて、学習領域間の関係や多様な関連性を生徒達に明確に示すよう、配慮されなければならない。スポーツ教師の専門的能力と演示は重要である。スポーツ教師は、(例えば、音楽、芸術、生物学、宗教/倫理、ドイツ語、物理学といった)他教科の教師たちや(例えば情報交換の夕べといった機会に)父兄たちと、さらに(例えば、健康やスポーツに関連している施設といった)学校外の諸制度と関わらなければならない。プロジェクト授業は、単にスポーツ種目や学習領域を越えるものだけではなく、教科の枠を越えるテーマが扱えるために、このような共同作業を可能にする。それは、例えば、次のものである。

5年生 楽器演奏付きの簡単な民族ダンス(Mu5)

6年生 持続性トレーニングが健康に与える効果(B10)

11年生 応用バイオメカニクス(Ph11)

全学年 スポーツと環境(B,Ek)

それにより、全体的な授業の実現という目標のもとで、様々な学習領域あ教科を関連させたりすることが可能になる。」(Das Bayerische Staatsministerium,1992,pp.757-758)

15.14.5 提示された新指導要領の全体像

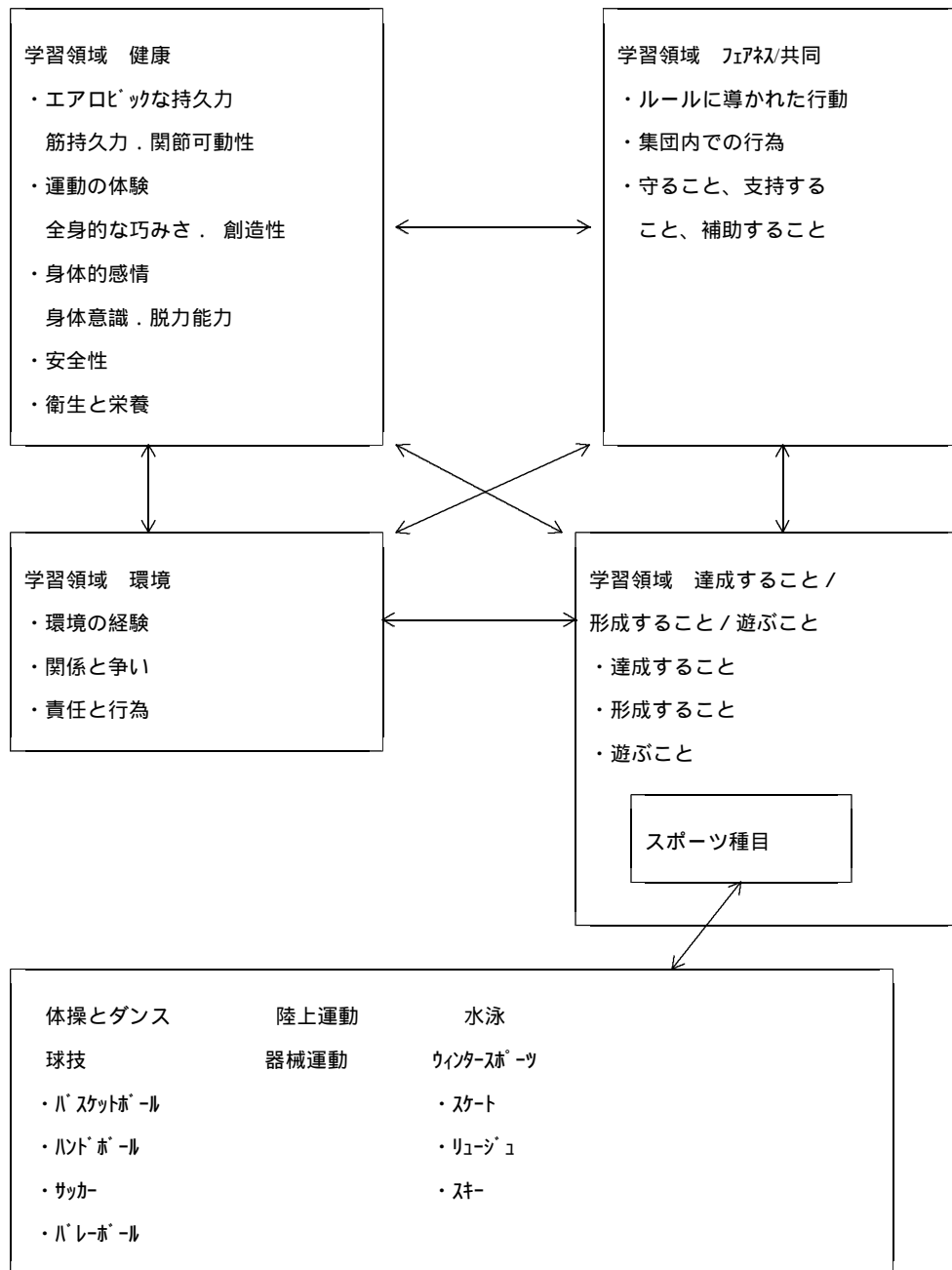


図 Bayern 州ギムナジウムの指導要領にみる基礎的スポーツ授業と上級スポーツ授業にみる学習領域の構成 (Vorleuter,1995,200)

§ 1 1 Bayern 州新指導要領にみるスポーツ授業の位置づけとそこで扱うことの可能な種目・領域一覧 (Das Bayerische Staatsministerium,1992,pp.754-57 より岡出が作成)

授業名	学年	週時数	設定可能な種目・領域群
基礎授業	5・6	2	健康・フェアネス/共同・環境

	7-11		達成すること/形成すること/プレイすること ギムナスティック/ダンス・陸上競技・水泳・ ボール運動・器械体操・
発展的 基礎授業	5・6	2	健康・フェアネス/共同・環境・ 達成すること/形成すること/プレイすること ギムナスティック/ダンス・陸上競技・水泳・ ボール運動・器械体操・
選択授業	7-11	2	・アルペンスキー・ハンドボール・ボート ・バドミントン・ホッケー・水泳 ・バスケットボール・柔道・ヨット・巧技 ・カヌー・護身術・アイスホッケー・陸上競技 ・ラングラウフ・フィギアスケート/アイスダンス ・サイクリング・ダンス・スピードスケート ・新体操・テニス・健康志向のフィットネス ・レスリング・卓球・サッカー・リュージュ ・バレーボール・器械体操
基礎コース	12-13	2	1.主選択種目 グループ A (個人種目) ・器械体操・陸上運動・水泳 ・ギムナスティックとダンス グループ B (団体種目) ・バスケットボール ・サッカー・ハンドボール ・バレーボール グループ C ・バドミントン・テニス ・卓球・ボート 2.副選択種目 ・アルペンスキー・ハンドボール・ボート ・バドミントン・ホッケー・水泳 ・バスケットボール・柔道・ヨット ・巧技・カヌー・護身術 ・アイスホッケー・陸上競技・ラングラウフ ・フィギアスケート/アイスダンス ・サイクリング・ダンス・スピードスケート ・新体操・テニス・健康志向のフィットネス ・レスリング・卓球・サッカー・リュージュ

			・バレーボール・器械体操
重点コース	12-13	6	グループ A (個人種目) ・器械体操・陸上運動・水泳 ・ギムナスティックとダンス グループ B (団体種目) ・バスケットボール ・サッカー・ハンドボール ・バレーボール グループ C ・バドミントン・テニス ・卓球・ボート

*基礎コースでは、生徒は基本的な運動能力や技能を習得するとともに健康、フェアネス/共同、環境という学習領域で必要とされる基本的諸能力を身につけていく。これに対して7年生以降の選択授業では、個々のスポーツ種目/スポーツ領域で求められる行為能力を発展させ、深めていく。そのため、学校の状況に応じて余暇に関連した28のスポーツ種目からの年度毎に1種目が選択ができるようになっている。また、基礎授業や発展的基礎授業では、4つの学習領域の目標と内容が学年段階に応じて範例的に、各学年で示されたスポーツ種目に示される。これに対して、選択授業では、その逆の方法が取られる。すなわち、個々の種目の特性が記され、学年段階とは無関係に、個々のスポーツ種目が健康教育、共同体教育、環境教育、運動教育に対してなし得る貢献が記されることになる。また、特定の条件が整えば、学校は扱う素材を増やすよう、文部省に申請できる。それにより、例えば、ゴルフやアイスホッケー、スポーツロッククライミングといったスポーツ種目がBayern州の学校に取り入れられるようになっている(Vorleuter,1998,213)。

15.14.6基礎授業の各領域で示されている教科内容と他教科との関連性

- ・単にメジャーなスポーツ種目のみではなく、マイナーな種目や地域性を考慮している。
- ・種目を超えた、どちらかといええばテーマを前提とした領域という発想を備えている点で、脱近代スポーツ志向、脱スポーツ種目志向の動きを具現している。
- ・種目固有のトレーニング方法や運動観察の方法を教えていくことを明記しているように、できるようになるために必要な手続きに関する知識や技術の教授が位置づけられている。
- ・単にできることのみが目指されているわけではない。そこでは、自らのパフォーマンスを向上させるために必要な知識や仲間とともにスポーツを行うために必要な知識、さらにスポーツを行うための社会的条件に関する知識の習得が目指されていることや自主的にそれらの学習を進めることが目指されている。
- ・テーマ的に設定された学習領域のみならず、個々の種目群の学習においても理論がはっきりと位置づけられている。特に、フェアネス/共同という学習領域において、コミュニケーション能力の育成に必要な役割の受容、関係の生み出し方といった点にも目が配られている。あるいは、環境という学習領域において社会科学的視点からみた自然とスポーツの関係に関する知識の習得を求めている。さらには、ダンスの学習のように、異文化理解という視点から素材選択が求められている。そこでは、はっきりと文化としてのスポーツの在り方を問う視点が設定されている。
- ・その意味では同指導要領には、わかることやわかる内容を共同的な関係の中での学びに組み込もうとする意図をはっきりと読み取れる。また、そのような学びの成立には、学習の対象となる知識や技

術が存在しているとの認識もはっきりと認められる。例えば、ゲーム中の達成状況の判断ができるように促すとともにそこにおける共同と敵対をテーマ化することを求める指摘である。これは、できることの意義を生徒自身が問い直すとともに、その問いを生徒自身が共有できる関係づくりを促すものという。

- ・球技の学習においても、競技で決められた人数でのゲームに固執しているわけではないように、教材づくりへの配慮がみられる。例えば、9年生（日本の中学3年生）のバレーボールでは、4対4のゲームが勧められている。これは、アメリカのスポーツ教育論と同様に、競技の形式ではなく、そこで学習されるべき教科内容としての知識、技術を前提に、それらが習得されやすいゲームの形式（教材）が尊重されているためだと考えられる。

資料1 Bayern州現行指導要領に記された基礎授業（7年生）の教科内容に関する記述

1.健康（2.フェアネス/共同、3.環境、選択授業 健康志向のフィットネス参照 健康教育）

生徒たちは、健康志向の学校スポーツの中で自らの経験を広げ、深めていく。健康関連の内容の練習並びに体験を通して彼等は、自らの身体に対する感受性をより高めていくべきである。彼等はまた、自らの知見を深めると共に、それを越えて、スポーツ授業外でも規則的な練習を行っていくための刺激を受けていく。

健康志向のフィットネス要因：エアロビックな持久力、筋持久力。関節可動性（生物5）

－エアロビックな持久力：持久力という観点から走、水泳、ゲーム、ラングラウフを行う。その際、主観的な負荷を客観的基準で補足するようにする（例えば、安静時の脈拍、負荷時の脈拍、回復期の脈拍）（陸上競技、水泳参照）

－筋持久力：（例えばメディシンボールやダンベルを用いて）負荷を自由に変えたり、体育館やトレーニングルームにある大きな器具を用いたりして、練習のレパートリーを広げる。

－関節可動性：関節可動性を向上させるためのトレーニング方法やその評価方法を知る。

運動体験、全体的巧みさ、創造性（4.達成する、形成する、遊ぶこと参照）

器具の活用をも含めて、調整能力を高めたり創造性を向上させる複雑な課題を設定する。例えば、使い慣れていない腕を特別に訓練することを通して、両腕ともに自由に活用できるようにしていく。

身体感覚、身体意識、脱力能力

－様々な負荷やスポーツ種目、外的条件によって身体がどのように反応するのかを自覚的に体験する。

－脱力するための方法論のレパートリーを一層増やす。（例えば、進歩的な筋リラクゼーション法（progressive Muskelrelaxation））

安全性（交通教育参照）

－様々な状況、スポーツ種目、負荷、練習形態並びに体調（Körperzuständen）で予測される健康や事故の危険に対する感受性を高める。

－補助具や安全具を自主的に用いる。（2.フェアネス/共同参照のこと）

－機能的なスポーツ施設に関する知識を豊富にしていく（Das Bayerische Staatsministerium、1992、773）。

衛生と栄養

－ウォームアップやクーリングダウン、さらには身体への配慮といった衛生的措置に慣れる。

－（身体活動の前後に水分を補給するといった）日常生活に必要な栄養とスポーツに必要な栄養に関する知識を増やす。

2.フェアネス/共同（カトリック並びにプロテスタントの宗教学、倫理学参照、平和教育、1.健康参照）

生徒たちは、共にスポーツを営むための前提条件に対して敏感にならなければならない。彼等は、多様なクラスメイトと共同してスポーツ活動やそれに必要なルールを作り出し、仲間に対する責任を追わなければならないことを学習していく。

ルールに導かれた行為（ボール運動参照）

—ルールづくりに関わり余地を認識するとともに、それを一緒にプレイするプレイヤーの（例えば、身体的）条件に具体的状況において応用する。

—場合によっては一緒にプレイすること際の障害になる個人的なルールの解釈を共同して解消させる。

—ルール違反がもたらす結果を経験し、それに対する処罰が必要な措置であることを知る。

—初歩的な審判としての役割をこなす。

共同体内での行為

—ゲームを方向づける中心的な考え方が役割の決定に対してもつ意義を認識する。

—限定的とはいえ、授業計画を共同して作成するとともに与えられた責任をこなしていく。

補助 / 安全確保 / 支持

—仲間が補助を必要としている授業の状況を認識する。

—安全確保や補助の方法をより自主的に活用する。（器械体操参照）

—教師の与える資料に即して簡単な修正ができるようにする。

3.環境（環境教育。1。健康参照）

生徒たちは、自分たちのスポーツ欲求とそれが環境汚染に与え得る影響の関係を意識するようになるべきである。運動する空間を広げる場合には「スポーツ」と「環境」という概念の広がりやスポーツ活動をする際に環境を保護するための諸原則に関する基礎的知識が伝えられることになる。

環境経験

—学校や自分の家庭の周りでスポーツ活動をする可能性を探ってみる。

—その際に、自然環境の地域的特性を知る。

関係と矛盾

—環境とスポーツの関係を知る。

—スポーツ要求が環境破壊に対して（例えば、ボートをすることにより海岸線に支障が出るように）直接的、（例えば、スポーツ施設を訪れる際の排気ガスによる影響のように）間接的な影響を与え得ることを認識する。（特に団体種目）（Das Bayerische Staatsministerium, 1992, 774）。

責任と行為

—運動に優しく、それを促すような環境を生み出すためのアイデアや提案を生み出す（例えば、休憩所（Puasenhof）：4。達成すること、形成すること、遊ぶこと参照）。

—簡単なルールを守ることでスポーツ活動を行う際の環境への負担が減少することを認識する。

4. 達成すること、形成すること、遊ぶこと

達成すること

生徒たちは、スポーツ種目固有に筋力やスピードを一層向上させるとともに関節可動性を高める。特に、彼等は、持久力を向上させる方法を様々な方法を知る。（陸上競技、水泳、ラングラウフ参照）既習の運動の安定性や精度が高まるとともに達成課題を解決するための様々な方法が試される。生徒たちは、運動徴表を認識することを学習するとともに、そのために運動を知覚するための課題を設定する。さらに、基本的なルールや量的、質的な違いを踏まえた競技方法を知っていくとともにそれを参加者の能力に合わせしていくことを学習していく。（2。フェアネス / 共同参照）

形成すること

生徒たちは、様々な姿勢を意識的に知覚し、様々な軸（例えば床の上や水中で）での回転を体験する。また、自分の用いることのできる運動の基本形態を増やすとともに、それらの組み合わせ方を試してみる。彼等はまた、一人、あるいはグループ内で様々なり

リズムを体験し、認識していくとともに、(例えば、多様なリズムのような)空間と時間という構成上の基準についても知っていく。さらに、彼等は、(例えば、バランスを取ることやボールを用いての巧技。ギムナスティック/ダンス参照のこと)様々な器具を用いて試行してみる。

遊ぶこと(余暇教育)

生徒たちは、一般的な、またスポーツ種目固有の調整能力やコンディショニング能力を向上させるためのプレイ形態を知るとともにプレイ組織と負荷の関係を体験していく。彼等はまた、技術や戦術の本質的要素(ボール運動参照)を向上させるとともにそれらがゲームのルールに大きく規定されることを知っていく。さらに、学校内のプレイ異空間を共同して生み出していくこと(3.環境参照)や余暇のためのプレイ集団(Spielgemeinschaft)を組織することを学習していく。

4.1 ギムナスティック/ダンス(音楽7;選択授業 巧技参照;芸術教育)

5年生のギムナスティック/ダンス参照。(5年生のギムナスティック/ダンス:男女別に編成されたスポーツクラスに応じてダンスを選択することが望ましい。(例えば、同一学年の様々なスポーツクラスの授業が同時に開講されているといった)組織的条件が整えば、基礎授業でもダンスを男女共習で実施できる(Das Bayerische Staatsministerium,199,764))

身体づくりと動きづくり(Körper- und Bewegungsschulung)(1.健康参照)

—音楽の伴奏をつけたり、つけない状態で、また補助具を用いたり、用いずに、(例えば、アイソメトリックトレーニング、ストレッチングといった)ギムナスティックの多様な領域内で姿勢や調整能力、関節可動性並びに持久力を向上させる。

表現力のトレーニング(Ausdrucksschulung)

—(例えば悲しみと喜びといった)相反する感情を(ポーズを取ったり身体像を変える(Körperbildern)といった)様々な姿勢で表現するとともに異なる2つのグループで対比させる。

手具を用いたギムナスティック(選択授業の新体操参照)

—音楽とボールを用いた動きを高める(男子は、「巧技」を高め、女子は動きの組み合わせを豊かにする)。

—縄を用いて動きのレパートリーを増やす(Das Bayerische Staatsministerium,1992,775)。

ダンス(選択授業のダンス参照)

—(例えば、地中海の民族舞踊、南アメリカの民族舞踊といった)民族舞踊で用いられている(人を配置する形態や姿勢、Fassung、運歩方並びに回転の仕方といった)ダンスの諸技術を知り、あるダンスを用いてそれを深く学習する(重点:社会的、統合的側面)。

理論

—リズムについての基本的知識を獲得する。

—(風習等)選択された民族舞踊の性格と構造を知る。

—扱われた領域のもつ健康上の効果について知る。

4.2 陸上競技(選択授業の陸上競技参照)

基礎的な運動経験

—遊び的な形態や競技形式で練習(5年生参照:持久走、スプリント走、跳躍、投擲)の強度を上げると共にそのレパートリーを増やす。

陸上競技の技術

跳躍と障害走の技術に一層習熟する。

—一定の踏み切りゾーンからの幅跳び

—(例えば、助走からの跳躍のような)一定のリズムを備えた高跳び

—プレイ形態での障害走(粗形態)

負荷の範囲と強度、基礎的な身体的能力の向上(1.健康参照)

- (例えば、20 分間以下のドライブ遊びといった) 持久力を高める方法に即した走、走路や芝の上、あるいはゲレンデのピラミッド走や時間走(Pyramiden- und Minutenläufe)。
- 陸上競技に必要な動きを改善するための機能的体操(Funktionsgymnastik)。

理論

- 競技で求められる行動と競技の形式
- 持久力を向上させるための基本的なトレーニング方法を知る(1.健康並びに水泳参照)

4.3 水泳

基礎的な運動経験

- (例えば、運動遊びや水球、距離潜水、深い地点までの潜水、手をパドルのように動かす泳ぎ。音楽に合わせての動き) 水中で動く経験を増やす。

水泳の技術

- 平泳ぎ並びにクロールのターンを習得する。
- 負荷をかける形態と強度、基礎的な身体的能力の向上(1.健康参照)
- 20 分以下の持久的水泳。
- (例えば、水球やリレーのような) プレイ的な持久力トレーニング。
- 平泳ぎあるいはクロールで 50 分以内泳ぐ。
- (例えば、足関節や肩甲帯のように) 水泳固有に求められる柔軟性を高めるための機能的体操(Das Bayerische Staatsministerium,1992,776)。

救難水泳(1.健康参照)

- 自己救出法(Selbstrettung)を向上させたり、移送泳法を習得する。

理論

- 持久力を向上させるための基本的なトレーニング方法を知る(1.健康並びに水泳参照)

4.4 ボール運動(選択授業バスケットボール、サッカー、ハンドボール参照)

基礎的なゲーム経験

- 動機付け、気分転換、授業への導入、授業の最後の盛り上げとして、あるいは持久力を向上させる手段として、共同したり、敵対したりするクライネシュピールを行う。

ボール運動の技術と戦術

基本的な技術と戦術の形態を一層幅広く習得する。(女子はバスケットボール/ハンドボール、男子はサッカー/ハンドボール)

- バスケットボール(特に、リバウンド、フェイント、同人数でのゲーム)
- ハンドボール(特に、ジャンプスロー、フェイント、例えばクロスプレイといった、集団での攻守の戦術行動)
- サッカー(特に、ボール保持、フェイント、集団での攻守の戦術行動)

守備の形態としてのマンツーマンマーク。

理論(2.フェアネス/共同参照)

- ルールに関する理解を深める。審判の示す合図を知る。
- 初歩的な審判の役割をこなす。
- 個人的な戦術行動や集団での戦術行動を知る。

4.5 器械体操(選択授業の器械体操参照)

5 年生の器械体操参照。(5 年生の器械体操：安全確保の方法を習得するが仲間意識を育む(2。フェアネス/共同参照)とともに、授業の効率を高め、事故を予防することになる。目的に合わせて器具やマットを活用するように配慮する。(1。健康参照)踏み切り用のトランポリンを用いての、あるいは器具や生徒をこえた展開跳びは禁止する。(Das Bayerische Staatsministerium,1992,766-67))

器械体操の基礎的技術

一次の構造群からの床運動並びに跳躍運動の技術の幅を広げる。

- ・回転運動：床での回転運動
- ・床でのギムナスティック的、ダンス的要素と静的要素。(女子)
- ・跳躍運動：距離跳躍(Tボックと跳び箱での閉脚跳び)、ミニトランポリン(マットのヤマの上から回転して抱え込みの宙返り)
- ・展開運動：5段の跳び箱を使って前方展開跳びを初めて経験する。
- ・すでに習得した技術と組み合わせ、また2-3人で他の器具や器具を組み合わせた場でこれらの技術を用いて演技する。

基礎的な身体的能力並びに精神的能力の向上

- －身体を伸展させたり、力を入れる一般的な練習や器械運動固有の練習を行う。
- －勇気や集中力を徐々に養っていく。

理論

- －器具の組立方や器具の安全確保並びに補助の仕方に関する知識を習得する。
- －器械体操独自の専門用語の基礎概念を獲得する(Das Bayerische Staatsministerium,1992,777)。

4.6 ウィンタースポーツ

スケート、リュージュ、スキーの個々の指導要領は、796-798 頁に記載。

15.14.7 選択制授業にみる教科内容

- ・基礎授業と同様、4つの学習領域別に教科内容が記されている。しかし、学年別の記載はみられない。
- ・ボール運動を例にとれば、選択制授業では、技術や戦術、さらにそれらを活用するために必要なコンディショニングづくり、専門用語の理解を含めた理論学習までが教科内容として明示されている。例えば、戦術に関していえば、個人戦術とグループ戦術、チーム戦術が識別された上でその具体的内容が提示される。また、このような教科内容を習得し、できるようになることのみが求められているわけではない。そこでは、授業で行っている自分たちのプレイを省察の対象に据えることはもちろん、仲間の行動や学校外で行われているスポーツを批判的に省察することも求められている。例えば、サッカーでは、仲間のプレイを評価し、それを修正することが求められる一方で、自分たちのゲームや競技会に責任がもるようになることを求められるとともに、そこでの経験を通して、プロのサッカーにみられる問題に取り組むことが求められている。
- ・バスケットボールやサッカーの種目の特殊事情が考慮されているとはいえ、両者は、すべての教科内容領域でほぼ同じ内容が設定されている。これは、種目の固有性を認めながらも、種目共通の教科内容の存在が意識されていることを示しているといえる。
- ・基礎スポーツ授受業では独立した領域として設定されていなかったにもかかわらず、選択授業では設定されている領域がある。例えば、「健康志向のフィットネス」である。この領域は、種目先行型ではなく、テーマ設定型だといえる。興味深いのは、この領域で保証すべき能力として脱力能力が設定されていることである。スポーツ種目型では、その種目の実技能力を高めるために筋持久力等、どちらかといええば、機会としての身体の性能向上に必要な能力が強調されていたのに対し、ここでは脱力という、それとは異なる能力が要求されている。また、身体そのものに対する知覚や感じ

方がテーマ化されている。

- ・環境汚染と健康問題の関係について認識していくことも、教科内容として位置づけられている。

資料2 Bayern 州現行指導要領に記された選択制授業の教科内容に関する記述例

バスケットボール

1.健康（健康教育）

バスケットボールは、一般的な持久力の向上という側面から健康づくりに貢献する。さらに、ゲーム中に生起する現象が複雑なため、調整力や心理的諸能力（例えば集中力、感情のコントロール）が育まれる。例えば誤った技術やうまくコーディネイトされていない跳躍運動によって生じ得る傷害を回避するため、また（腕の筋肉をあまり用いないことによる）筋肉のアンバランスな発達を避けるために、周到に用意された、バランスの取れた、全身的な弛緩運動、伸展運動並びに筋力を用いる運動が不可欠である。生徒たちは、さらに、基本的な安全確保の措置（例えば入念なウォームアップ、コントロールされた身体の使い方）について知るべきであるし、バスケットボールに必要な正しい栄養摂取（例えば試合時における水分補給、イオン補給）に関する基礎知識を獲得すべきである（Das Bayerische Staatsministerium,1992a.830）。

2.フェアネス、共同

生徒たちは、チームに貢献するように個人の能力を用いることを学習すべきであるし、適切なゲームや練習、試合の形態を通して、バスケットボールが互いのため、共同の関係、また敵対的关系を目的として行われることを経験すべきである。そのため、生徒たちは、（例えば守備におけるカバーリングのように）徐々に柔軟に生み出されることになるゲームのポジションや役割、戦術的課題を知ることになる。生徒たちは、審判を一層自主的に行うようになるとともにそれを通してゲーム中の行為をルールに即したものがそれを犯すものであるのかを判断できるように練習していく。バスケットボールではルール上、身体接触が厳しく制限されている。したがって、この種目は特に、フェアでルールにのっとったプレイの育成に特に適している。共同で学習することや競技会やトーナメントの援助、準備、実施を通して彼等は、責任を引き受けるようになっていく。さらに彼等は、仲間のプレイを評価し、それを修正することを学習していく。

3.環境

生徒たちはバスケットボールの授業で様々な外的条件（例えば室内用サッカーボールと芝生用サッカーボール）を体験するとともにグラウンドの大きさやルールの変更によって様々なプレイや運動が生まれ得ることを経験する。生徒たちは器具を大切に扱い、練習や試合を行う施設をきれいに保つことができるようになっていく。

4.達成すること・形成すること・遊ぶこと

技術

基礎授業で習得した基本技術を集中的に、両手で練習するとともに使える技術のバリエーションを一層増やしていく。

ーパスのバリエーション：特にオーバーヘッドパス、下手投げパス、バウンドパス、片手パス、ループパス。

ーシュートのバリエーション：特にレイアップシュート、ジャンプシュート、フックショット、フリースロー、スリーポイントシュート。

ーリバウンドのバリエーション：特に速攻と結びつるディフェンスリバウンド、パスと結びついたオフェンスリバウンド、タップ、ジャンプシュートからの投。

戦術

様々なゲーム場面で用いる戦術行動を向上させる。

ー個人戦術：特にフェイント、ブロック、低い姿勢でのプレイ、カット。

ーグループ戦術：特に積極的、消極的ブロック、ブロックへの対処、ダブル。

ーチーム戦術：特に速攻、マンツーマンディフェンス、ポジションチェンジ

スポーツ種目固有の体力づくりと調整力づくり

－基礎持久力、スピード持久力、スピード、スピード筋力、関節可動性、識別能力、反応能力、方向付け能力、予測能力は、一般的なゲーム形式やトレーニング形式並びに競技形式で高められる(Das Bayerische Staatsministerium、1992a、p.831)。

サッカー(基礎スポーツ授業 球技参照)

1.健康(健康教育)

サッカーは、一般的な持久力の向上という側面から健康づくりに貢献する。さらに、ゲーム中に生起する現象が複雑なため、調整力や心理的諸能力(例えば集中力、感情のコントロール)が育まれる。例えば誤った技術や、スピードが要求される走、跳、シュートの動き、あるいは、敵との身体接触によって生じ得る傷害を回避するため、また(腕の筋肉をあまり用いないことによる)筋肉のアンバランスな発達を避けるために、周到に用意された、バランスの取れた、全身的な弛緩運動、伸展運動並びに筋力を用いる運動が不可欠である。生徒たちは、さらに、基本的な安全確保の措置(例えば入念なウォームアップ、コントロールされた身体の使い方)について知るべきであるし、サッカーに必要な正しい栄養摂取(例えば試合時における水分補給、イオン補給)に関する基礎知識を獲得すべきである。

2.フェアネス、共同

生徒たちは、チームに貢献するように個人の能力を用いることを学習すべきであるし、適切なゲームや練習、試合の形態を通して、サッカーが互いのため、共同の関係、また敵対的关系を目的として行われることを経験すべきである。そのため、生徒たちは、(例えば守備におけるカバーリングのように)徐々に柔軟に生み出されることになるゲームのポジションや役割、戦術的課題を知ることになる。生徒たちは、審判を一層自主的に行うようになるとともにそれを通してゲーム中の行為をルールに即したのかそれを犯すものであるのかを判断できるように練習していく。共同で学習することや競技会やトーナメントの援助、準備、実施を通して彼等は、責任を引き受けるようになっていく。さらに彼等は、仲間のプレイを評価し、それを修正することを学習していく。フェアでルールに即した行動ができるようになる基礎として生徒たちは、過度な身体の使い方が共同的なプレイを不可能にしてしまうことを認識すべきである。また、それと関連して、彼等は(ゲームを有利にするためにファールを装うといった)プロのサッカーにみられる問題的な随伴現象に取り組むべきである。

3.環境

生徒たちはサッカーの授業で様々な外的条件(例えば室内用サッカーボールと芝生用サッカーボール)を体験するとともにグラウンドの大きさやルールの変更によって様々なプレイや運動が生まれ得ることを経験する。サッカーは、最も簡単な条件下でプレイし得るスポーツ種目である(Das Bayerische Staatsministerium,1992a.839)。生徒たちは器具を大切に扱い、練習や試合を行う施設をきれいに保ち、静寂を求める隣人への配慮ができるようになっていく。

4.達成すること。形成すること。遊ぶこと。

技術

基礎授業で習得した基本技術を集中的に両足で練習するとともに一層幅広い技術を習得する。

－パスのバリエーション：特に、高さ、幅、方向。技術のバリエーション：例えばアウトサイドパス。

－個人並びに集団でのボール保持のバリエーション：例えば胸でのトラップ並びに足の外側を使ってのボール保持。

－特殊なシュート技術。

戦術

様々なゲーム場面にみられる戦術行動を改善する。

－個人的戦術。特にボールをもたない場面でのラン。パスを送る(Anbieten)。フェイント。ドリブル。ボールを受けることを妨げる。

ボールカット。

－集団的戦術。特に、壁パス。ボール受け。ポジションチェンジ。ウィング攻撃。ゲーム中の時間稼ぎ。数的不利、同数並びに数的有利な状態でのプレイ。

ーチーム戦術：特に、個々のポジションのなすべき課題とプレイする空間。標準的状况（例えば、コーナーキック）での行動。ポジションチェンジ。ゾーンディフェンス。混合ディフェンス。速攻。プレイシステム。

ー具体的状況下で求められるゴールキーパーの技術。

スポーツ種目固有の体力づくりと調整力づくり

ー基礎持久力、スピード持久力、スピード、スピード筋力、関節可動性、識別能力、反応能力、方向付け能力、予測能力は、一般的なゲーム形式やトレーニング形式並びに競技形式で高められる。

理論

専門用語：ゲームのルール。戦術的原則。ゲームシステムに関する知識と分析。トレーニング法。運動分析と失敗の修正。競技会の準備と実施(Das Bayerische Staatsministerium,1992a840)。

健康志向のフィットネス

1.健康（健康教育）

「健康志向のフィットネス」というスポーツ領域は、基礎スポーツ授業の健康教育を一層促進するものであり、エアロビックな持久力、筋持久力、関節可動性、全身の巧みさ、脱力能力並びに栄養をその中心領域としている。スポーツを通しての健康教育では、運動の喜びや基礎的にスポーツをしたいという欲求が喚起され、生徒を生涯に渡る健康トレーニングを営む能力を与える技術、知識、態度、価値観を与えられるべきである。そしてそのために、生徒は、次の諸目標を踏まえて自らのトレーニング過程を自主的、個人的に校正留することを学習すべきである。

ーエアロビックな持久力、筋持久力、関節可動性という達成の前提条件を改善する。

ー全身的な動きの巧みさを高める。

ー心肺機能並びに整形外科的なリスクを低下させるか、避ける。

ー傷害のリスクを低下させる。

ー全身の筋肉を調和のとれた形で発達させる。その際に、アンバランスな筋肉の発達を避け、あるいはそのような状態を無くすとともに姿勢を改善する。

ー最適な体重にする。

ー負荷に対する耐性と回復能力を向上させる。

ー脱力能力を向上させる。

さらに、身体や身体の動き得る可能性に対する自覚を高めるために、やトレーニング中並びにトレーニング後の様々な身体知覚や感覚(Körperwahrnehmungen und Empfindungen)がテーマ化されなければならない。加えて、生徒は、(例えば、入念なウォームアップ、負荷の傾斜配分、機能的に運動を行うことといった)基本的な安全確保の措置や(例えば積極的な休憩や身体への配慮といった)衛生上の措置を知るとともにバランスの取れた栄養行動に関する知識への理解を深めるべきである。授業には、学外の健康制度の担い手(例えば、医者、健康保険、健康連盟)を招くことも可能である。

2.フェアネス、共同

生徒は、一人で言うフィットネストレーニングよりも人と一緒に行う練習の方が楽しいことを体験する。そこでは、互いに動機づけたり、補助したり、援助したりする機会が生み出される(重いものを用いたトレーニング時の補助、持久走時の相互の動機づけ)。そして、そこでは、異なる達成能力に対する理解も深められる。さらに生徒は、授業の一部を自分たちで組織し、自主的に運営する機会を得ることになる。彼等は、スポーツ授業外に自ら責任をもってスポーツを行えるように励まされるべきである(例えば、「実践的な宿題」や共同で組織した走る会(Das Bayerische Staatsministerium,1992a,,842)。

3.環境

生徒たちは、特に、屋外でのトレーニングを通して環境の健康の関連を知る。彼等は、自然に対する負荷が自分自身の健康に還元されること(例えば大都市での排気ガス、あるいは極度のオゾンの集中。)したがって、環境を汚染から守らなければならないことを自

覚する。徒たちは器具を大切に扱い、練習や試合を行う施設をきれいに保てるようになっていく。

4.達成すること、形成すること、遊ぶこと。

生徒たちは、自分自身の達成能力を身体知覚という主観的な基準並びに（例えば、脈拍の測定といった）客観的な測定方法を用いて評価しするとともにそれにふさわしい負荷を決定する。健康志向のフィットネスは、次の内容並びに方法を選択することにより促進されることになる。

－エアロビックな持久力：例えば、走ること、泳ぐこと、ラングラウフ、持久力育成という視点からなされるゲーム、機械での持久力トレーニング（例えば自転車エルゴメーター）、フィットネス体操、（例えばエアロビック）、エアロビックに解糖や脂肪分解を促すトレーニング方法が活用される。

－筋持久力：器具あるいは機械を用いたりそれを用いずに大筋群を用いるトレーニングを行う。またその強度は、一シリーズ 10-20 回であり、完全な筋疲労が起きない範囲にする。

－関節可動性：全身を用いる機能的な伸展運動。

－脱力能力：静かな呼吸、進歩的な筋肉リラクゼーション、ヨガからの練習。

－栄養：バランスのとれた栄養を取るための諸原則。

創造的な巧技や動きを生み出す運動課題並びに年齢に応じたプレイ形態は、筋力トレーニング、持久力トレーニング並びに関節可動性トレーニング間の交代やその間の時間ををもたせてくれる（Das Bayerische Staatsministerium,1992a.843）。

15.14.8紹介されている種目の枠を越える具体的な授業像

Bayern 州指導要領では、種目の枠を越える授業も構想されている。その具体例は、下表に示す通りである。

§ 1 2 バasketボールのマンツーマンディフェンスからサッカーのゲーム戦術へ移行する指導案(Garreis,1998,11-13)

バスケットボールのマンツーマンディフェンスからサッカーのゲーム戦術へ	授業時間 90分
LP8.4.4 球技	Stundenbild Nr.2
組織と教授学的示唆	授業のねらい
導入 バスケットボール 1 個。サッカーボール 1 個。ビブス。 クラスを 4 つのグループに分ける。2 グループは 1 個のサッカーボールで、他の 2 チームは 1 個のバスケット	1.2 つのコートでのパルタイボール 体育館半面でバスケットボールのパルタイボールが、残り半面でサッカーのパルタイボールが行われる。 ・敵がボールに触ることなく 10 回パスが通ると 1 点。 ・5 分後にコート进行代わる。 ・バスケットボールは(ドリブル無しで)パスとキャッチのみで、サッカーはパスとトラップ、ドリブルを用いて行われる。
	GES 一般的なウォームアップ 柔軟性

<p>ボールでゲームをする。</p>	<p>音楽 4,5,6</p> <p>2. ストレッチング ・指導要領 8/1、AH1,S.13 に示した標準的ストレッチプログラム参照。</p> <p>3. 紐つかみ 二人組になり基本線にそって 3m 離れて立つ。 ・ペア 1 とペア 2 は、伸ばした腕がようやく触れるような位置まで離れて、手をつかむ (図 11.1 参照)。</p>	<p>LGS</p> <p>バスケットボールを用いてのパス、キャッチ</p> <p>サッカーでのドリブル、トラップ並びにパス</p>
<p>丸くなって座る。</p>	<p>主要部分</p> <p>1. 攻守のプレイヤー 授業中の話では、バスケットボールとサッカーの守備者の守るべき基本的位置取りや動きが再度、説明される。 ・守備者は、常にオフenseとゴールの間に立つ。 ・走り抜けられないようにするために、ボールをもったオフenseに対して一定の距離を保つ。</p>	<p>LGS</p> <p>守備をする際には戦術の基本原則を認識する。</p>
<p>生徒一組にバスケットボールやサッカーボール 1 個。 器械体操のマットをサッカーのゴールにする。 生徒たちは二人</p>	<p>2. 体育館の中を走る ペアの二人がオフenseとディフェンスになって体育館中を移動する (図 12.1 参照) ・体育館の端から端まで移動すると役割を交代する。 ・1 回戦終了後、ボールを交換する。すなわち、常に交代で、サッカーボールとバスケットボールが行われる。</p> <p>3.1 対 1 体育館の空いている場所を使って、生徒たちは 1 対 1 を行う。</p>	<p>LGS</p> <p>バスケットボールとサッカーのディフェンスの姿勢を練習する。</p> <p>2 つのスポーツ種目でマンツーマンディフェンスを行</p>

<p>組で体育館中(体育館中を走り回る)あるいは体育館の空いている場所で練習する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・1分間の1対1を4セット行う(間に30秒の休憩を入れる) ・パートナーで1分ごとにボールを代える。すなわち、最初の1分にサッカーを、そして続く1分でバスケットボールを行う。 ・生徒たちは、自分たちで関連するルールを守る。 	<p>う際の姿勢が改善される。</p> <p>自主的に、フェイントを入れる。</p> <p>様々なスポーツ種目で用いられている多様なゲーム戦術を習得する。</p>
<p>丸くなって座っての話し合い</p>	<p>4.「ギブアンドゴー」あるいは「壁パス」授業中の話し合いの場面で、まずは、バスケットボールの「ギブアンドゴー」とサッカーの「壁パス」が対比される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ギブアンドゴー」と「壁パス」の概念を説明する。ディフェンスに攻撃を仕掛けようとしている、ボールをもったオフenseが、味方にパスする。パスをした後、そのプレイヤーはディフェンスを回避して移動し、再度、味方からボールを受け取るによりシュートを打つチャンスを得る。 ・二人の生徒が2つの球技でこの原理を実際に示す。 <p>サッカーの壁パスがゲーム中に用いられる短期的な戦術に過ぎないのに対して、バスケットボールの「ギブアンドゴー」は完全な攻撃システムに組み入れられている(図 12.2)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プレイヤーたちは特定のシステムにしたがってポジションチェンジを行う。 ・この原理を通してすべてのポジションのプレイが行われる。 ・パス受けのポジションを取ること、オフenseリバウンド並びにボールを奪われた際に速攻への対処は、認められる。 ・一人のプレイヤーをパス受けのポジションを取るプレイヤーとして固定する。あるいは、そのポジションを他のプレイヤーと交代する。 	<p>GES</p> <p>エアロビックな持久力の向上</p> <p>FKO</p> <p>パートナーと競い合う。</p> <p>パートナーと勝敗を抜きにして練習する。</p>

<p>3人グループにバスケットボールかサッカーボール1個、サッカーゴール2つ、バスケットボールゴール2個。</p> <p>生徒たちは3人一組で体育館全体を使って練習する(12頁、体育館中を走るを参照)</p>	<p>ハーフコートで生徒たちは2対1を行い、バスケットボールであれば「ギブアンドゴー」の原理を、サッカーであれば「壁パス」の原理を応用するように試みる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コートの中から端まで移動すると、攻守を交代する。 ・2往復すると生徒たちはポジションを変える。 <p>5.体育館でのサッカーとバスケットボール</p>	<p>LGS</p> <p>バスケットボールで「ギブアンドゴー」を練習する。</p> <p>サッカーで「壁パス」を練習する。</p>
--	--	--

15.15.Hamburg州

15.15.1ハンブルク州初等段階指導要領にみる「運動領域」という発想

§ 1 3 ハンブルク州初等段階の運動領域構成 (Behörde,1998,5)

運動領域		環境との関係
1.身体	器具無しで動く	個人的環境
2.ゲーム	ゲームで動く	社会的環境
3.器具	器具を用いたり、器具で動く	物的環境
4.音楽	音楽とともに動く	メディア的環境
5.水	水中で動く	メディア的環境
6.ゲレンデ	ゲレンデで動く	空間的環境

15.15.2ハンブルク州初等段階指導要領にみる「スポーツを通しての教育」－「身体」領域の扱い－

§ 1 4 Hamburg 州初等段階「身体」領域の内容、目標、留意点一覧 (Behörde、1998、6-7)

内容	目標	留意点
緊張と脱力		事物授業

<ul style="list-style-type: none"> - ゆるませる。伸ばす。力を入れる。例えば、「硬直した人」や「樹幹」。 - 信頼ゲーム。 - 空想の旅。 - 身体を用いた旅。 - ヨガの練習。 - アクロバティックの練習。 - フィットネスのための運動。 	<p>自分自身の身体に慣れる。 触られた場所がわかる。 身体の部位の名前がいえる。 身体と実験的、創造的に関わ りる楽しさを感じる。 自分自身の身体を受け入れる。 緊張と脱力を感じる。</p>	<p>性教育 授業中には運動と休憩を組み合 わせる。 例えば、膨らまされた空気入り マット、痛いつらら、落下する 木葉等を絵で示す。 身体を使う作業を遊び的な形態 を行 フィットネスプログラムを子ども とともに創る。 アクロバティックを行う際には、 特に安全面に注意する。</p>
<p>表現と再現</p> <ul style="list-style-type: none"> - 例えば、喜びや怒りのような感情 - 例えば、クリームを塗ることや歯磨きのような活動。 - 例えば、人間や動物、乗り物、マリオネット、人形、ロボット等の役割を演じる。 - 雷雨のような状況。 - 影絵芝居。 	<p>身体を用いて何かを表現する。 恥ずかしからず人前、あるいは 人と一緒に動く。 特徴的な動きを見つけ、それを 再現する。</p>	<p>再現的ゲーム 音の出る物、騒音、リズム、織 物と色を用いる。 音で運動を盛り上げる（音楽 4 参照）。 教科の枠を越えたプロジェクト 並びに生産プロジェクト</p>
<p>走ること</p> <ul style="list-style-type: none"> - ゆっくりと、速く。 - 持続的に、リズムカルに。 - 様々な走路を。 - 障害を越えて/周りを。スラ ロームで。回転して。 - スタートの合図。リレー。バ トンパス。 - 時間走。 	<p>自分の走のリズムや呼吸のリズ ムを感じる能力を発達させる。 自分の走能力を評価する。 走の距離/時間を効果的に配分 する。 身体の発する信号を知覚し、そ れに反応する。 素早くスタートし、止まる。 空間を移動するスピードを変え るとともに硬く、可動性のある 障害を設定する。 年齢に応じた持久走(8年生で8 分) 50m までの距離を走り抜く。 リレーでの確実なバトンパス。 スタートの合図を知る。</p>	<p>健康促進 交通教育 走る際に姿勢や方向を様々に変 えてみる。 例えば、うつ伏せや仰向けとい った、様々なポジションからス タートする。 スタンディングスタートとクラ ウチングスタート。 集中的に走る際には、(気温、 オゾン、ほこり、排気ガスとい った)環境要因が与える影響に 注意する。 走ゲーム。「ゲーム中に動く」 を参照。 事前に設定されたりリズムで走 る。「音楽に合わせて動く」を</p>

<p>跳ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 遠く、高く。 - 立位並びに助走から片足並びに両足踏切で、障害物を越えて。 - 助走距離や助走のスピードを様々に変えてみる。また、様々な踏切地点や着地地点を経験させる。 - 閉脚跳び、かえる跳び、はさみ跳びとそり跳びといった様々な跳躍フォーム。 - リズムに合わせて跳躍する。 - ゾーン跳び。 - 段ボール、水壕、子ども用ハードル等の障害跳び越し。 	<p>跳躍に助走を合わせる。</p> <p>自分の跳躍可能性を評価する。</p> <p>踏切ゾーンからの片足踏切。</p> <p>上手に着地する。</p> <p>跳躍距離を伸ばす。</p> <p>助走から紐／バーを越える高跳び。</p>	<p>参照。</p> <p>整地をする際に安全に注意する。</p> <p>跳躍距離を自分で測定する。</p> <p>跳躍局面を伸ばすためにグレンデを活用する。</p>
<p>格技</p> <p>パートナーや的を引く、ずらす、持ち上げる、運ぶ、あるいは押す。</p> <ul style="list-style-type: none"> - マットの上で（とっくみあい） - 地面、あるいは決められた床で。 - 線の上で。 <p>高くされることから（ピン、インディアンクラブといった）器具に対して</p>	<p>圧力や引きを通して自分や他人の身体を感じる。</p> <p>密接な身体接触に耐える。</p> <p>自分や敵の身体に対して責任をもって関わる。</p> <p>「負ける」ことができる。</p>	<p>性教育</p> <p>とっくみあいではルールと儀式を子どもとともに見つける。また、場合によってはそれを修正する。</p> <p>場合によっては練習場をマットで覆う。</p> <p>場合によっては靴を脱ぐ。</p> <p>プッシュボール、フィジオボール、メディシンボールを用いてもとっくみあいを行ってみる。</p> <p>プレイの形態や一層詳しい留意点については、「ゲーム中に動く」という運動領域参照のこと。</p>

15.15.3ハンブルク州中等段階 のスポーツ科カリキュラム

ー必修授業、選択授業、プロジェクト授業の位置づけの違いー

5) 課題と目標

「スポーツ授業の中心的課題は、生徒がスポーツの中で行為できる能力を発達させ、向上させることである。

この課題を実現するために、スポーツ授業は、スポーツ種目に拘束されていない多様な運動形態とスポーツ種目の範囲内で技術を用いたり、ルールに即した行為ができる能力を育成する。さらに生徒は、スポーツの中で得た人格的経験を自分自身で、あるいはグループで知覚し、それに省察を加えることを学習すべきである。それは、新しいスポーツを発達させ、スポーツ活動を行うために必要な自分自身の

判断をできるようにしていく前提条件である。

スポーツ授業は、開かれた課題を通してこの過程を推進させ、運動を自主的、発見的に生み出せる能力を育成すべきである。習得された技能は、確定された形態とルール内で創造的活動を可能にする基礎となる。

スポーツ授業の担うより広範な課題は、相互援助や配慮、オープンで、暴力的ではなく、フェアな抗争を可能にする、社会的な学習目標の達成に寄与することである。そのような社会的行動は、自主的な練習により獲得されると共に、豊かなものになっていく。

スポーツ授業はさらに、プレイ、運動と運動創り、フェアな競争を促し、維持することを通して、人格の発達に寄与する。スポーツ授業は、個人的な能力にふさわしい他姓をあげたり、それを越えていく、生徒の強い意志を培う。

スポーツ授業の緊急の課題は、生徒の健康を促進することであり、健全な生活を営むために必要な基礎を培うことである。適切な運動刺激や機能的刺激を通してポジティブな身体の発達が促される。多様な生徒の要求や負荷とリラックス、緊張と脱力の交代は、成長、成熟過程を促すと同時に、教室での授業や専門的な授業に見られる座業への保障機能を備えている。

スポーツ授業は、努力することと満足感を意識させることにより、安寧を保障し得る。そこには、自分自身の身体的達成能力の限界に対する洞察や機能的（健康的）なスポーツ運動と日常運動と非機能的（非健康的）なその違いに関する知識も含まれている。

授業外では、付加的なスポーツの提供や競技会を実施すること、さらにはクラブとの共同関係を通して、学校生活を豊かにすべきである。スポーツ授業は、余暇生活や学校卒業後に自ら目標を設定してスポーツを行うように生徒を促すことを通して、その実現を促すものである。その前提条件は、積極的にスポーツ授業や学校スポーツづくりに関与することを学習することである。」(Behörde für Schule, Jugend und Berufsbildung,1994,5)

§ 1 5 Hamburg 州中等段階 のスポーツ科カリキュラムの領域構成(Behörde、1994)

	種目あるいはテーマ	下位領域
必修授業	グループ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 器械体操 ・ 体操 ・ ダンス ・ 陸上運動 ・ 水泳
	グループ	<ul style="list-style-type: none"> ・ バスケットボール・サッカー ・ ハンドボール・ホッケー・バレーボール。
	グループ	<ul style="list-style-type: none"> ・ バドミントン ・ アイススケート ・ 柔道 ・ カヌー ・ ヨット ・ スカッシュ ・ テニス

選択必修授業	スポーツ運動	<ul style="list-style-type: none"> ・卓球等 ・提示された運動を行うこと ・重要な運動徴表を記述する ・客観的に示された運動と主観的な運動のイメージを対比する
	スポーツトレーニング	<ul style="list-style-type: none"> ・練習とトレーニングの基礎 ・技術、戦術並びにコンディショニングという概念紹介
	スポーツと健康	<ul style="list-style-type: none"> ・ウォームアップ並びに筋肉を事前にのばすことの意義 ・脈拍測定 ・衛生 ・スポーツウェア並びにスポーツシューズの（衛生的）機能
	スポーツにみられる行動	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な行動様式 ・グループづくりや集団づくりに際しての基本的問題 ・約束、確認、ルールの意義 ・フェアプレイ
	スポーツと社会	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲームとスポーツの歴史的発展 ・居住地区でスポーツのもつ可能性
プロジェクト授業	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツ祭りを計画して、実施する ・新しいスポーツを創る ・ダンスの様式の歴史の変遷を調べ、追体験する ・バイオメカニクスあるいは、物理学がスポーツにできることは何か ・「マラソンランナーの孤独」と文学にみるスポーツの例 ・自分のスポーツ活動をビデオで紹介する ・ミュージカルづくり ・フィットネススポーツ：可能性と問題点 ・故郷を知る（歩いて／自転車で／ボートで） ・キビーカーベルと他の路上遊び ・余暇に男女が一緒にできるスポーツとは？ ・外国のスポーツ 	

	<ul style="list-style-type: none"> ・どのスポーツクラブに行くべきか？ ・障害者がどのようにスポーツをしているのかを調べ、共にできるスポーツ際を計画する。 ・審判の活動を調べて、あるスポーツ種目のそれを習得する。 ・ドーピング反対。健康問題だけなのか。 ・生きている広告塔。スポーツと広告。 ・スポーツは環境を破壊するか等。
--	---

必修授業は、これら三グループのみならず、社会で実施されている多様な運動文化からスポーツ種目に依存しない要素を扱うよう求められている。例えば、ニューゲームやアクロバット、クライネシュピールである。それらは、単に個々の球技や個人種目の学習と関連させて指導するのみではなく、授業の中で独自の位置づけがなされなければならないとされている。なお、同時にここでは、早期の専門化ではなく、スポーツができる能力を幅広く使うことが求められている (Behörde, 1994,9)。なお、ハンブルク州中等段階 指導要領では、年間授業時数の 2/3 の内容が必修の内容とされている。すなわち、34 週間のうち 22 週間がそれに当たる。逆に、1/3 に当たる 12 週間は、グループ 並びに に示されたスポーツ種目の既習の内容を深める時間として、あるいは、グループ に示された種目や新しいスポーツの学習に活用できることになっている (Behörde, 1994,9)。また、表 16 にみるように、複数学年にまたがって時間が配当されている内容領域と単学年で時間が配当されている内容領域が併存している。このような措置は、ザールランド州にもみられる。

§ 1 6 ハンブルク州中等段階 のスポーツ科カリキュラムの
個別領域時間配分一覧 (Behörde, 1994,10)

学年	週	年	内容を規定して提示する時間						内容を規定しない時間	
			時間*	グループ のスポーツ種目			グループ のスポーツ種目			
段階	時間	時間	時間	陸上運動	器械体操 + 体操 / ダンス	水泳**	時間	サッカー / バスケ / ホッケー / ハンドボール	バレーボール	時間
5	3	102	34	17	17	34	34	17+17		34
6	3	102	34	17	17		34	17+17		34
7	3	102	34	17	17		34	19	15	34
8	2	68	23	11	12		23	8	15	22
9	2	68	23	11	12		23	12 + 11		22
10	2	68	23	11	12		23	12 + 11		22

* 1 年は、34 週間で計算されている。

一覧に示された時間数は、1 年間に個々のスポーツ種目に配当される計算上の字数である。1 時間内に複数のスポーツ種目を扱うか否か、また、単元を構造化するか否かは、スポーツ教師の判断に任される。年間計画作成に当たっては、スポーツ種目領域

、 に示された時間数が維持されなければならない。

* * 通常は、基礎学校（3-4年）で始められる水泳は、再度、7年生で教えられることになる。専門委員会の決議では、水泳は5年生ないしは6年生で教えてもよいことになっている。（水泳の時間の保障受諾という）組織上の理由を根拠にこの決議は長年、遵守され、7年生の終了時までには一覧上で5-7年生に示された時間数が遵守されてきた。（年間34時間の配当される）「水泳の年度」には3つのスポーツ種目グループの時間数は1/3づつ短縮される。

15.16. Saarland州改訂指導要領(1988,1993)

15.16.1 基礎学校(1-4年生)(1988)にみる教科の位置づけ

Saarland州は、かつてスポーツ教授学の大家でJ.N.Schmitzの在籍したザールブリュッケン大学の位置する州であり、フランスを国境を接している。そのSaarland州の基礎学校指導要領は、学校でスポーツ授業を位置づける根拠を、スポーツを通しての教育とスポーツの中の教育の2つの観点から指摘している。例えば、全人形成への貢献、健康や運動能力の発達への貢献という観点と共にスポーツを行うために必要な知識や社会的、情意的行動の形成を求めている。さらに、技能下位児や外国人の子どもといった、マイナーな存在への配慮を求めている。

また、スポーツの中の教育についても、教科指導のみならず教科外でのスポーツ活動等の参加を促すという意味での生涯スポーツ志向を明確に謳っている(Saarland,1988,3)。

その意味では、スポーツの中の教育にしても単にできることに矮小化されたスポーツ像ではなく、仲間と共にスポーツを行うために必要な知識、技術の保証をその責務として位置づけている。具体的には、次のようにそれは説明されている。

「スポーツ授業は全人形成に貢献しえる。そのため、スポーツ授業は、青少年の全体的な陶冶と教育を担う重要な要素として位置づけられる。そこでは、スポーツを行う際に重要な健康や精神運動という観点のみならず、スポーツを営む際に必要な認知的領域や社会-情意的領域が軽視されてはならない。

具体的には、次のものが設定できる。

—スポーツ関連の知識や洞察を年齢に応じた形で伝える。

—他人を助ける、フェアネス、共同、パートナーシャフト、技能下位児や外国人の子どもたちへの思いやりといった社会的経験を促す。

—授業以外にも定期的にスポーツを行うように促す(学校での同好グループ、クラブ、クラブスポーツ)。

基礎学校の学校スポーツは、児童の備えている基本的な運動欲求を出発点として行う。最初の2年間では開かれた運動教育とプレイ教育を通して基本的な運動経験と技能を教えていく。子どもに適した形でのスポーツ種目固有の習熟保証は、3,4年生の授業で徐々に中心に据えら得ていく。」(Saarland,1988,3)

また、このような理念実現に向けて必要な条件として、次の諸点を指摘している。

1)時間割の設定の仕方。具体的には、授業は月、水、金というように、均等に割り振ること。また、基本的には1時間単位で設定すること。ただし、水泳は2年生で実施すること、また、そのために必要な場所を確保すること(Saarland,1988,4)。

2)安全確保。大小の器具を扱うことにより事故が防げるし、秩序ある授業が展開できる。その際、器具の損傷を避けなければならないし、それにより修理費を節約できる(Saarland,1988,4)。

3)健康、衛生上の配慮。衛生や健康という目標という観点からすれば、スポーツ授業は教科としては特殊な位置を占める。具体的には、スポーツウェアの着用、更衣と上体や足の洗浄やシャワーの使用が進められている。なお、そのような措置は、他教科では必要とならないこと、時間がかかることも指摘されている(Saarland,1988,4)。

4)身体的条件や心理的障害が原因で運動能力の低い児童に対しては、正規のスポーツ授業と並びに一定の意図のもとで展開される促進授業を行うこと(Saarland,1988,4)。

15.16.2基礎学校(1-4年生)(1988)にみる教科の目標構造

上記の教科の位置づけを踏まえて設定されている教科指導の目標は、互いに相補的關係におかれる精神運動(psychomotorisch)、認識(kognitiv)、社会-情意(sozial-affektiv)の三領域から構成されている。例えば、(情意的要素である)楽しさは(認知的要素である)精神的な受容姿勢を生み出し、(精神運動性要素である)反応能力や調整力を向上させることになる(Saarland,1988,5)。なお、これら個々の領域は、次のように説明されている。

精神運動領域(psychomotorischer Bereich)は、機能的な運動並びにそれを可能にする感覚的要因を含めたものである。具体的には、次の2つの学習目標が設定されることになる。

1)多様な運動経験並びに発達段階に応じたスポーツ的な運動を行う際に必要な基本的習熟を伝えること。

2)健康維持、発達障害や姿勢障害、調整力障害、器官能力障害の防止(Saarland,1988,5)。

ここでは、発達段階を意識した上で、スポーツを行うために必要な能力と一般的な運動能力が分けられている。

情意的領域(affektiver Bereich)としては、次の2つがあげられている。

1)社会的観点：

—共同体に参加できる能力の教育。

—年齢に応じたパートナー教育やグループ教育の促進、他人を相互に援助する能力形成並びに決定に対する喜びの促進。

2)情意的観点(emotionale Aspekt)：

—学校在学時並びに卒業後のスポーツを行う際の楽しさ保証。

—自信、抑圧、葛藤並びに不安の解消(Saarland,1988,6)。

認知的領域(kognitiver Bereich)としては、次の2つがあげられている。

1)ゲームのルール、競技の仕方に関する知識並びにスポーツ運動の基本的経過に関する洞察。

2)知覚能力と反応力並びにゲーム中の役割の割り振り、特定のポジションをこなすことといったグループダイナミック的關係の必要性(Saarland,1988,6)。

15.16.3基礎学校(1-4年生)(1988)にみる領域構成

§ 1 7 Saarland 州基礎学校指導要領(1988)にみる領域構成(Saarland,1988,7-37)

領域名	下位領域	テーマ
体操/ダンス	機能的体操	
	リズム体操	
	器具を用いた体操	
ゲーム		
陸上運動	走：	
	スタンディングスタートとクラウチングス	

	タート	
	短距離走	
	持久走	
	リレー	
	障害走	
	跳：	
	走り幅跳び	
	走り高跳び	
	投：	
	助走からのシュラークボールの遠投	
器械体操 ¹⁾	床 鉄棒 / 段違い平行棒 平行棒 吊り輪 / 振動吊り輪(Tauer)) 逆さに置かれたベンチ / 平均台 跳び箱 / 交差して置かれた跳び箱 ミニトランポリン 器具の組み合わせ	
水泳		

1) 器械運動では、子どもに適した形態で行うよう、指示されている。

もともと、表 17 にみるように、1 年生がこれらの領域名がら用いられているわけでも、また、これら 4 領域すべてが設定されているわけでもない。

§ 1 8 Saarland 州基礎学校の各学年の領域構成 (Saarland,1988,11-13)

学年	領域	テーマ領域	扱う教材、教具
1/2	・器具を用いた運動遊び並びに器具を用いない運動遊び	・模倣遊びや再現遊び ・歌唱遊びとダンス遊び	
		・走遊び	・交通遊び ・数字競争 ・場所探しゲーム ・鬼ごっこ ・障害走遊び
		・手具を用いる	・リング ・こん棒 ・棒 ・縄
		・モノを用いた遊び	・豆袋 ・新聞

			<ul style="list-style-type: none"> ・タイヤ ・自転車のタイヤチューブ ・風船 ・タイル 	
		・ボール遊び	・ソフトボール、バレーボール、ハンドボールといったボールを用いる。	
		・屋外遊び		
		・全身的な巧みさや部分的な巧みさを養う遊び		
	・大きな器具を用いた運動遊び	<ul style="list-style-type: none"> ・大きな器具 ・器具の道 ・器具の組み合わせ 	<ul style="list-style-type: none"> ・大きな器具 －マット －ウレタンマット －ベンチ －踏切版 －小さな跳び箱 －ボックス －跳び箱 －はしご －肋木 －棒 － －吊り輪 －鉄棒 －（段違い）平行棒 －リニューネブルガーステージェルン ・器具の道 ・器具の組み合わせ 	
	・水中での遊びや動き	<ul style="list-style-type: none"> ・プールでの正しい行動の仕方 ・水慣れ ・飛び込み ・平泳ぎ 	<ul style="list-style-type: none"> ・水という要素を初めて知る ・初めての水中の経験 ・水の抵抗 ・呼吸 ・推進力 ・滑ること ・潜水 	
3	・器具を用いた運動遊び並びに器具を用いな	<ul style="list-style-type: none"> ・模倣遊びや再現遊び ・歌唱遊びとダンス遊び－体操 		

	い運動遊び	<ul style="list-style-type: none"> ・陸上運動的な運動形態 ー走 ー跳 ー投 		
	・ゲーム	<ul style="list-style-type: none"> ・クライネシュピール ・ゴールゲームとコルプボール ・(団体) ネット型ゲーム 		
	・大きな器具を用いた遊び	<ul style="list-style-type: none"> ・大きな器具 ー床 ー鉄棒 / 段違い平行棒 ー平行棒 ー吊り輪 / 振動吊り輪 ー長椅子 / 平均台 ・器具の道 ・器具の組み合わせ 		
4	・器具を用いた運動遊び並びに器具を用いない運動遊び	<ul style="list-style-type: none"> ・歌唱遊びとダンス遊び ・陸上運動的な運動形態 ー走 ー跳 ー投 		
	・ゲーム	<ul style="list-style-type: none"> ・クライネシュポルトシュピール(ミニゲーム) ・球技の前形態並びに修正ゲーム 		
	・大きな器具を用いた遊び	<ul style="list-style-type: none"> ・大きな器具 ー床 ー鉄棒 / 段違い平行棒 ー段違い平行棒 ー平行棒 ー吊り輪 / 振動吊り輪 ーボックス / 跳び箱 ー長椅子 / 平均台 ーミニトランポリン ・器具の道 ・器具の組み合わせ 		

器械運動では、段違い平行棒や平均台、吊り輪、ミニトランポリンが位置づけられている点は、日本との違いといえる。また、器具を組み合わせた場づくりが提案されている点や、ミニトランポリン、鉄棒 / 段違い平行棒といった扱いがみられる点では、いわゆる競技化とは異なる志向を読みとれる。さらに、ボールゲームが独立した領域として設定されるのが3年生であることも特徴的である。

なお、テーマ領域の記述まで降りてみれば、水や空間、モノ、自然の経験が意図されていることも確認できる。また、巧みさやスポーツを行うために必要な基本的な動きの習得が意図されていることも確認できる。

15.16.4中等段階 (5-10年生)(1993)

教科内容の領域が、スポーツ種目をベースとした領域とスポーツ種目の枠を越えた、いわゆる、教育一般で求められる能力といった、スポーツ種目の枠を越えた能力を前提とした領域の二重構造で編成されている。

§ 1 9 Saarland 州中等段階 指導要領(1993)の教科内容領域編成(Saarland,1993)

学習目標領域	学習目標と学習内容	種目	種目内の領域
学習目標領域 1: 運動習熟と達成	・個人スポーツ種目	器械体操	
		体操	・器具を用いない体操 ・器具を用いた体操 ・運動と音楽
		陸上運動	
		水泳	
	・球技	バスケットボール	
		サッカー	
		ハンドボール	
		ホッケー	
		卓球	
		テニス	
		バドミントン	
	バレーボール		
	・選択領域		
		学習目標と学習内容	
学習目標領域 2: 自主性、自己責任並びに社会的能力	・学習すること。 ・練習すること。 ・トレーニングすること。	・生徒は典型的な運動形態と運動性特質について知り、それらを互いに識別できなければならない。	
		・生徒は運動経過の特徴を指摘し、記述できなければならない。	
		・生徒は言葉や視覚的に与えられた示唆を実際に動きに移し替えなければならない。	
		・生徒は内容や運動を行うために必要な条件を自主的に整	

	えられなければならない。	
	・生徒は筋肉の動かし方に関する知識を獲得しなければならない。 ・生徒はトレーニング	
	の諸原理を知り、それを応用できなければならない。	
	・生徒は運動経過を規定する物理的条件について知らなければならない。	
・観察すること。 ・修正すること。 ・評価すること。	・生徒は間違った動きや動きの特徴を認識し、記述し、達成の違いを説明できなければならない。 ・生徒は、間違った動きを修正できなければならない。 ・生徒は、運動経過や達成行動を質的に評価する方法を知り、それを実際に活用できなければならない。	
・授業や競技のために人を組織すること。	・生徒は、責任を持って安全を確保し、補助できなければならない。 ・生徒は、自主的に授業のある局面や一時間の流れ全体を計画、実施、評価できなければならない。 ・生徒は、競技会の準備を進め、それを実施できなければならない。	・自主的に器具の準備、後かたづけをする。
・健康教育と環境教育。	・生徒は、健康にとって重要な、あるいは健康に効果的なスポーツ活動の形態を知り、個人の健康に対する自覚や健康的な行動を培えるようにする。 ・生徒は、(学校内外で)スポーツを行う際にみられる心理状態や人間関係が参加者全員の安寧に及ぼす影響を知るべ	

		きである。 ・生徒は、(例えばランニング、ワグ-フォゲル、自転車、あるいはウィンタースポーツと水辺スポーツを行う際に)積極的に自然に出会うことを通して、運動やスポーツを行う際の必須の条件となっている環境に対する感受性を向上させられるとともに適切な知識を獲得しなければならない。
--	--	---

注 1) 個々人の違いや施設条件、時間割編成等の諸条件を踏まえると、学習目標領域で達成目標を各学年に対応させることは無意味であるとされる。そのため、学習目標では達成要求水準が1-3で示されることになる(Saarland,1993,3)。

注 2) 選択領域を設定することによりテニス、卓球、バドミントン、あるいはホッケーのいずれかを達成要求水準レベル3で展開する道が開かれる。さらには、状況に応じて補足的に利用される。例えば、授業で教えなかった種目や二つの学習目標領域で求められるスポーツ種目固有の活動を実施できる。具体的には、スポーツ促進授業や運動能力を向上させるトレーニング、集中授業である(Saarland,1993,3)。

週3時間の授業時数を前提として単元配当時間並びに達成要求水準が示されている。日本と異なり、サッカーやバレーボールに配当される時間数が他に比べて少ないこと、したがって、達成要求水準が低くなっていることが特徴的である。しかし、この両者では、サッカーが6年生と10年生と離れた学年に設定されているのに対し、バレーが9年生、10年生に設定されている点で対照的である。

他方で、器械運動とバスケットボールに高い比重がかけられていることも特徴的である。しかし、器械体操が毎学年4週間実施されることになっているのに対し、バスケットボールは7,8年生と10年生で8週間単元として実施されている点は対照的である。

§ 2 0 Saarland 州中等段階指導要領で示された単元配当時間数(Saarland,1993,4)

年度	91/92	92/93	93/94	94/95	95/96	96/9	達成要求水準
クラス	5a	6a	7a	8a	9a	10a	
種目							
器械運動	×	×	×	×	×	×	3
体操	×		×				1
陸上運動	×	×	×		×		2
水泳		×	×				1
バスケットボール			×	×		×	3
サッカー		×				×	1
ハンドボール	×		×		×		2
ホッケー	×	×					1

卓球				× ×			1
テニス					×	×	1
バドミントン				×	×		1
バレーボール					×	×	1
選択領域	×	×	×	×	×	×	
男性教師 / 女性教師							

注 1) × : 4 週間単元 (12 時間)

注 2) × × : 8 週間単元 (24 時間)

注 3) 1 年に 4 週間単元を 6 回 (24 週間、あるいは 72 時間) 配当する。それ以外に実施できる時間は、選択領域に回す。

注 4) 達成要求水準 1 は、8 週間の授業後に達成されるべきである。達成要求水準 2 は、(達成要求水準 1 を含めて) 16 週間の授業後に達成されるべきである。達成要求水準 3 は、(達成要求水準 1 と 2 を含めて) 24 週間の授業後に達成されるべきである。

15.17.Schleswig-Holstein州(1997)

15.17.1指導要領作成に際して取られた基本的立場—中核的問題領域への取り組み—

中核問題への取り組みは、特に次のものを意味する。

- 1) 人間の共同生活にとって基本的な価値を決定すると共にその根拠を与えること並びにその実現を可能にするものと脅かすものが何かを明らかにしていく。そのような基本的価値とは、平和、人間の権利、多様な文化と一つの世界の中で共存すること、宗教、社会形態、国民並びに国家である (中核問題 1 : 「基本的価値」)。
- 2) 自然な生活基盤並びに自分自身の健康、それらの配慮並びにそれを脅かす原因 (中核問題 : 「自然な生活基盤の維持」)。
- 3) 経済や技術並びに社会的な生活条件の変化に潜む可能性と危険並びにそれが我々の生活にもたらす影響を評価する (中核問題 3 : 「構造変化」)。
- 4) 家族、職業、社会の中での男女平等の原理を根拠付け、確立すること並びにその実現を可能にするものと脅かすものが何かを明らかにする (中核領域 4 : 「平等」)。
- 5) 政治的、文化的、経済的な観点からみたあらゆる人の生活を保障する権利を根拠付け、確立していくこと、すべての生活領域の構築に責任を持ち、共同的に関与していくこと並びにそれらの権利の実現を可能にするものと脅かすものが何かを明らかにする (中核問題 5 : 「参与」) (Ministerium für Bildung, Wissenschaft, Forschung und Kultur des landes Schleswig-Holstein,1997,5-6)。

15.17.2授業づくりの原則

- 1) 教科と関連した学習
- 2) テーマ中心の作業
- 3) 教科の枠を越えた作業
- 4) 教育的にみて一般的な意味を持課題領域 (Ministerium für Bildung, Wissenschaft, Forschung und Kultur des landes Schleswig-Holstein,1997,7-9)

15.17.3教科の課題

「基礎学校のスポーツ授業の指導要領から話を進めれば、生徒達は以下のテーマ領域で多様な運動経験を得ることになる。

- ・運動を通して表現する。
- ・プレイする。
- ・器具で、あるいは器具を用いて運動する。
- ・走る、跳ぶ、投げる。
- ・水中並びに水辺で動く。

これらテーマ領域の基本形態が工夫される。基礎学校の備えている可能性を踏まえれば、水泳の中での経験を保証できる。スポーツの中での健全な運動行動とは何かに対する初歩的な理解も可能である。多様なダンス遊びや運動遊びは、スポーツ授業の中でも提供できる。しかし、それらは、基礎学校の他の授業でも提供可能である。中等段階の指導要領では、基礎学校で示されたこれらテーマ領域が、より洗練された形で提供される。そこでは、スポーツ的な次元が一層強調されることになる。」(Ministerium für Bildung, Wissenschaft, Forschung und Kultur des Landes Schleswig-Holstein,1997,15)

「学校スポーツは教育的である。それは、若者の全体性を志向した陶冶と教育の中核を構成している一要素である。学校スポーツは、適切な配慮が加えられることにより、中核的問題領域への取り組みによって保証される目標の実現に寄与する。教科の特殊性故に、学校スポーツは、他教科と関連しながら、その実現に向けて、他に代替しえない、固有で不可欠な貢献を為しえる。

スポーツ授業の中核に据えられるのが、運動である。それは、プレイとスポーツの中で形を整える。運動は、生徒達がルールに則してスポーツ種目ができる能力を保証する。スポーツ授業は、さらにそれを越えて、生徒達が運動欲求を充足する機会を保証する。スポーツ授業が午前中に有意義に実施されれば、他教科の引き起こす運動不足を解消することに貢献する。学校スポーツは、生徒の運動能力や感覚を刺激し、それを向上させる。

(体験、冒険、アドベンチャーとしてのスポーツ、競争と達成としてのスポーツ、身体的なフィットネス維持のためのスポーツ、楽しみや喜びとしてのスポーツといった) 様々なスポーツの意味は、学校スポーツの中で経験されるべきである。教育的学校スポーツは、一人一人の生徒が自己像を発達させることに貢献すべきである。その限りでは、学校スポーツは、様々な意味を保証すべきであるし、それにより余暇生活の形成に不可欠の貢献をなすことになる。

子どもや青少年の人格形成、特に自己環状と肯定的な自己像の発達には、精神的なものと同様に、プレイとスポーツを通して尊重される身体的な次元が効果的である。その際、主観的に体験された個人の達成能力や個人の学習の伸び、達成能力の違いの知覚、現実的な自己評価の発達にとって重要な役割を担っている。スポーツ授業は、様々な競争場面を提供することにより、達成を比較する機会を提供する。学校スポーツは、教育学的に配慮された競争場を設定することを通して、成功体験や失敗体験を克服することを学習する機会を提供しえる。特に、グループ内でプレイやスポーツの中での勝敗を建設的なものにしていくことが重要である。

スポーツという経験空間は、中核問題という意味での社会生活の反映といえる。その限りでは、社会的行動への自動的な転移を期待できないとはいえ、スポーツ場面の中では共同や共同責任が自覚され得ることになる。

環境保護と健康は、スポーツ授業のテーマである。健康教育では、健康をもたらす運動習慣を身につけさせることのみではなく、あらゆるレベルで、健康な生活を営む態度と健康を促進するトレー・員具に関する知識を保証していくことが重要になる。

共に生きている人々の健康を守ることもまた、健康教育の一部である。ともにスポーツを行っているパートナーに対する配慮や相互援助は、スポーツ的行動の現れである。

自然の中で行われるスポーツは、明らかに、人間の手による環境への脅かしである。学校スポーツは、スポーツを行う際に自然と優しく関わる方法を教えるべきである。それは、スポーツ授業の中で生徒達に自然を経験、体験させることで可能になる。

スポーツ授業は、社会的学習にとって実りある場を提供する。特に、プレイの中では、争いが肌身に迫って経験できる。そのため、争いの解決方法をテーマ化され、平和的でフェアな行動の練習がなされる。ここでは、問題や体験志向の学校スポーツにみられる危険を共同して解決していくことと同様に、趣旨が通るように説明できる能力が重要になる。

その際、例えば、互いの関係を同等にすること間文化的な学習の成立を目指した処理過程や障害を組み込んだそれが、モデルとして重要になる。スポーツ授業では、異文化の青少年や成人を排除する余地は全くない。

異文化のスポーツとの出会いは、あの形態に対する理解を促す。したがって、学校スポーツは、文化的な生活の構築に寄与することになる。

異文化を出自とするスポーツとの出会いは、異なる形態の理解を助ける。したがって、学校でのスポーツ授業は、文化的な生活形成に寄与することになる。

スポーツ授業は男女共習で実施され、男女平等の実現に貢献する。しかし、所与の条件を考慮して、男女のスポーツ能力の向上に支障をきたすようであれば、性別の細分化の措置が取られなければならない。

スポーツ授業に典型的にみられる行為志向は、後々まで認識学習に効果を発揮する。(トレーニング、健康、学習過程、バイオメカニクス、相互作用、意味付与、身体の実験としてのスポーツ、相互作用とコミュニケーションを営む場としてのスポーツといった)多様な現象を説明するには教科の枠を越えた授業が必要になったり、様々な教科の共同が勧められる。

学校スポーツは、学校祭やスポーツ祭、スポーツをテーマとした遠足、作業グループ、生徒のクラブ、プロジェクト等を通して学校生活を豊かなものとするとともに、前構成員の学校に対する強力なアイデンティティ形成に貢献する。」(Ministerium für Bildung, Wissenschaft, Forschung und Kultur des Landes Schleswig-Holstein,1997,15-17)

15.17.4教科指導が能力形成になしえる貢献

「キー能力並びに資質の育成に対し、教科スポーツは、その中核に据えられている運動志向と行為志向という特徴により独自の貢献ができる。スポーツの中では、生徒達が直接経験を収集し、実践的に学習できる状況が提供される。

教科の特殊性を踏まえると、キー概念の育成に対して教科スポーツの為しえる貢献は、次の5つの資質領域に分けられる。すなわち、事象や方法と関わる能力、自己と関わる能力、人と関わる能力である。さらに、自己と関わる能力は、運動能力、身体知覚、人格的・心理的能力に細分化できる。それらの中には序列はない。それらは、常に互いに関連しあっており、実際の授業の中では目標に応じて様々に強調されている。」(Ministerium für Bildung, Wissenschaft, Forschung und Kultur des Landes Schleswig-Holstein,1997,17)

§ 2 1 キー能力育成に対して教科スポーツが為しえる独自の貢献

(Ministerium für Bildung, Wissenschaft, Forschung und Kultur des landes Schleswig-Holstein,1997,17-18)

事象や方法と関わる能力 (Sach- und Methodenkompetenz)
<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツ種目固有の運動技術並びにスポーツのルールに関する基本的知識。 ・スポーツと健康、スポーツとトレーニング、スポーツと運動あるいはスポーツと自然といった、スポーツに関連しているものに関する基本的知識。 ・人間の身体の構造と機能に関する基本的知識。
自己と関わる能力 (Selbstkompetenz)
1)運動能力 (motorische kompetenzen)
<ul style="list-style-type: none"> ・(走、跳、投、泳ぐ、よじ登る、支持するといった) 基本的な運動形態ができる。 ・基本的なスポーツ種目固有の技術ができる。 ・補助、安全確保、救助の基本的形態ができる。 ・一般的なゲーム能力と個別的なゲーム能力。 ・リズムと関わる能力。 ・運動やプレイの形態と創造的、生産的に関わる能力。 ・(筋力、持久力、スピード、柔軟性と調整力、バランス能力といった) 運動性特質を自由に使いこなせる。
2)身体知覚 (Körperwahrnehmung)
<ul style="list-style-type: none"> ・(自己像といった) 自分自身の人格、(身体像、姿勢、身体言語といった) 自分自身の身体並びに運動の可能性に関する知覚。 ・(呼吸、新バック、発汗等) 身体的現象や運動への反応を知覚する能力。 ・(疲労困憊、疲れ、リラックス、緊張、安寧等) 身体の状態を知覚する能力。 ・(リズム、運動による空間や時間の分割、運動の流れ等) 自分自身や他人の表現形態や再現形態を知覚する能力。
3)人格的・心理的能力 (personale und psychische Kompetenzt)
<ul style="list-style-type: none"> ・自分自身の身体と運動を集中的に体験する能力。 ・スポーツの中で得られる体験や様々な感情に対処する能力。 ・スポーツ場面で設定された目標やそこに潜む危険を現実的に評価する能力。 ・自分自身に対する信頼感。 ・努力し、負荷に耐える能力。 ・生涯スポーツへのレディネス。 ・勝敗や成功、失敗を体験したり、それらに適切な対応のできる能力。
人と関わる能力 (Sozialkompetenz)
<ul style="list-style-type: none"> ・共同に関わったり、競争志向で対決する能力。 ・共同してスポーツ的行為を営んだり、創り上げる能力。 ・平和的、フェアに論議をしながら争いを解消していける能力並びにルールを発達させることのできる能力。 ・社会的過程や社会的行為を知覚する能力。 ・達成や関心等を規定している多様な前提条件を認識する能力、他人に配慮できる能力、強者を認め、弱者を援助し、仲間に入れることのできる能力。 ・自分自身並びに他人に対して責任がもてる能力。 ・ルールや約束事を守れる能力。

15.17.5テーマの領域構成

脱力や栄養といったテーマが、フィットした状態を保つというテーマ領域に設定されている。ここには、Blaz(1995)が指摘した身体観や健康観の変遷を見いだすこともできる。

§ 2 2 Schleswig-Holstein 州指導要領(1997)にみる領域構成(Ministerium für Bildung, Wissenschaft, Forschung und Kultur des landes Schleswig-Holstein,1997,19-32,36 より岡出作成)

テーマ領域	テーマの性格並びに意図	テーマ	目標	学年	
				必修	選択
フィットした状態を保つ	他領域とは異なる位置づけがなされている。運動とスポーツを通しての健康促進と健康教育という特殊な機能故に、一般的な意味でのフィットした状態を保つことは、他の全てのテーマ領域に関わっている。	1.持久力を向上させる。	<ul style="list-style-type: none"> - 持久性を発揮している際の身体の反応を知る。 - 持久力を向上させる。 - 持久力を向上させるトレーニング法を知り、それを活用する。 	5-10	
		2.筋力を高める(2.3.2 参照)。	<ul style="list-style-type: none"> - 機能的な筋力トレーニングを創る。 - 筋力に不可が加わった際の身体の反応を知る。 - 筋力を向上させる。 - 筋力トレーニングの方法を知り、それを活用する。 	5-10	
		3.柔軟性を高める。	<ul style="list-style-type: none"> - 柔軟性を高める機能的な方法を生み出す。 - 柔軟性を高めるトレーニング方法を知り、それを活用する。 	5-10	
		4.コンディショニングトレーニング	<ul style="list-style-type: none"> - コンディショニングトレーニングの方法を知る。 - コンディショニングを高める。 	5-10	
		5.フィットネスプログラム	<ul style="list-style-type: none"> - フィットネスプログラムを知り、実際にやってみる。 - 音楽に合わせた動きを知り、実際にやってみる。 - フィットネス運動を習得し、それを正しく行う。 	7-10	
		6.脱力	<ul style="list-style-type: none"> - 身体に対する感受性を 	9-10	

			<ul style="list-style-type: none"> 高める。 －身体感覚を向上させる。 		
		7.栄養	<ul style="list-style-type: none"> －身体意識を向上させる －スポーツに適した栄養を接種する。 	9-10	
		8.フィットネススポーツの理論	<ul style="list-style-type: none"> 身体並びに自分のフィットネスに関する知識を習得する。 	9-10	
器具での体操	<p>身体に対して独自の要求がかけられる運動経験が重要になる。魅力的で、しばしば危険さえ伴う形で調整力と胴の筋力を発達させるため、相互援助や責任をもって器具に接することが求められる。</p>	1.自由な体操	<ul style="list-style-type: none"> －信用を得る。 －不安に打ち勝つ。 －胴の筋力を発達させる。 －調整力を高める。 	5-6	
		2.ゲーム形態	<ul style="list-style-type: none"> －共同で行為する。 －器械体操の動きを魅力的にする。 －集中力を高める。 	5-6	
		3.器械運動の練習	<ul style="list-style-type: none"> －技術練習 －粗形態を形成する。 	5-10	
		4.器械体操を共同で創り、演技する。	<ul style="list-style-type: none"> －自主性を育成する。 －器械運動の動きのバリエーションを創る。 －創造性を高める。 		5-10
		5.自由な器械運動の競技会を行う。	<ul style="list-style-type: none"> －自分自身の達成能力を知る。 －責任を引き受ける。 －成功と失敗を体験する。 －比較を体験する。 	5-10	
走、跳、投	<p>走、跳、投は、単に人間の基本的な運動に留まるものではなく、スポーツを営むために必要な重要な前提条件となっている。多様なその形態には、身体的能力の一層の向上から陸上競技に必要な基本的技術の習得までの幅広い可能性が秘められてい</p>	1.多様な走り	<ul style="list-style-type: none"> －信用を得る。 －多面的な発達。 －調整力を向上させる。 	5-6	
		2.多様な跳躍	<ul style="list-style-type: none"> －信用を得る。 －調整力を向上させる。 －多面的な発達。 	5-6	
		3.多様な投動作	<ul style="list-style-type: none"> －信用を得る。 －多面的な発達。 －調整力を向上させる。 	5-6	
		4.走、跳、投のゲーム形態	<ul style="list-style-type: none"> －活動を高める。 	5-8	

	る。		<ul style="list-style-type: none"> －共同で行為する。 －集中力を高める。 		
		5.陸上競技の種目で求められる技術	<ul style="list-style-type: none"> －粗形態を形成する。 －技術練習。 	5-10	
		6.走、跳、投並びに陸上教具種目の競技会	<ul style="list-style-type: none"> －比較を体験する。 －責任を引き受ける。 －成功と失敗を体験する。 －自分の達成能力を知る。 	5-10	
泳ぐこと	水泳では、水という要素に取り組むことが重要になる。水上に留まったり、水中で安全に動けることが特に重要になる。水上での運動や潜水時の水中での運動は、すべての水辺スポーツを行う祭の前提条件である。そこから、様々な姿勢で様々な技術を伴ったスポーツ的水泳が生み出される。水という不慣れな要素は、救助をも含め、安全性と相互の責任を求めることになる。	1.水慣れ	<ul style="list-style-type: none"> －水中に沈む。 －水中で息を吐く。 －冷たさを感じる。 －信用を得る。 －水に慣れる。 	5-6	
		2.水を知る	<ul style="list-style-type: none"> －水中に飛び込む －うつ伏せ並びに仰向けで滑る。 －水の運搬能力を知る。 	5-6	
		3.ゲーム形態	<ul style="list-style-type: none"> －魅力を高める。 －全身的な巧みさを向上させる。 －共同で行為する。 	5-6	
		4.水泳の技術	<ul style="list-style-type: none"> －技術練習。 －粗形態の習得。 	5-10	
		5.競泳	<ul style="list-style-type: none"> －比較を体験する。 －成功と失敗を体験する。 －ルールを守る。 －自分自身の能力を評価し、うまく使うことを学習する。 	5-6	7-10
		6.泳ぎを創造する	<ul style="list-style-type: none"> －音楽にあわせてリズムよく泳ぐ。 －他人と動きを一致させる。 －創造性と自主性を向上させる。 		5-10
		7.飛び込み	<ul style="list-style-type: none"> －不安に打ち勝ち、信頼を得る。 		5-10

			<ul style="list-style-type: none"> - 運動経験を集める。 - 粗形態を習得する。 - 危険な状況を判断することを学習する。 - 技術練習。 		
		8.救助する	<ul style="list-style-type: none"> - 蘇生法を習得する。 - 救助法を習得する。 - 着衣泳と搬送泳法を練習する。 - 責任を引き受ける。 		5-10
リズムにのった動きと動きづくり	このテーマ領域の中核に据えられるのは、リズム能力である。リズム能力では、(音、視覚、筋感覚的刺激といった)外的に提供されたリズムに応じて運動できることが重要になる。その際、特に重要になるのが、音楽に合わせて動くことである。リズム能力は、自分自身のリズムに応じて運動を創り上げる能力を組み替える。リズム能力は、自主的に運動を創り上げることや演技を助演する祭りに創造的に表現される。	1.基本的な運動形態-音楽に合わせて踊る	<ul style="list-style-type: none"> - リズムを知覚する。 - リズムに合わせて動く。 - リズムを体験する。 - 刺激を動きに変える。 - 抑制を排除する。 	5-6	
		2.ダンス	<ul style="list-style-type: none"> - 一緒に踊る。 - 拍子を認識し、それを守る。 - 組み合わされたステップを練習する。 - 簡単なダンスのステップを習得する。 	5-10	
		3.体操	<ul style="list-style-type: none"> - 習得する、練習する、構成する。 	5-10	
		4.表現形態と再現形態	<ul style="list-style-type: none"> - 即興 - 一緒に演技を創り、上演する。 - 自主性を向上させる。 - 創造性と想像力を高める。 		5-10
パートナーと一緒に遊ぶこと並びにチーム内でプレイすること	このテーマ領域ではプレイのもつ方法的機能と並び球技に必要な具体的なプレイ能力、さらにはそれを越えた一般的なプレイ能力が重要になる。それはまず、統合的で、球技の枠を越えたものから球技に方向付けられた	1.遊具	<ul style="list-style-type: none"> - 信頼を得る。 - 不安に打ち勝つ。 - 調整力を高める。 - 遊具を知り、実際に使ってみる。 	5-6	
		2.総合的なプレイ能力	<ul style="list-style-type: none"> - 全ての球技の基礎的な行為能力の育成。 - グループにとけ込む。 - 共同と競争を経験す 	5-7	

	ゲーム能力までもが含まれる。それは、あるゲームを模倣し、維持し、妨害が合った場合にはそれを再生させる能力である。望ましいのは、まずは、すべてのゲームに共通する調整的、予期的、技術的、戦術的内容という観点からみた球技の枠を越えた基礎が提示される、統合的試みである。そのような基礎をもとにして、球技やパートナーと行うゲームを成功裡に行うことができる。		る。 －ルールを守ることを学習する。		
		3.球技並びにパートナーとのゲームに向けての一連のゲーム	－共同のスポーツ的行為を創り上げることを学習する。 －自分自身並びに他人に対する責任を引き受ける。 －共同で行為する。 －スポーツ種目固有の行為能力を身につける。 －ゲームの形態と創造的に関わる。	5-10	
		4.球技並びにパートナーとのゲームに必要な技術と戦術	－習得する、練習する、構成する。	5-10	
		5.トーナメント、スポーツ祭	－ルールに従う。 －イニシアティブを発達させる。 －責任を引き受ける。 －成功と失敗を体験する。 －自分自身の達成能力を知る。 －比較を体験する。	5-10	
		6.異文化の未知のゲーム	－異文化、異国、異なる時代のゲームを知る。	5-10	
水辺スポーツを行うこと	このテーマ領域では、風、水、波、海流並びに水辺スポーツの器具を扱う多様な技術を体験することになる。自然の中でスポーツをすることは、環境に優しく振る舞うことを求める。水辺スポーツでの行為状況は、そこで求められる実践的行為並びに自主的で、一部は自分に責任を持った行為のあり方を規定することにな	1.ボートハウス	－ボートやウィンドサーフィンに必要な配慮を習得する。 －行動上要求されるルールを確認し、それに従う。 －安全に対する自覚を促す。		5-10
		2.ボート/ウィンドサーフィンを体験する	－慎重に行動させる。 －共同で行為する。 －責任を引き受ける。		5-10
		3.水上でモノを扱う経験	－安全を確保する。 －ゲーム的な形態で行為する。		5-10

	る。共同作業、援助、慎重さ、確実性、豊富な知識が、特に重要になる。安全確保と救助のための措置は、授業の重要な内容を占める。全員が泳げることが、基本的な前提条件である。		<ul style="list-style-type: none"> －信頼を得る。 		
		4.水上スポーツコース	<ul style="list-style-type: none"> －技術を練習し、習得する。 －安全性を確保する。 －他人と動きを合わせる。 －共同で行為する。 		5-10
		5.水辺スポーツの理論	<ul style="list-style-type: none"> －（天候、水、スキー、航海術、船員チームといった）知識を獲得する。 －安全を確保し、航路を決める。 		7-10
		6.水辺スポーツにおける安全	<ul style="list-style-type: none"> －状況を正しく判断することを学習する。 －危険を認識し、回避する。 －救助法を練習し、習得する。 		5-10
		7.水辺スポーツを体験する	<ul style="list-style-type: none"> －比較を体験する。 －共同で行為する。 －ルールに従う。 －成功と失敗を体験する。 		5-10
回転することと滑走すること	<p>この領域は、極めて体験志向である。高価な道具や一部はまた、気候や地理的条件に拘束される内容が、プロジェクトの催しや見学旅行にとっては特に重要になる。屋外の自然の中に設置された練習場は、自然に優しく振る舞うことを求める。</p> <p>この領域の運動性の重点課題は、調整力に置かれる。回転したり、滑る器具によって生み出される不安定な状態は、特に平衡感覚を求めることになる。</p>	1.回転したり、滑りながら支持する	<ul style="list-style-type: none"> －回転したり、滑る道具を知る。 －信頼を獲得する。 －不安に打ち勝つ。 －調整力を高める。 －全身的な巧みさを向上させる。 －運動経験を集める。 －多様な回転。 		5-10
		2.ゲーム形態	<ul style="list-style-type: none"> －共同で行為する。 －安全を確保する。 －魅力を高める。 －回転したり、滑るプレイの形態を見だし、試す。 		5-10
		3.スポーツ種目の技術	<ul style="list-style-type: none"> －モノを慎重に扱う。 －持久力を高める。 		5-10

			<ul style="list-style-type: none"> －危険を認識し、回避する。 －粗形態を練習し、習得する。 －安全性を高める。 		
		4.競争形態	<ul style="list-style-type: none"> －フェアネスの練習。 －自分自身の達成能力を知る。 －比較を体験する。 －成功と失敗を体験する。 －回転したり、滑る競争の形態を組織し、トレーニングし、競技を行う。 	5-10	
		5.創造したり、体験する形態	<ul style="list-style-type: none"> －演技を一緒に創り、上演する。 －グループに溶け込む。 －環境に優しく振る舞う。 －自然を体験する。 －美的な感受性を高める。 －創造性と想像力を高める。 	5-10	
取っ組み合い遊び、格闘すること並びに守ること	<p>この領域のもつ意義は、所与の身体接触の形態をまずは自分自身で設定したルールによって、後には他人の設定したルールにしたがってテーマ化することにある。</p> <p>身体接触は、男子も女子にもみられる。ゲームや練習の形式という形態の中では、身体接触は、ルールに即して、また、シンボリック、プレイ的に筋力を測定することを意味する。「対話としての闘争」という理念が伝えら</p>	1.筋力を測定する基本的形態	<ul style="list-style-type: none"> －自分自身の達成能力を知る。 －成功と失敗を経験する。 －フェアに行動する。 －自身を培う。 －バランスを感じる。 －身体接触がどのようなものかを知り、それを許容する。 	5-10	
		2.ゲーム形態	<ul style="list-style-type: none"> －共同で行為する。 －成功と失敗を経験する。 －相手を尊重する。 －魅力を高める。 －ルールに従う。 	5-10	

れなければならない。参加者達は、安全で、ルールに保護された空間内で自分自身や相手を身体で行為しながら経験することになる。例えば、柔道のような「レスリング」を基礎としたスポーツ種目になって初めて、保護されて(ルールに守られて)互いに闘争するという理念が特定の技術と結びつくことになる。このようなスポーツ種目は、その理念からみて、「取っ組み合い遊び、格闘すること並びに守ること」にみられる根元的な対決方法が文化的に洗練された形態といえる。ボクシングは、学校スポーツとしては不適切である。	3.一つの格技を知る。	<ul style="list-style-type: none"> －劇化された格技 －儀式的な格技 －格技の儀式 －格技のスポーツ種目の技術を習得し、応用する。 	7-10
	4.格技の練習	<ul style="list-style-type: none"> －ルールに基づいて戦う。 －危険を知り、回避する。 －格技の技術の原理を理解する。 －格技の技術を応用する。 	7-10
	5.格技の原理	<ul style="list-style-type: none"> －体験、経験し、理解する。 	7-10

注 1) テーマは必修と選択に分けられる。

注 2) 必修のテーマか選択のテーマかは、学校の事情に応じて設定できる。しかしその際、指導要領に示された学年段階の指定は尊重されなければならない。

注 3) 学校段階別のテーマの配当、重み付け並びに必修、選択の扱いに関しては、2.4 の通り。すなわち、5-6 年生では、水辺スポーツを行うことから回転することと滑走することまでに至るすべてのテーマ領域が扱われなければならない。その際には、スポーツ運動やプレイ運動にみられる多様な運動形態が前面に重視されなければならない。各学年で 4 つのテーマ領域が重点的に扱われなければならない。そこでは、生徒達は意図的計画的な学習と練習を越えて、競技会を運営しなければならない。

7-10 年生ではすべての必修のテーマ領域が扱われなければならない。プレイ的な基本形態を越えてスポーツに固有の技能や能力が一層身に付けられなければならない。生徒達をトレーニング、組織化並びに自分たちで設定した公的なルールにしたがった競技会の運営に共同で参加させることがここでの目標になる。生徒達は、プレイ、スポーツ並びに運動の体験を集積し、学校卒業後も仲間とともにスポーツを営まなければならない。

水辺スポーツを行うことから回転することと滑走することというテーマ領域は、5-6 年生では学校の状況に応じて提供されなければならない。遠足も、その一つの可能性として実施し得る。

ギムナジウムの生徒達は、上級段階で設定されているスポーツ種目を十分に知る機会を保障されなければならない。

15.18. Niedersachsen州(1998)

15.18.1 目標

「1. 学校スポーツの課題と目標

学校スポーツは、スポーツ授業並びに組織化されたプレイや運動で構成されている。

1.1

学校スポーツでは、教科の担う課題は、Niedersachsen 州の学校法に規定されている陶冶課題から生み出される広範な教育的観点と関連づけられる。そのため、学校スポーツでは、成長期の人々の人格形成が重要な課題となる。そこには、特に、社会的に重要な価値へと方向付けていくことが重要になる。学校スポーツは、特に、強烈な情動的体験や豊かな意味ある経験を伴う学習の機会を提供することになる。

学校スポーツの中核的課題は、子どもと青少年の運動能力を発達させることである。学校スポーツの課題は、自分自身の運動能力を向上させ、安全に運動できる能力をできる限り高める機会を提供することにある。運動能力を向上させることを通して学校スポーツは、成長期の子どもたちの身体的、精神的、情緒的発達に寄与する。運動することは、また、自分自身の身体を体験したり、経験することや意図的に自分自身の身体に関わることを可能にする。したがって、学校スポーツではそのような体験や経験を取り上げ、成長期の子どもたちの発達段階に即して、できる限り広範な健康観を育むことが課題になる。

それ以外にも、学校スポーツは、伝統的なものと今日的なものの双方を含めた運動文化をその関連領域としている。運動文化は、確かに、制度化されたスポーツ種目によって方向付けられている。しかし、決してそれに尽きるものではない。運動文化は、意味、スポーツ種目、行為形態並びに構想の多様性にその特徴がある。そこには、多くの人々の抱いている運動に対する欲求や関心が反映されている。

学校スポーツは、スポーツを行う際に経験可能な多様な意味を生徒たちに経験させるべきである。例えば、共同生活、危険、冒険、形成、あるいは記録の向上や結果の比較といった観点のもとでスポーツを経験する機会を提供すべきである。その際、既存の運動、プレイ並びにスポーツの形態が用いられるとともに、それらを変化させ、新しい形態を生み出す機会を提供すべきである。学校スポーツは、将来ある生徒たちに常に変化する運動文化の形成過程とともに関与できる能力を育むべきである。そのためには、既存の諸形態の違いや多様性を判断できる能力を育むことが必要になる。

したがって学校スポーツは、運動教育に関する課題やスポーツに関連した課題を担うことに留まるものではなく、健康教育、社会教育、環境教育並びに余暇教育に不可欠な要素であるとともに、青少年に適した学校生活を保障していく際に不可欠な要素である。なお、学校スポーツの運営に際しては、発達段階をふまえて、一般的で広範な倫理的諸原則との関連や個人的行為を方向付ける諸原則を確立していくことができる(Das Nidesächsichen Kulturministerium,1998,6-7)。」

上記の文面にみられるように、学校スポーツの課題は、双方向的である。それは、一方では人格形成や発達保証といった一般的な教育的課題へと方向付けられている。他方で、運動文化の多様性やその発展への積極的関与に必要な能力形成へと方向付けられている(Das Nidesächsichen Kulturministerium,1998,6-7)。そして、このような学校スポーツの担う課題を前提に、生涯スポーツへと子どもたちを方向付けていくことが学校スポーツの中心的目標とされる。そして、その実現は、運動を生む喜びを表現する機会とできるために必要な能力や認識を通してなされることになる(Das Nidesächsichen Kulturministerium,1998,7)。具体的には、互いに関連し合う、1)事象と関わる能力(Sachkompetenz)、2)自己と関わる能力(Selbstkompetenz)、3)人と関わる能力(Sozialkompetenz)の三つの能力形成が求められることになる。それらは、具体的には表 22 のように示されている。

§ 2 3 Niedersachsen 州指導要領(1998)にみる学校スポーツで育成すべき能力

(Das Niedersächsischen Kulturministerium,1998,8-10)

事象と関わる能力 (Sachkompetenz)
<p>事象と関わる能力とは、プレイ、運動、身体、スポーツを行うために必要な能力並びに知識を並びにそれらを支える判断能力を指す。事象と関わる能力の向は、特に、生徒に対する以下の能力を保証していくものでなければならない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・様々な意味を志向しながら運動能力や達成能力を向上させる。 ・運動を創り出す。 ・設定された、あるいは自分たちで合意したルールにしたがってプレイする。 ・ゲームや競技の場面で慎重に行動する。 ・音楽やリズムにあわせて運動する。 ・自分のできる運動や表現の形態を創り出し、それを使えるように練習するとともに、新しい運動文化の形態の修得しようと取り組むことを通して、自分のできる運動のレパートリーを増やす。 ・運動経過の各部分や個々の過程の関連を知るとともに、それを自らの運動経験と関連づけ、実際に運動する際に活用する。 ・様々な意味が運動にどのような影響を与えるのかを試し、その影響を把握する。 ・学習やトレーニングの過程を組織したり、共同してプレイやスポーツを行う。 ・運動している際に自らの身体を知覚するとともに、身体の反応を理解する。また、実際に自分が運動する際に、自分自身の身体の状態に配慮する。 ・運動することが自分自身の生活設計にもつ意義を認識する。 ・運動することが環境に与える影響を知るとともに、その知見をふまえて運動する。 ・スポーツや運動が提供されるされる背後にどのような環境に対する配慮がみられるのかを知るとともに、その妥当性について判断できるようにする。 ・多様なスポーツの現象形態を評価できる判断基準を培う。
自己と関わる能力 (Selbstkompetenz)
<p>自己と関わる能力とは、特に、運動をしている際に個人にかけられる期待に自主的、意識的に応えようとする能力であるとともに責任を引き受けていく能力である。自己と関わる能力を向上させることは、生徒たちに以下の能力を保証していくものでなければならない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分自身のやりたい行為のアイデアを創造的に生み出していく。 ・自分自身の動きを評価する基準を設定するとともに他の基準を設定する。 ・自分の達成能力を現実に即して評価し、向上させようとし、失敗と成功の原因を認識する。さらに、それを自分自身に対する信頼感を生み出す源泉としていく。 ・運動していく際に不安とどのように関わればいいのかを学習する。 ・理想的な運動ができるように取り組み、自己の運動能力をそれに近づけようとするとともに自分自身の運動のイメージを生み出していく。 ・自分自身が運動に対してもつ欲求、関心並びに動機を認識するとともに、それについて検討する。 ・自分自身の身体に対する感受性を発達させるとともに、状況に適した行為ができるようにする。 ・スポーツをすることが心身の健康や健康な生活に対してもつ意味を知る。 ・人とともにスポーツをする際に必要な場面では、動きの中で自らの感情を表したり、それをコントロールする。 ・スポーツ場面で人と競争する際には、フェアネス、公平さ、身体的な安全保障並びに補助といった既存原則を踏まえて行動する。 ・スポーツの現象形態、その随伴現象並びにメディアで伝えられたその姿について省察する態度を培う。
人と関わる能力

人と関わる能力とは、特に、他人を援助することと関わって他人に感情移入しつつ、責任をもってプレイしたり、行動したりする能力並びに友達と共同して行動する能力を指す。人と関わる能力は、特に、生徒たちに次の能力を保証していくものでなければならない。

- ・スポーツ場面で共同して行動できる形態を創り出していく。
- ・他人に配慮することや共同することといった社会的行動がスポーツ場面で互いに協力する際の中核的要素であることを認識し、実際にそのように行動できるようにする。
- ・自分が行動を他人の行動に共感しながら同調させ、他人もまたそのようにする。
- ・補助したり、補助しようとする態度を育成する。
- ・特に、性的に固有な、様々な社会的行動様式を認識するとともにそれについて配慮する。
- ・責任とは何かを認識し、それを引き受ける。
- ・争いの原因を分析し、ルールでコントロールするとともに、継続させること。さらには約束事を受け入れるとともにそれを共に遵守する。
- ・スポーツ場面で共同体づくりに貢献する可能性を認識する。
- ・仲間と共にスポーツをすることを通して文化や社会に規定された人間の多様性を認識すると共に、偏見をなくし、異なる文化が自分たちの運動生活を豊かなものにする可能性を備えていることを理解する。

ものとの関わりの中に、身体の知覚が位置づけられている (Das Nidesächsichen Kulturministerium,1998,8)。他方で、自己と関わる能力の中で身体に対する感受性を発達させることが位置づけられている (Das Nidesächsichen Kulturministerium,1998,9)。

他人との交流とは、単に自分と異なる人間との交流のみならず、異なる文化、社会との交流をも想定したものであるとともに、それが自分たち自身の生活を豊かにする可能性を秘めていることを理解していく道を開くものであるとの認識がみられる (Das Nidesächsichen Kulturministerium,1998,10)。

15.18.2内容領域の構成

Niedersachsen 州指導要領は、広範な学校スポーツの課題並びに目標を実現していくためには、経験領域や学習領域に応じた内容領域の構造化が必要であるとしている。したがって、内容領域の構造化は、スポーツ種目をを用いてなされるとはいえ、それに尽きるものではないとされている。経験、学習領域 (Erfahrungs- und Lernfelder)とは、自ら運動することやプレイすること、スポーツをすることが備えている多様な可能性から導き出される、教育的にみて重要な領域であるという。また、各領域は、達成能力の向上と成果の比較 (Leistungssteigerung und Leistungsvergleich)、健康 (Gesundheit)、競争 (Handeln auf Gegenseitigkeit)、美的表現並びに創造 (ästhetischer Ausdruck und Gestaltung)、運動体験 (Bewegunserlebnis) 並びに身体経験 (Körpererfahrung) という意味の保証をめざす点で共通しているという (Das Nidesächsichen Kulturministerium,1998,11)。具体的には、表 23 の教科内容領域の体系が示されている。

§ 2 4 Niedersachsen 州指導要領にみる教科内容領域の体系 (Das Nidesächsichen Kulturministerium,1998,11、14-32 より岡出作成)

領域名	ねらい	下位領域並びに留意点
プレイする	・運動やスポーツをする場面で対象とプレイ的に関わるこ共同的に行動することは、単にこの経験、学	・スポーツ器具や日常的な道具を用いた自由で、探求的な遊び

	<p>習領域の内容に留まるものではなく、他の経験、学習領域で行為する可能性を提供してくれる。その意味では、この領域で示される内藤は、基本的にはプレイ的な運動行為に該当するものであるとともに、具体的な個々の経験、学習領域にも転移されえるものである。</p> <p>・運動遊びや球技の中で一般的なプレイ能力やプレイ形態にプレイ能力を獲得すること。そこには、プレイすることが参加者全員が対等である、社会的行為であることを知ることも含まれる。具体的には、次の下位領域が設定される。</p>	<p>ここでは生徒たちは、対象と様々に関わりながら、その特質を知っていく。そして、それを可能にするのは、運動経験並びに感覚的な知覚能力の向上である。様々な道具が準備されることにより、相互作用や共同行為が生み出され、多様な人間関係の経験も可能になる。</p> <p>・模倣遊び</p> <p>自分や他人の身体をそれを通して何かを表現したり、再現したり、伝えたりするメディアとして知覚する。そこでは、運動やジェスチャーが言葉やリズム、メロディー、空間づくりと結びつけられることになる。運動を通して感情や気分が直接表現されることになる。また、テーマがドラマ化され、出来事や経験がシンボルとして再現され、解釈される。再現的運動劇では、想像力が喚起される。再現的ゲームでは、身体や運動のテーマ、場面のテーマあるいはファンタジーや夢の構成要素を備えたテーマが考慮される。</p> <p>・ルールのあるゲーム</p> <p>ゲームを生み出し、それに関連するプレイの仕方を知るとともに与えられたルールに従うことを学習する。ルールに導かれたプレイの学習では、実際のプレイの経験とルール意識の啓蒙、拡大が交互に起こることになる。ルールは、満足できるプレイを行うという関心の範囲内で、参加者の関心や前提条件、さらには所与の外的条件に即したものでなければならない。</p> <p>なお、競技として行われるゲームでは、生徒たちは、基本的には、1)制度化された競技スポーツを知り、2)ルールの修正により求められるプレイがどのように変化するかを知るとともに 3)自分の考えたゲームの理念からゲームを生み出すことを学習していく。</p>
<p>水泳、潜水、飛び込み</p>	<p>水中で運動することがもつ特別な体験的価値は、自分自身の運動と水の抵抗、浮力並びに場合によってはそこで生じる水の流れの間に生じる相互作用を感覚的に経験することである。水中で安全に運動で</p>	

きる能力は、水中、水辺、水面下での多様な活動を可能にしていく。それは、水中並びに水辺で行われる余暇活動を可能にするとともに生命の安全を図ることを可能にする。水中での運動は、子どもから高齢者までをも引きつける魅力を備えている。また、様々な視点を設定することにより、魅力的で、健康を促進する行為領域となり得る。

水中での身の安全を確保すること並びに水中で長く運動できることは、授業の重要な目標になる。生徒たちは、少なくとも一種目は泳げなければならない。さらに、それ以外の泳法、飛び込みの基本形態並びに潜水も修得されなければならない。多様な泳法、泳力の向上並びに救難水泳の技術の習得は、個々の水泳の技術の体系的トレーニング以上に重視される。

なお、授業で実現すべき意味は、その一部が交錯するとはいえ、次の二つに大別できる。

1) スポーツや運動の形態への方向付け。ここでは、水という運動空間における人間の運動の可能性をスポーツや機能性という視点から最大限に向上させることが求められる。そこでは、多様な水泳、潜水、飛び込みの技術が中核に据えられる。

2) 水中並びに水辺で楽しむこと。ここでは、水という運動空間が、多様な体験を保証する場として用いられる。水泳遊びや潜水遊び、潜水、水中への自由な方法での飛び込み、様々な水辺状況での水泳、リラックスした泳ぎ、水中での水泳や自由な運動が、この次元を特徴づける視点である、

器械体操と巧技

この経験、学習領域では人工的に生み出された運動の組み合わせの中で体験性の高い運動が行われる。例えば、跳躍、振り、堅い地面や動きやすい器具の上でのバランス、ひねりや倒立経過を含む運動、腕や手で身体を巧みかつ、スリリングに支持する運動形態がそこには含まれる。回る、ひねる、支持する、つり下がる、降る、支える、よじ登るといった基本的活動と結びつけて、多様な運動形態が生み出される。その一部は伝統的な器械体操にみられるものであり、一部は自由に行われる体操の多様な運動を生み出している。生きている「道具」を用いたりそれを利用してのパートナーとのアクロバットは、巧

	<p>技を生み出していくことになる。</p> <p>この経験、学習領域では、伝統的に培われてきた運動や自由に行われてきた運動が用いられる。古典的意味での体操器具ではない、多様な道具が用いられ、独自のアレンジがなされる。巧技と並び上演やグループでの演技といった表現方法も用いられる。運動能力の不備については、適切な措置が取られることになる。</p> <p>巧技に取り組むことは、任意の運動形態を行うことのみではない。それは、演技の際の優雅さや軽さを求めるものである。したがって、難度をあげることもより運動の質が重視される。競技としての器械体操で行われているようなあ身体の伸びは、二次的な意味をもつに過ぎない。</p> <p>手や足を用いてバランスを取ったり、支持したり、ザイルを上ることとしてのよじ登りは、器械体操の基本活動に含まれる。近年では、人工的な登坂壁を自由によじ登る活動が生み出されてきた。それは、生徒たちにとって多大の魅力を備えている。</p>	
<p>体操的、リズム的、ダンス的な動きづくり</p>	<p>この経験、学習領域には、ダンスや体操の動きを創造的に生み出すこと、動きづくり並びに姿勢や機能的、技術的観点からみた運動や姿勢の矯正が行われる。</p> <p>動きを生み出すことは、身体づくりと動きづくりづくりと密接に関連している。それらは、互いに影響を与え合っている。自分自身の身体に対する感受性を高めることを通して、自分自身が運動をしているという感情が培われるとともに、その際に個人的な運動表現としての運動づくりという意味でのリズム化が経験される。空間、時間、律動性、走、はねる、跳躍する、振る、ひねるといった基本形態の経験から出発し、器具を用いたり、用いなかったりする、あるいは一人やパートナーと共に行う多様な運動形態や運動の組み合わせ、さらには、まとまりのある動きが生み出されていく。したがって、この経験、学習領域は、一方で伝統的な体操とダンスの形態を含みつつ、運動の中並びに運動を通しての表現を経験するという意味で、運動を探求する機会を提供する。</p> <p>運動のまとまりを生み出すという視点と並びこの</p>	

経験、学習領域には、姿勢や動きを矯正する機能的、技術的側面も含まれている。それは、同時に、経験、学習領域を越え性格を備えている。悪い姿勢や一面的な身体への負荷を補償したり、それを矯正していくためには、機能的、補償的練習を実際に行っていくことが重要である。

生徒たちは、この経験、学習領域で何かを創造していく過程と同時に既存の運動形態に取り組む機会を提供されることになる。この両過程が、範例的に経験されなければならない。まとまりのある運動を創り出したり、運動を行う際には、音楽が重要な役割を果たす。また、まとまりのある運動を創り出す過程では、伝統的な道具のみならず、新しい道具も用いるべきである。

この経験、学習領域では、フィットネス運動といった、現代的な内容も取り扱える。その目的は、生徒たちがこの領域で自ら判断し、行動できる能力を培うことである。

運動に自由に関わることは、通常、成人、特に男子には不慣れである。機能的側面を全面に押し出すことを通してそのような運動の抑制状態を乗り越えていくことが重要になる。知覚へと方向付けられた体操やダンスの形態は、自分自身の身体に対する感情を発達させることに貢献しえる。まとまりのある運動を創り出すことは、独自の運動の流れを生み出す運動の要素を提示することにより可能になる。互いが信頼しあえる授業の雰囲気は、そのような場面では特に重要になる。それは、個人の運動課題の解決方法が真剣に受け止められ、既存の判断基準に照らして低く評価されないための前提条件である。

走、跳、投、歩

この経験、学習領域の主たる特徴は、主に歩、走、跳、投といった基本的動き並びにその基本的な動きの組み合わせによって生み出される状況を個人あるいは共同で克服していくことにある。それらの動きは、部分的には日常的な行動にとっても基本的なものであるとともに、多数のスポーツ的な運動にとっても基本的なものである。この経験、学習領域は、様々な条件の下で屋外で行う運動であり、それと結びついた特殊な経験や経験ができる点にその特徴がある。

	<p>走、跳、投の運動は、従来、「より速く」、「より高く」、「より遠くへ」を目標として掲げて、「勝利すること」を目指してきたし、運動の最適化を目指した努力を求めてきた。しかし、それにより、この経験、学習領域に秘められ、発達の促進という観点からみて重要な経験や体験並びに運動形態が十分活用されてきたわけではなかった。</p> <p>散策することは、学校外のイベントでその教育学的価値を見いだされてきた。散策では、方向感覚の獲得に必要な基本的な能力や技術が不可欠である。</p> <p>この経験領域では、生徒たちが共同して行動できるような運動形態も提供されるべきである。</p> <p>多様な動きの習得を求める意図は、走、跳、投の能力向上のみにあるわけではない。より速く、より高く、より遠くへのみではなく、動きの正確さや危険の回避をもが志向されなければならない。達成基準や評価基準を変えることにより、常に異なる生徒が勝利する可能性がでてくる。グループの成績のみが問われる多種目競技や競技会は、特別な意義が与えられる。多様性を保証し、走、跳、投が中心に据えられ学校スポーツ祭が組織されるべきである。</p>	
<p>ローラースポーツ</p>	<p>ローラーを用いた運動は、空間の把握に貢献する。加速が大きくなることにより、運動空間が新たな形で体験される。用いる器具が異なるうとも、そこではバランスをとることが求められる点で共通している。ローラーを利用することで、外見上は何の苦勞もしていずに加速が体験され、バランスを取ることが要求される。また、特にカーブでは加速が身体にどのような影響を与えるのかを重点的に体験できる。</p> <p>より広範な運動経験は、選択する器具により可能になる。その際には、選択した器具の可能性が最大限に活用されなければならない。例えば、自転車は多様な観点から活用可能であるし、特別な道具を用いなくとも、通常とは異なる体験を生み出す可能性を秘めている（例えば、ゲレンデでの自転車乗り、巧みさを競うこと、速さを競うこと、サイクリング、サイクルサッカー）。これら以外にも、ローラースケート、インラインスケート、ローラーブレード、フープでの体操でもより広範な経験や体験が保証される。</p>	

	<p>ローラースポーツでは、多様な器具が活用できる。その発展は目を見張るものがあり、運動の可能性を変えていっている。しかし、運動の可能性を広げるのは新しい器具だけではない。既存の器具のコンセプトや変化や限定されていた器具の使い方を多様にしていくことが重要である。それとの関連でいえば、新しいスポーツの形態や器具と批判的に対峙することが重要になる。</p>	
<p>雪上、氷上スポーツ</p>	<p>雪や氷は、多くの子どもや青少年にとって運動の可能性を広げる魅力を備えている。雪や氷は、日常の運動で保証されているバランスを崩すとともに、滑るという体験をもたらす。そこでは、しばしば器具の助けを借りながら、滑り降りる能力が重要になる。楽に滑ることができ、歩くことや走ることに比べて大きな加速が体験できる点にその価値がある。滑ったり、加速する体験を通して、新しい空間感覚が得られる。</p> <p>ゲレンデを選択することにより滑走時に得られる運動体験が左右される。雪上や氷上の運動が生み出す魅力は、アイススケートや動きを組み合わせるスキーのように、動きを工夫することで高まる。</p> <p>伝統的に培われてきた運動形態や技術以外にも雪上や氷上で行う動きやその組み合わせのバリエーションは多様に存在する。指導に際しては、滑降の技術よりも、安全を確保した上での集中的な滑降の体験の保証を優先させるべきである。</p> <p>この経験、学習領域では、有意義な余暇とは何かを典型的に問い直す機会が提供される。また、体験の価値という観点からすれば、この経験、学習領域は遠足に対して特別な価値をもつ。氷上での運動は、一部は屋内でも行える。しかし、屋外の自然の中で運動が、優先されるべきである。</p>	
<p>水辺スポーツ</p>	<p>器具を用いた水辺での運動は、風、水流、波並びに様々な天候といった自然条件の影響を受ける。また、海洋や河川を運動空間に変えていく。しばしば冒険的に思われる自然との関わりが、特殊である。同時にそれは、自然環境に対して敏感かつ責任をもって行動する多様な機会を提供する。これらの諸要素の影響を受けながら水上を移動する道具を用いてのスポーツは、自己規律、パートナーに対する責任</p>	

	<p>感を強く求める。特に、ボート競技にみられる同調は、その一例である。</p> <p>全体として、水辺で行うスポーツの多様性が経験されなければならない。そこでは、水辺で行うスポーツの毒性やその危険性についても伝えられなければならない。この経験、学習領域の内容は、その体験的価値からみると遠足に対して特に重要な意味をもつ。</p>	
<p>武道</p>	<p>この経験、学習領域の特徴は、スポーツのルールに規定された試合状況で力や技の巧みさといった、身体を用いる手段を通して負けなければならないパートナーと直接身体を接して対決することにある。当事者間の身体的な距離の近さ、身体接触が必要になること、自分自身やパートナーの力を感じることで、情緒的にも強烈な対決が生み出される。</p> <p>文明化され、責任ある形でパートナーと身体的に対決するという意味でのスポーツ的意味での武道は、他人に傷害を負わせる可能性がある。しかし、それが誤解される危険がある。部外者や特に初心者は、武道の目標が互いに相手を傷つけることだと考えている。このような誤解は、この経験、学習領域では常にテーマ化されなければならない。そこでは、自分自身でパートナーを傷つけないように責任をもつという基本姿勢が必要不可欠である。この基本姿勢は、試合の際に自分自身の成果を収めること以上に高く評価されなければならない。</p> <p>武道は、無配慮に成果を求めるものではない。試合は、スポーツ的な意味に即して、身体的な力や動きの巧みさを競うゲームにならなければならない。そのため、責任を自覚することや自己規律が求められる。身体的条件や様々な能力がスポーツの試合に与える影響は、大きい。</p> <p>スポーツ的な試合の目標は、ルールに規定された試合に理念に基づき、相手に勝利することである。その際には、ルールの理念を遵守したフェアネスが大切になるのであり、形式的なルールのみが重要なわけではない。これは、特に、力量の差や体重差、性差があるパートナー間での試合や競技の形態を演示する際に、特に重要になる。</p> <p>女子に対してこの経験、学習領域は特別な意味を</p>	

	<p>もつ。彼女たちは、伝統的に、ゲーム的、スポーツ的に戦う状況が男子ほど多く保証されてこなかった。彼女たちは、身体的な力を特に、脅威として体験してきた。自分自身の力やルールに基づき身体を使ってパートナーと戦う体験は、より強固な自意識の形成に貢献する。</p> <p>授業では、生徒たちは互いに競い合う多様な形態を知らなければならない。彼らは、自分なりの解決方法を見つけ、それを試してみなければならない。</p> <p>フェアな戦いをするという条件下であれば、武道種目を学校スポーツに取り入れることができる。あるいは、スポーツ的な武道の組み合わせられる。ここでは、ルールに規定された戦いの理念、パートナーを傷つけないという行動が設定されることになる。</p>	
<p>乗馬</p>	<p>この経験、学習領域は、動物との関わる経験を保証し得る唯一の領域である。</p> <p>人間と馬との間に生み出される信頼関係を前提にして新たな運動の世界と体験の世界が開かれることになる。他の経験、学習領域ではなしえない様々な感覚が乗馬を通して発達させられる。馬といっしょに動くことにより、特に、バランス能力やリズム感が身に付いていく。</p> <p>乗馬の目標は、騎手の言葉を通して馬に、三つの自然な歩行様式で行える様々な運動課題を与えることにある。曲乗りの目標は、歩行とギャロップをさせながら馬上で巧みな運動課題をこなしていくことにある。</p> <p>この経験、学習領域の中心は、古典的意味での馬上スポーツではない。馬と信頼関係を築くことであり、動きを合わせることであり、騎手と馬の間での援助の仕方を理解していくことである。そのため、散策、ゲレンデでの乗馬、曲乗り、ポニーに乗ってのゲーム、跳躍、調教と、西部劇にでてくる乗馬法といった多様な乗馬の領域に必要な基礎が培われる。</p> <p>この経験、学習領域の複雑さは、共に運動することに対する生徒並びに馬の心理的な準備を整えること並びに互いに行動する準備を整えることにある。すべての意味を取り込むことにより、馬と関わるには自分をコントロールし、自主的に行為できる力が要求さえることになる。それは、馬や自然に責任を</p>	

もって行動する体験を保証すると共に、それを実践する機会を保証することになる。
--

これら個々の領域は、一方でそこで学習される知識、技術といった観点から区別されている。例えば、ローラースポーツでも、器具を扱う基本的な技術が位置づけられている。しかし、内容領域の体系化に際しては、それらではなく、そこで期待される経験が全面に押し出されている。そして、その経験は、日常生活では得られにくい経験という観点が含まれている。例えば、ローラースポーツや雪上、氷上でのスポーツにみる加速体験である。あるいは、乗馬にみる動物との関わり経験である。

他方で、いわゆる競技化、制度化されたスポーツ種目を位置づけながらも、それに内容をとどめるといふ発想はみられない。むしろ、スポーツの多様性を強調するスタンスやすることのみにとどめないスタンスがとられている。例えば、器械体操と巧技といった経験、学習領域でスポーツクライミングが紹介されていることや多様な道具の活用が示唆されていること、さらには、走、跳、投領域において、歴史的な運動形態を知ることが求められていたり、団体競技としてそれを行うことが求められていること、あるいは、ローラースポーツといった経験、学習領域が設定されていることは、その一例である。また、水辺スポーツでは、そこで用いられる道具には経済的関心や合理性に関する関心がみられることを知ることが求められている。あるいは、走・跳・投の運動でエコロジーという観点からみたスポーツの問題点の検討が求められていることもその一例である。

なお、Niedersachsen 州の指導要領は、NRW の改訂案とは異なり、身体に関わる領域を独立させてはいない。むしろ、それは、健康教育という観点から個々の経験、学習領域内に位置づけられている。例えば、プレイする領域内の再現遊びや水泳、潜水、飛び込み領域、体操的、リズム的、ダンス的な動きづくりにみる身体関連の記述である。

なお、これら個々の経験、学習領域については、以下のコメントも付されている。

プレイするという経験、学習領域では、他領域にも転移可能な内容を備えているとされる。なお、自分の身体が何かを表現するメディアであることを知ることが、プレイするという領域の下位領域である、再現遊びで位置づけられている(Das Niedersächsischen Kulturministerium,1998,14)。さらに、同じく、ルールのあるゲームではルールに対する自覚の形成が目指されている(Das Niedersächsischen Kulturministerium,1998,15)。そこでは、また、ゲームで成果を収めていくには技術や戦術の学習が必要になること、誰もが満足できるゲームを保証していくためにゲームを組織化していくことが求められている。さらに、既存のゲームができるのみではなく、地域的なスポーツを取り上げることにより文化に対する理解を深めることやゲームの進化とは何かに対する理解を深めることも求められている(Das Niedersächsischen Kulturministerium,1998,15-16)。

水泳、潜水、飛び込みでは、水中での身体の反応や水中での運動の効果を健康教育の一部分として扱うよう求められている。さらに、競泳のみならず、水中での基本的な動きや心理的な不安の克服、さらには救難水泳もそこで扱う内容とされている。(Das Niedersächsischen Kulturministerium,1998,17)。

器械体操と巧技では、巧みな動きを多様に習得することが求められている。しかし、それは、器械体操の技を習得していくことに終始するものではない。むしろ、道具や発表の仕方、演技の仕方に多様性が柔軟なアイデアを求めている。他方で、単に巧みな動きと言うことで難度を高めることを求める風潮があるが、それに対しては警告を発している。運動の質向上の必要性が指摘されているのである。さらに、スポーツクライミングのように、新しく開発されたスポーツを取り入れる可能性も示唆されている(Das Niedersächsischen Kulturministerium,1998,18-20)。

「走・跳・投の運動」では、1)エコロジーという観点からみたスポーツの問題点の検討、2)自分自身の身体の反応の知覚、3)歴史的形態を知ること、4)共同的行為を保証することが求められている。それはまた、多様な評価基準を導入することにより、様々な子どもたちが評価される機会を保証しようとする試みともいえる(Das Nidesächsische Kulturministerium,1998,23-24)。

水泳では、1)スポーツ的、機能的観点からみた水中での人間の動きの獲得並びに最適化と 2)水を多様な体験を生み出すメディアとして活用することが示唆されている(Das Nidesächsische Kulturministerium,1998,17-18)。なお、水泳(Schwimmen,Tauchen,Wasserspringen)と水辺活動(auf dem Wasser)は区別されている。

ローラースポーツ(Auf Rädern und Rollen)では、新たなスポーツの形態やそこで用いられる器具に批判的立場をとれることが特に重要とされる(Das Nidesächsische Kulturministerium,1998,25)。

水上、雪上スポーツでは、多様な器具存在の背景には経済的関心がみられることを知ること、さらには既存のスポーツを雪上や水上で試したり、それを雪上や水上という条件を考慮して修正することも求められている(Das Nidesächsische Kulturministerium,1998,26-27)。

水辺活動では、経済性や合理性という観点から用いる器具や道具について知ることが求められている(Das Nidesächsische Kulturministerium,1998,28)。

武道では、そのねらいを相手を傷つけることと誤解しているケースが指摘されている。したがって、そのような誤解を授業でテーマ化することが求められている。また、それは、女子にとって特に意味があると指摘されている。その理由は、従前、ほとんど経験されていないこと、特に危機として身体に加わる力を体験することが重要であるとされている。また、それは、自分の力を用いたり、パートナーと力を発揮し合う体験は、自意識の形成に貢献するとされている(Das Nidesächsische Kulturministerium,1998,29-30)。

15.19.Rheinland-Pfalz州(1998)

15.19.1目標

教科スポーツの担う教育的課題は、次のように記述されている。

「多くの生活領域にみられる急速な社会変化を前に、陶冶概念を新たに、幅広く捉えることが必要不可欠になっている。新しい陶冶概念のもとでは、学校教育の課題は、自己決定と社会的責任の緊張関係を保ちながら、生活に立ち向かっていく能力を保証していくことである。それに必要な能力は、事象と関わる能力、方法論的能力並びに人と関わる能力である。

これら諸能力は、運動、認識、社会領域での人格の発達を促す、全体的な能力といえる。それは、教科の枠を越えて活用可能であるべきであるし、学校外の領域でも活用可能なものであるべきである。

このような陶冶概念の拡大に伴い、中等段階の教科スポーツには、生徒たちに対してスポーツの行為能力を発達させるという課題が設定される。

教科スポーツ独自にみられる運動や行為への指向性は、生徒たちに直接経験を可能にする。したがって、教科スポーツは、陶冶の実現に向けて、他では代替不可能な貢献をする。

「スポーツ」は、今日の社会ではきわめて幅広い概念として捉えられている。それは、大衆スポーツと競技スポーツの両極の間を運動、プレイ並びにスポーツというコンテキストの中で常に修正され、差異化されている。学校スポーツは、スポーツを授業で取り上げるというのであれば、このような変化の妥当性を教育学の基準に即して検討しなければならない。

スポーツ概念の変化を考慮するには、伝統的なスポーツ種目への固執を放棄し、幅広いスポーツ種目

や今日的な運動形態を取り込むことが好ましい。さらに、スポーツ授業をスポーツという現象に多視点的に関わるものにしていくべきだといえる。

学校スポーツの内容は、以下のスポーツ教育学の視点を志向すべきである。

- ・達成（競技。成果）
- ・緊張／プレイ（危険。冒険）
- ・印象（身体の経験）
- ・健康（フィットネス。安寧）
- ・表現（再現。形成）
- ・共同（社会的学習。環境）

その際、教育的な視点は、スポーツ種目固有に強調されることもできるし、互いにそれらを結びつけることもできる。

多様な意味は、単に一授業や一内容で実現可能なものだと考えるべきではない。それは、むしろ、長期的に実現すべき課題と捉えるべきである。それは、生徒たちが学校在籍中に（例えば、走ることを達成や健康、印象といった視点のもとで行えるというように）様々な内容が多様な視点のもとで実施可能であることを経験すべきことを意味している。」（Mnisterium für Bildung, Wissenschaft und Weiterbildung,1998,6-7)

§ 2 5 Rehinland-Pfalz 州指導要領にみる目標構造
(Mnisterium für Bildung, Wissenschaft und Weiterbildung,1998,7-8)

教科スポーツの課題		
<p>多くの生活領域にみられる急速な社会変化を前に、陶冶概念を新たに、幅広く捉えることが必要不可欠になっている。新しい陶冶概念のもとでは、学校教育の課題は、自己決定と社会的責任の緊張関係を保ちながら、生活に立ち向かっていく能力を保証していくことである。それに必要な能力は、事象と関わる能力、方法論的能力並びに人と関わる能力である。</p> <p>これら諸能力は、運動、認識、社会領域での人格の発達を促す、全体的な能力といえる。それは、教科の枠を越えて活用可能であるべきであるし、学校外の領域でも活用可能なものであるべきである。</p> <p>このような陶冶概念の拡大に伴い、中等段階の教科スポーツには、生徒たちに対してスポーツの行為能力を発達させるという課題が設定される。</p> <p>教科スポーツ独自にみられる運動や行為への指向性は、生徒たちに直接経験を可能にする。したがって、教科スポーツは、陶冶の実現に向けて、他では代替不可能な貢献をする。</p>		
教育学的視点		
<ul style="list-style-type: none"> ・達成（競技。成果） ・緊張／プレイ（危険。冒険） ・印象（身体の経験） ・健康（フィットネス。安寧） ・表現（再現。形成） ・共同（社会的学習。環境） 		
事象に関わる能力 (Sachkompetenz)	方法論的能力 (Methodenkompetenz)	人と関わる能力 (Sozialkompetenz)

6) 内容

§ 2 6 Rehinland-Pfalz 州指導要領にみる内容領域構成
(Mnisterium für Bildung, Wissenschaft und Weiterbildung,1998,9)

領域 A	
器械体操。体操・ダンス。陸上運動。水泳。	
領域 B	
中核グループ	バスケットボール。サッカー。ハンドボール。バレーボール。
選択グループ	バドミントン。ホッケー。テニス。卓球。
領域 C	
内容を固定しない。運動、プレイ、スポーツという幅広いスポーツ概念の内容を授業のテーマとして設定できる。	

§ 2 7 Rehinland-Pfalz 州指導要領にみる各領域の配当時間数
(Mnisterium für Bildung, Wissenschaft und Weiterbildung,1998,12-13 より岡出作成)

学年段階	5	6
内容		
一般的な基礎的運動能力づくり	20 時間	
領域 A	40 時間	60 時間
器械体操	15 時間	10 時間
体操とダンス	10 時間	10 時間
陸上運動	15 時間	10 時間
水泳		30 時間
領域 B	15 時間	15 時間
バスケットボール		
サッカー		
ハンドボール		
バレーボール		
領域 C (自由裁量)	25 時間	25 時間
計	100 時間	100 時間

注 1) 導入段階 (5-6 年生) の授業では、一方では多様な運動経験が保障されなければならない。他方で、基本的な目標と内容の習得に必要な前提条件が培われなければならない。

注 2) 9-10 年生では週当たり 2 時間の授業時数が想定される (年間 65 時間)。したがって、領域 A 並びに領域 B に対して計 40 時間、領域 C に対して 25 時間を年間で想定する。

注 3) 7-9/10 年生のスポーツ授業には、1) 中等段階 終了後に社会に出ていく生徒達に対して定期的にスポーツを行うよう体系的に導いていくという課題と 2) ギムナジウム上級段階の目標 / 内容への準備という二つの性格が付与される。また、そこでの内容と学習目標に対して 2 つの要求レベルが設定される。すなわち、個々の学校に適したスポーツ種目を設定し、要求レベル 2 の授業を実現することであり、領域 C に関しては学校種や学校段階に応じた多様な取り組みの余地を残しておくことである。

注 4) 上級段階を備えているギムナジウム並びに総合学校では、10 年生終了までにギムナジウム上級段階の指導要領に示されたグルー

プロバのすべてのゲーム（バスケットボール、サッカー、ハンドボール、バレーボール）が教えられなければならない。

15.20.Hessen州基礎学校指導要領(1995)

15.20.1 教科の全体像

Hessen 州の基礎学校の教科の全体像は、8 教科 / 領域から構成されている。

§ 2 8 Hessen 州基礎学校の教科 / 領域構成の全体像(Hessisches Kultusministerium,1995,33)

B1	宗教	プロテスタント宗教 カソリック宗教
B2	ドイツ語	
B3	事実	
B4	算数	
B5	美的陶冶	美術 音楽
B6	スポーツ	
B7	外国語	
B8	母国語	

なお、スポーツの授業時数は、週 3 時間と規定されている。また、施設や組織的な条件が整っているところでは、2 時間 続きの授業を実施してはならないとされている (Hessisches Kultusministerium,1995,224)。

15.20.2 スポーツ授業の目標と課題

スポーツ授業は、児童の学習可能性並びに経験から生み出される学習過程を重視する。それは、児童の遊びや運動の発達を促すと共に精神運動系の行為能力を培い、共同して行為したり、何かをつくり出したいという児童の欲求に配慮する。学校内と学校外のスポーツ活動を結びつけることによりスポーツ授業は、余暇の有意味な形成や貢献すると共にそれにより生活の質的向上に寄与する。

基礎学校のスポーツ授業では、運動を学習する際に自由な試行錯誤が保障される。それは、楽しく運動し、その楽しさを高め、感情豊かな表現を生み出すとともにそれを一層発達させるとともに運動をする際に児童たちが抱えている諸問題を除去することをねらい、多様な運動経験と身体の経験をもたらすものである。それによりスポーツ授業は、児童の健全な発達にとって重要な貢献をすることになる (A パート 1.6 プレイと運動を用いた経験並びに C パートの健康教育参照)。

児童達は、同じ興味関心や異なる興味関心があることを教科スポーツの場で経験する機会をもつ。ここでは、ルールを守ったり、友達と一緒に何かを行う際のきっかけとしてルールを活用するレディネスを備えることと同様に自発的な行為ができるようになることを求められる。

スポーツ授業はまた、同時に、特別な才能を備えた児童と同時に器官や調整力に問題を抱えたり、姿勢上の問題を抱えている児童をも同時に視野に入れている、促進授業と見なされるべきである。全児童の運動能力を向上させることを通してスポーツ授業は、できずに周辺に追いやられる児童をいなくする

とともに一人一人の児童の心身の発達並びに社会性の発達に寄与することになる。

児童は、次の一般的目標で示されている能力、技能、知識、洞察力をスポーツ授業の中で身につけるべきである。

- ・運動とスポーツに対する継続的な関心の発達。
- ・表現能力と知覚能力の発達（動きづくり、身体意識、空間並びに仲間の知覚）。
- ・重要な調整能力の発達（反応、空間感覚、リズム、バランスと細分化）。
- ・コンディショニング能力の発達（持久力、筋力、スピード）。
- ・他人と一緒にプレイしたり練習したりする際に必要な社会的能力の向上。
- ・肯定的な自己像の発達（自分自身の能力を現実的に評価する）。
- ・練習する際やプレイする際、競争する際や動きを創り出す際に必要なスポーツ固有の行為形態を生み出す。
- ・健康的、衛生的な行動様式を身につけると共にそれを応用する。
- ・学校生活に積極的に関与する能力を身につける。
- ・スポーツを行う際に自然や環境に対して思いやりのある行動がとれる。

スポーツ授業は、生徒の不安に対しても配慮する。そのためには、児童の欲求から出発し、現実的な自己評価のできる能力を向上させることが必要になる。具体的には、新たな体験や経験の追求を求めたり、安全性を求めたり、受容されていることを求めることである。

これら諸欲求との関連でいえば、競争と達成の比較は意義あることであるし、自分自身の能力や可能性を評価したり、それを向上させることに対して重要な貢献をする。また、社会的関係の構築に寄与する(Hessisches Kultusministerium,1995,222-223)。

15.20.3スポーツ授業の内容領域編成

基礎学校の内容領域の全体構造は、表 28 のように示されている。

§ 2 9 Hessen 州基礎学校指導要領にみる内容領域構成(Hessisches Kultusministerium,1995,225-237)

領域名	目標	備考
プレイすること	この行為領域では児童は、自由にプレイすることや拘束を受けながらプレイすることの中で様々なモノや遊具に馴染んでいく。そこで児童は、仲間やグループといっしょにプレイしたり、フェアに振る舞う能力を身につけていく。彼らは、(投、捕、回す、地面に打ちつける、当てる、打つといった)ボールを扱う技術を身につけていくとともに、ゲームの戦術やゲームに必要な技術を適切に用いることを学習していく。それを通して児童は、グループやチームで行うゲームに参加できる能力を身につけていくとともにできるゲームのレパートリーを広げていく。	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎学校の担う教育全体の課題という観点からすれば、スポーツ授業中にプレイすることは、知覚能力と方向感覚を向上させるとともに、想像力と調整能力の向上に寄与する。 ・スポーツ的なゲームとしてのプレイすることは、筋力、持久力、スピード、柔軟性並びに全身的巧みさといった、基本的な運動性特質の向上に決定的な影響を与える。 ・この時間に設定される課題は、日々の運動時間を運営する際にもうまく活用できる。ゲームでは、できる限り仲間はずれがでず、全員が積極的に参加できるように

		実施される。
ツウルネン	この行為領域では児童は、体育館にある様々な体操器具や遊具、登坂具で自分たちの運動能力を試すと共にそれを向上させていく。児童は、遊び的な状況の中でよじ登ったり、高い所にあがったり、バランスを取ったり、回転したり、走り、跳躍すること、支持して、振動することといった日常生活にみられる基本的な運動技能を身につけていく。回ること、走ることと跳躍すること、支持し振動することといった領域で児童は、簡単な運動課題を克服し、ツウルネンに必要な簡単な基本的技能を身につけていく。彼らは、運動課題に取り組んでいる際に互いに安全を確保し、補助し合うことを学んでいく。	・1/2年生では遊びながら克服でき、成功体験が保障できる（私はできる！）ような課題が前面に出される。器具と遊び的、練習的に関わるそのような形態の後に3年生以降では、ツウルネンの基本的な技の習得がスタートする。
リズムに合わせた運動とダンス	児童はこの行為領域で自由な運動経過や拘束を受ける運動経過の中で自分自身の身体を用いた表現能力を確かめ、向上させていく。開かれた運動状況や様々なモノ、小さな器具、手具と創造的に関わる中で児童は、美的経験を得ていくと共に様々な運動要素や基本的な運動形態を知っていく。	・リズムに合わせた運動とダンス領域は、教科の枠を越えた授業に対して多様な可能性を秘めている。
走・跳・投	この行為領域では児童は、多様なプレイや練習を通して走、跳、投の能力を習得し、向上させる。その際、児童は、（筋力、持久力、スピード、調整力といった）基礎的な運動能力を向上させていく。彼らは、（腕の使い方、腕と脚の協応、姿勢といった）走、跳、投で用いられる特定の技術の意義を徐々に認識していくとともにそれらを（スタンディングスタートとクラウチングスタート、そり跳び、はさみ跳び、オーバーハンスローの）粗形態に応用していく。	・児童期後期は技術の基礎を培う時期であり、活用されなければならない。しかし、スポーツ種目固有の標準化された技術は基礎学校の段階では重要ではない。また、記録の比較も重視されるべきではない。できる限りチーム対抗競技を行う。また、運動能力の低い子どもの能力の伸びや努力を評価すべきである。
回る・滑る・乗り物で移動する	この行為領域では児童は、教師に指導されたり、プレイ的、実験的に取り組みながら回ったり、滑ったり、移動したりする器具を用いて前進する可能性を探っていく。ここでは、児童のバランス感覚、平衡感覚や調整力が向上すると共に新しい運動技能が身に付けられていく。回ったり、滑ったり、乗り物に乗って移動したりする能力と並び操作したり、方向を変えたりモノを運ぶ能力も身に付いていく。	・移動性の高まっている今日の余暇社会では、回ったり、滑ったり、乗り物に乗ったりしながら移動する運動が重要になっている。子どもの（環境）世界を志向するスポーツ授業は、それらに配慮しなければならない。これらを考慮すると、空間内で子どもたちの方向感覚を高めることが不可欠になる。また、バランスを維持すると共にスピードを評価できるようにすることも、スポーツ授業の課題になる。さらに、ローラーブレードやスケートボード等を用いるには他人と協力することや他人に配慮することが必要になる。さらに子どもたちは、スポーツ種目に囚われないプレイや運動経

		<p>験を通して余暇を活用していくために必要な刺激を受けていく。</p> <p>事実教授や交通教育の目標と関連させながら、教科の枠を越えた作業を進めることも求められる。</p>
水泳	<p>水泳という行為領域では、三つの異なる要求レベルが目標設定の基礎に置かれる。時間的、空間的条件並びに児童の個人差に配慮しながら、できるレベルを設定したり、次のレベルを設定する。水泳の授業の目標には、泳ぐ際に重要になるルールも含まれる。</p>	<p>・水泳という行為領域では、一方では「水」という要素に親しむ楽しさを培とともに、それに留まらず、体系的に様々な泳法を用いて水中を効率的に移動する動きを培わなければならない。しかし、教師は、その際、スポーツ授業の他の行為領域以上にこの領域の児童の個人差が大きいことを見過している。特に、水に親しみのない児童には、水中での安全を確保すると共に不安を取り除くことが重要になる。基礎学校終了時には、全員がドイツ水泳憲章の銅章を満たすことを目標とする。なお、時間的制約や児童の学習状況を踏まえ、学習過程を検討する際には次の3つの段階を区別する。</p> <p>第1段階：水慣れ</p> <p>第2段階：一つの泳法の習得</p> <p>第3段階：それ以外の泳法の習得</p> <p>また、組織上可能であれば、年間を通してレベルに応じたグループで指導することも有意義である。</p>

これら 6 領域は、児童が多様なスポーツ運動を経験できることを意図した、運動教育 (Bewegungserziehung) で設定されている視点を含みこんだものがある。また、これらの個々のスポーツ領域を越えた授業を実施することが求められている。その前提には、多様な運動の機能を通して豊かな経験が保障されていくという認識がある。また、全ての領域では諸能力を培うことが求められている。さらに、児童はスポーツ種に目専門的な表現に徐々に慣れ親しんでいくことを求められている。

- ・自主的に一人ないしは複数の仲間と関わることができる。
- ・自主的にグループ内で反応する。
- ・仲間との遊び、グループでの遊び、班、パーティー、チームでの遊びを組織する。
- ・言葉で支持を伝える。
- ・作業課題を満たす (Hessisches Kultusministerium,1995,225)。

15.20.4 授業の構成原理としての多視点的な運動経験の保障－他教科との関連の可能性－

Hessen 州指導要領は、スポーツ科の授業を行う上での基本原則として次の 6 点をあげている。

1) スポーツ授業は、児童の運動経験を踏まえて行われる。すなわち、日常生活で運動を行っている状

況を取り上げ、それを個人の達成能力に応じて一層発展させる。

- 2) スポーツ授業並びに授業外の学校スポーツは、常にプレイと達成の要素を備えた運動活動を志向している。
- 3) スポーツ授業は、児童に多視点的な運動経験をもたらす。
- 4) スポーツ授業の時間は、授業にリズムを保障するという意味では、1週間の時間割上でいえば、分散して行われなければならない。
- 5) スポーツ科学並びにその関連諸科学は、スポーツ授業にとって重要な機能を発揮する。
- 6) 授業の評価は、スポーツ授業で設定された課題に即したものでなければならない(Hessisches Kultusministerium,1995,222-223)。

この第三の基本原則は、他教科との関係を検討していく上で重要である。それは、次のように説明されている。

「運動経験は、スポーツ運動性の能力の育成に限定されてはならない。それどころか、次の学校スポーツの担う諸次元が考慮されなければならない。

- ・健康、リクリエーション並びに安寧
- ・社会的コンタクト
- ・自然と体験
- ・危険を冒すことと自分の能力を証明すること。
- ・練習することとできること。
- ・闘争することと競技。

児童の知覚の幅を広げようとするれば、他教科、特に美的、文化的関連を備えた内容が取り込まれる(Hessisches Kultusministerium,1995,222-223)。

さらに、他教科との関連については、別途次のように示唆されている。

「他方で、スポーツ授業の内容とテーマは、できる限り他教科のそれと関連を持たせるべきである。特に 1/2 年生では、日々の運動時間の課題と歩調を合わせることが好ましい。」(Hessisches Kultusministerium,1995,225)

さらに、他教科と関連させた個別領域の授業構想の可能性についても示唆されている。例えば、「リズムに合わせた運動とダンス」領域は、教科の枠を越えた授業に対して多様な可能性を秘めていると指摘されている(Hessisches Kultusministerium,1995,230)。

15.21. Baden-Wuerttemberg州(1994)

15.21.1 教科の体系

Baden-Württemberg 州の Realschule の教科体系は、表 29 の通り。

§ 3 0 Baden-Württemberg 州の Realschule の教科体系 (Ministerium für Kultus und Sport Baden-Württemberg,1994,13)

必修教科	選択必修教科(7年以降に1科目選択)
宗教	自然
ドイツ語	技術
外国語。通常、英語。	人間と環境

社会科学領域（歴史、社会科、地理）	第二外国語
数学・自然科学・技術領域（数学、物理、科学、生物、技術）	
音楽・実践領域（音楽、絵画、スポーツ）	
宗教学の代替教科としての倫理	
7年生と8年生では、情報技術の基礎知識が必修のプロジェクト授業の必修テーマとなる。基礎知識は、10年生終了時点で情報技術資格が取得できるように、8年生から10年生にわたり様々な教科や作業グループで扱われる。	

15.21.2 教科の目標

「学校スポーツは、全体的な陶冶と教育の中核的な構成要素である。それは、生徒の身体的な発達と共に精神的、情緒的な発達を促すという点で生徒の発達に不可欠である。学校スポーツの担う重要な目標は、多様な運動経験、身体経験並びに達成経験を基礎に生涯にわたるスポーツに対する関心を培うことである。さらにそれは、身体の発達に必要な運動刺激を与えると共に安寧や健康の実現に寄与することになる。

インパクトの強い基本的経験を通して学校スポーツは、全体的な人格形成に対して重要な影響を与える。具体的には、新しい運動の獲得、社会的、美的、創造的観点からの運動課題の解決、運動や行為の安定化、まじめな練習、身体や精神に対する負荷、成功と失敗の体験を通してそれに寄与する。

教科の担う中心的課題は、次の通りである。

- ・多様なスポーツ活動ができる能力をつける。
- ・運動、プレイ並びにスポーツを通して感覚や身体、モノや社会の経験を与える。
- ・姿勢、態度並びに主観を築く。
- ・知識を伝える。
- ・健康教育に寄与する。

努力したり我慢したりできるようにすること、成功するとう自信、自己規律、自己に対する信頼感といった姿勢や態度は、自分自身の生活設計に肯定的な影響を与える。」(Ministerium für Kultus und Sport Baden-Württemberg,1994,27)

15.21.3 内容領域編成

§ 3 1 Baden-Württemberg 州の Realschule のスポーツ科の」内容領域構成と配当時間 (Ministerium für Kultus und Sport Baden-Württemberg,1994)

	領域名	下位領域	各学年配当時間数					
			5	6	7	8	9	10
スポーツ領域	個人スポーツ種目	・ツルネン / 器械体操 ・体操、運動と表現 ・陸上運動 ・水泳	43	43	女子 32	女子 32	16	20
スポーツ領域	プレイする	・バスケットボール	20	20	女子 24	女子 24	16	20

	ことーブレ イ	・サッカー ・ハンドボール ・バレーボール			28 男子	28 男子		
スポーツ領域	選択領域	・新種目の導入 ・スポーツ能力の向上 ・必修授業の内容の深め	9	9	12	12	16	20

注 1) 選択領域は、スポーツ授業の可能性と生徒の生活や経験の可能性を広げる。選択領域の内容は規定しない。それは、授業で扱ったスポーツ種目の学習をさらに深めたり、不足を補ったり、より幅広いスポーツ活動を紹介していくことに活用される (Ministerium für Kultus und Sport Baden-Württemberg, 1994, 27)。

注 2) 個々の下位領域の授業案では、選択領域を除き、身体の実験、能力と習熟が内容提示の項目として設定されている。

注 3) 7年生以降は、男女でスポーツ領域 と の時間数が異なっている。 では女子の時間数が、 では男子のそれが多くなっている。体操、運動と表現が女子のみとなっていることがその原因。

注 4) スポーツ領域 の下位領域で種目名が出てくるのは、7年生以降。

注 5) 5-6年生スポーツ領域 の下位領域は、1)子どもの経験世界にみられる運動や遊び、2)スポーツを行う能力向上、3)必修授業の内容の深め、4)新種目の導入、5)競技形態(6年生)となっている。なお、7年生以降にはバドミントン、卓球、テニス、野球、ホッケー、柔道、カヌー、ボート、ラグビーといった種目が示されている。

注 6) 7年生以降、スポーツ領域 では女子に対して2種目以上、男子に対しては3種目以上教えるように規定されている。

注 7) 8年生以降、スポーツ領域 、 両領域では男女ともに2種目以上を教えるように規定されている。また、10年生男子では、スポーツ領域 でえ3種目以上教えるように規定されている。

15.21.4 授業実施上の留意点

・学校スポーツは、スポーツ授業以上のものである。それは、学校生活の中心的位置を占める。・・・学校スポーツはさらに、学校外で行われているスポーツとの橋渡しをするとともに文化的生活の一部に接近することを容易にする。そのため、スポーツ授業を越えて父兄、他の学校やクラブと協同でのスポーツプロジェクト、スポーツ祭、学校内外での競技会が存在する。

・共同で運動したり、プレイしたり、競技したりする際に得られる社会的経験は、特に、フェアな態度やチームとして行動する能力を培っていく。すなわち、友達の欲求や希望を満たしたり、グループ内にみられるダイナミックな関係を体験したり、争いの原因を明確にし、それを慎重かつ生産的に解決し、人と共同して自主的にスポーツを行う能力を培う。人とかがわる能力は、攻撃に対処したり暴力なしに生徒達が関われるためには不可欠である。

・健康教育内では学校スポーツは特に重要な位置を占める。授業で得る身体感情と身体意識、身体の緊張、脱力の知覚と制御、運動を行う際に必要な知識は、生徒が健康的な生活を営もうとする態度や週間を育成し、学校卒業後もそれを維持していくことに寄与しなければならない。

・特に、生物、倫理、人間と環境世界、音楽と宗教といった諸教科と関連づけられる。そこでの重点的テーマは、人間の身体と健康教育、特に外国人生徒の統合という視点からみた社会学習、美的、全体的な身体の実験としてのダンスといったものである。同様にして、諸教科を多様に結びつけるテーマが設定できる。

・5-6年生は男女共習で、7年生以上は男女別習で授業を行う。

・スポーツ授業は、週2時間以上設定されなければならない。運動時間の与える効果は、その頻度と規則性に決定的に左右されることがその理由である。(Ministerium für Kultus und Sport

Baden-Württemberg,1994,28)

引用・参考文献

天野正治他(1993) ドイツ統一と教育の再編．成分堂：東京．

天野正治(1998) ドイツの教育．東信堂：東京

Aschbrock,H.(1986) Fachdidaktische Analysen zur Qualität des Sportcurriculums in Nordrhein-Westfalen.Lit:Münster

Aschbrock,H.(Red.)(1995) Schulsport in Bewegung. Verlag für Schule und Weiterbildung:Bönen

Aschbrock,H.(Red.)(1997) Curriculumrevision im Schulsport Vorschläge zur Curriculumrevision im Schulsport in Nordrhein-Westfalen.Landesinstitut für Schule und Weiterbildung:Soest.

Aschbrock,H.(1997a) Neue pädagogische Leitideen in den Sportcurricula. In:Balz,E.u.a.(Hrsg.) Wie pädagogisch soll der Schulsport sein ?. Hofmann:Schorndorf. pp.63-78

Aschbrock,H.(1999) Schulsportcurricula im Kontexte zukünftiger Schulentwicklung. In:Kottmann,L.u.a.(Hrs.) Sportpädagogik zwischen Kontinuität und Innovation. Hofmann:Schorndorf. pp.48-59

Balz,E.(1992a), "Fachdidaktische Konzepte oder:Woran sich der Schulsport orientieren ?". Sportpädagogik,16 (2):13-22

Balz,E.(1995) Gesundheitserziehung im Schulsport. Hofmann:Schorndorf.

Balz, E.(1996) Analyse bundesdeutscher Lehrpläne. Institut für Sportwissenschaft Regensburg:Regensburg.

Behörde für Schule, Jugend und Berufsbildung(1994) Lehrplan für Haupt- und Realschulen, Gesamtschulen und Gymnasien Sekundarstufe Sport Amt für Schule

Behörde für Schule, Jugend und Berufsbildung(1998) Handreichung für den Sportunterricht in der Primarstufe. D & K Druck

Borkenhagne,F.u.Scherler,K.(Hrsg.)(1995) Inhalte und Themen des Schulsports. Ritzsch:Sankt Augustin.

Das Bayerischen Staatsministerium für Unterricht,Kultur,Wissenschaft und Kunst(Hrsg.)(1992) Amtsblatt Sondernummer 17. Lehrplan für das bayerische Gymnasium Fachlehrplan für Sport Teil (Basissportunterricht, Erweiterter Basissportunterricht,Grundkurs,Leistungskurs,Sportförderunterricht) . Kommunalschriften-Verlag:München

Das Bayerischen Staatsministerium für Unterricht,Kultur,Wissenschaft und Kunst(Hrsg.)(1992a) Amtsblatt Sondernummer 18. Lehrplan für das bayerische Gymnasium Fachlehrplan für Sport Teil (Differenzierter Sportunterricht der Jahrgangsstufen 7 mit 11 des Gymnasiums) . Kommunalschriften-Verlag:München

Das Niedersächsischen Kulturministerium(Hrsg.)(1998) Grundsätze und Bestimmungen für den Schulsport. Schroedel:Hannover

Der Kultminister des Landes Nordrhein-Westfalen(Hrsg.)(1981) Richtlinien Sport Bd. .2.korrigierte Aufl. Greven & Benhold:Köln(1980).

藤田英典(1998) 教育改革の論理と構造．佐伯胖他編．世界の教育改革．岩波書店：東京． pp.3-20

今井重孝(1998) 欧州連合の教育改革ードイツとフランス．佐伯胖他編．世界の教育改革．岩波書店：東京． pp.46-64

Garreis,G. u. Willfahrt,A.(1998) Wolf Lehrplanung Sport 8/2 Sportstunden mit Pfiff.Wolf Verlag:Regensburg

Hessisches Kultusministerium(Hrsg.)(1995) Rahmenplan Grundschule. Wiesbadeener Graphische Betrieb GmbH:Wiesbaden

- Hüpner,H.(1994) Entwicklung und Implementation eines curricularen Reformprogramms. Lit:Hamburg
- Hummel,A.u.Balz,E.(1995) Sportpädagogische Strömungen-Fachdidaktische Modelle-Unterrichtskonzepte Auf dem Weg zu einer fachdidaktische Landkarte. In:Zeuner,A.u.a.(Hrsg.) Sport unterrichten Anspruch und Wirklichkeit. Academia:Sankt Augustin. pp.28-40
- Kretschmer,J.(1995) Zur Auswahl und Ordnung der Inhalte im Hamburger Lehrplan für den "Sport in der Grundschule". In:Borkenhagen,F. u. Scherler,K.(Hrsg.),Inhalte und Themen des Schulsport. Academia:Sankt Augustin. pp.219-228
- Landesinstitut für Schule und Weiterbildung(Hrs.)(1998) Sportunterricht ohne Grenzen Handreichung. Verlag für Schule und Weiterbildung:Bönen
- Minister für Bildung, Jugend und Sport des Landes Brandenburg(Hrsg.)(1997) Unterrichtsvorgaben Sport in der beruflichen Bildung Sekundarstufe . Wissenschaft und Tecchnik Verlag:Berlin.
- Ministerium für Bildung, Wissenschaft, Forschung und Kultur des landes Schleswig-Holstein(Hrsg.)(1997) Lehrplan für die Sekundarstufe der weiterführenden allgemeinbildenden Schulen Hauptschule, Realschule, Gymnasium, Gesamtschule. Glückstädter Werkstätten:Glückstadt
- Mnisterium für Bildung, Wissenschaft und Weiterbildung(Hrsg.)(1998) Rheinland-Pfalz Lehrplan Sport Sekundarstufe (Klassen 5-9/10) Hauptschulen Realschulen Gymnasien Regionalen Schulen Gesamtschulen. Sommer Druck & Verlag:Grünstadt..
- Ministerium für Kultus und Sport Baden-Württemberg(Hrsg.)(1994) Amtsblatt des Ministeriums für Kultus und Sport Baden-Württemberg Bildungsplan für die Realschule Lehrplanheft 3/1994. Necker-Verlag:Villingen-Schwwenningen.
- MSWWF(1999) Sekundarstufe Gymnasium/Gesamtschule Richtlinien und Lehrpläne Sport. Ritterbach Verlag:Frechen
- Pädagogisches Landesinstitut Brandenburg(Hrsg.)(1997) Handreichung Sportunterricht in der gymnasialen Oberstufe.Wissenschaft und Tecchnik Verlag:Berlin.
- Regensburger Projektgruppe(1999) Die bewegte Schule-Anspruch und Wirklichkeit. Sportpädagogik.23(1) :3-10
- Saarland Der Minister für Kultus,Bildung und Wissenschaft Saarbrücken(1988) Lehrplan Sport Grundschule Klassenstufen 1 bis 4 '88. Krüger Druck+Verlag GmbH:Dillingen.
- Saarland Ministerium für Bildung und Sport(Hrsg.) Kehrplan Sport Allgemeinbildende Schulen Klassenstufen 5-10 /93. Krüger Druck+Verlag GmbH:Dillingen
- Stibbe,G.(1999) Schule auf neuen Wegen-Herausfordern für den Schulsport. In:Kottmann,L.u.a.(Hrs.) Sportpädagogik zwischen Kontinuität und Innovatioin. Hofmann:Schorndorf.pp.60-76
- Trebels,A.H.(1999) Sportunterricht in der Neuen Gymnasialen Oberstufe. Sportpädagogik.23(1):11-17
- Vorleuter, H.(1995) Ein neuer Lehrplan für das bayerische Gymnasium-Ein neuer Fachlehrplan für Sport. In:Borkenhagen, F. u. Scherler, K.(Hrsg.), Inhalte undThemen des Schulsports. Academia:Sankt Augustin. pp.195-205
- Vorleuter, H.(1998) Vom Curricularen Lehrplan zum Fachlehrplan-Die Lehrplanentwicklung im Fach Sport von 1974 bis 1996. In:Liedtkee, M.(Hrsg.) Sport und Schule Geschichte und Gegenwart. Julius Klinkhardt:Bad Heilbrunn/OBB.pp.197-218